

フランクフルトにおけるロゴセラピーの形成
－第二次世界大戦前の思想と実践に着目して－

2018

兵庫教育大学大学院
連合学校教育学研究科
学校教育実践学専攻
(岡山大学)

荒金 誠

目次

序章 研究の課題と方法	1
I 課題と意義	1
II 先行研究	4
(1) 諸富祥彦の「フランクフル研究」	5
(2) クライトマイアーの「フランクフル研究」	6
(3) ツォックの「フランクフル研究」	7
(4) リーマイアーの「フランクフル研究」	8
(5) バッチャニーの「フランクフル研究」	9
III 方法と構成	11
第一章 力動性心理学の受容とその批判的継承	16
I ウィーンの風土とフランクフルの精神的な素地	16
(1) ウィーンの風土	16
(2) フランクフルの精神的な素地	18
IIフロイトの精神分析の受容と批判	20
(1) フロイトへの接近と精神分析の受容	20
(2) フランクフルによる精神分析批判	21
III アドラーの個人心理学の受容と批判	22
(1) アドラーへの接近	22
(2) 論説「心理療法と世界観」	23
(3) 論説「主知主義の心理学に対して」	25
(4) 論説「愛と責任」	26
(5) 個人心理学への反駁	27
IV 力動性心理学からの離脱の背景	29
(1) アラーズとシュヴァルツの影響	29
(2) 離脱の内実	30
第二章 シェーラーからの思想的影響	34
I 心理学主義との闘い	34
(1) 思想転換の背景	34
(2) 基盤としてのシェーラーの哲学	35
II シェーラーの哲学的示唆	36
(1) シェーラーの倫理的な人格主義への傾倒	36
(2) シェーラーの哲学的人間学の創造的受容	37

第三章 青少年相談所の設立とその活動	41
I モデルとしてのザウアーの青少年相談所	41
(1) ザウアーがとらえたドイツの青少年の困窮	41
(2) ザウアーによる「青少年相談所」設立の構想とその実現	42
II フランクルによる青少年相談所の創設	44
(1) ウィーンにおける青少年の状況	44
(2) 青少年相談所創設の経緯	45
III フランクルの青少年相談所での実践	46
(1) 青少年相談所の来談者	46
(2) フランクルの青少年相談の方法	47
(3) 青少年相談の具体的実践	48
(4) 青少年相談所の成果	51
第四章 ログセラピーの構想	55
I 青少年相談所をめぐる論争	55
II ログセラピーの構想の契機	56
III 理論と実践の融合	59
IV ログセラピーの構想	61
V 心理療法における精神の自律性の尊重	62
第五章 ログセラピーの人間観	67
I 心理学主義からの離脱	67
II 「精神 (Geist)」への眼差し	68
終章 研究のまとめと課題	73
I まとめ	73
II 今後の課題	76
引用参考文献一覧	80

序章 研究の課題と方法

I 課題と意義

本研究の課題は、第二次世界大戦前のフランクル (Viktor Emil Frankl, 1905-1997) の思想と実践に着目して、「ロゴセラピー形成のプロセス」を探究していくことである。

フランクルが公の場で初めて「ロゴセラピー」¹について話したのは、1926年、講演の中においてのことであった。さらに、ロゴセラピーの技法としての「逆説志向 (Paradoxe

Intention)」²を実践したのは1929年からであり、それを発表したのは1939年のことであった。また最初に「実存分析」という術語を用いたのは1933年であった³。すなわち、フランクルが彼の思想の核心とも言えるロゴセラピーの構想を生み出したのは、彼が強制収容所に収容される前の1930年代であり、彼の思想は、1930年代には既にある程度、構築されていたのである。フランクルは、彼の思想の体系的な著作として『Ärztliche Seelsorge』(邦訳『死と愛』)を第二次世界大戦直後に著すが、その思想の大枠は強制収容所に収容される前にでき上がっていたのだ。

フランクルは、強制収容所の体験を回想しつつ語る文の中で、次のように著している。

「私の40歳の誕生日に、一人の囚人仲間が、鉛筆の切れ端をプレゼントしてくれ、そしてごく小さなナチ親衛隊の書き込み用紙数枚を魔法のようにかき集めてきてくれた。私は、高熱にうなされながら、その裏面に速記でキーワードを走り書きしていった。それを助けに、まさに『Ärztliche Seelsorge』を再構成しようと考えたのだ。このメモは、後に自分の企てを実行に移して、私の最初の本の第2回目の草稿を書き留めることに取り掛かる際に、私にとって、実際非常に役に立った。ただ今や、自分の理論に、それがアウシュヴィッツのような限界状況ですら妥当するという模範的な証明に関して、豊かな具体例を付け加えただけである」⁴。

また、フランクルは、他の書物の中でも次のように述べ、彼の思想の大枠が大戦前には既に構築されていたことを示している。「実存分析の根本的な理念や思考の筋道は、後になってそれらを敢えて表明した著者が、これについて十分に正当であると知覚する以前に、強制収容所の中でなお何らかの形で実証され確認されなければならなかっただけであるというのが、確かに正しい」⁵。

これまでわが国では、フランクルの思想は強制収容所の体験がベースとなって構築されたように受けとめられてきたが、彼の思想の骨組みは実は強制収容所体験前にできあがっており、強制収容所の体験はその理論を実証し確かめていったにすぎなかった。それ故に、フランクルのロゴセラピーの本質を解き明かしていくためには、「第二次世界大戦前」のフランクルの思想形成に着目し、その遍歴をていねいにたどっていくことが極めて重要であると考えられる⁶。

フランクルの生涯を概観すると、彼は思弁の人ではなく、まさしく「実践の人」であった。臨床的実践的に基礎づけられた人間の事実にとこまでも忠実であった。フランクルは、若くしてフロイトの心理療法に魅了され精神分析を学び、フロイトの心理学に傾倒してい

くが、その後次第に、彼の関心はアドラーの個人心理学に移っていく。しかし、自身のニヒリズムとの対決、社会主義の青少年労働者組織における講演とその後の質問への応答、また、悩める青少年に対しての相談助言活動を続ける中で、次第に、フロイトやアドラーの心理学の「還元主義」に疑問を抱き始める。従来の心理療法は、実際は豊かで広やかな人間の行動や思考を、ある一つの単純な基礎的な衝動に縮小し還元してしまうという心理学主義の罠に陥ってしまっていると、 فرانクルは見なした⁷。

自身が陥っている心理学主義の陥穽を見抜き、そこから抜け出ていく上で大きな役割を果たしたのが、シェーラー、ヤスパース、ハイデッガーらの思想的影響であったと考えられる。フロイトとアドラーの心理学に限界を見出したフランクルが、彼らから決別していかざるを得なくなるのは必定であった。この時期は、まさに、フランクルが、苦悩する青少年の危機的状況を憂慮し、青少年相談所の設立に奮闘していた時期と合致する。フランクルのロゴセラピーと実存分析は、理論と実践をつなぐことによって成し遂げることのできた、「実践と一体となった生きた理論」であったと考察できる。フランクルは、実践を積み重ねる中で、自身の思想と心理学的理論の壁を突破して、強制収容所という限界状況「十字架の試練 (experimentum crucis)」⁸をもくぐり抜けて耐え抜くことのできた、彼独自の理論構築を成し遂げることができた。

強制収容所に収容される以前に、若くしてほぼ体系化されていたフランクルの思想形成に大きな役割を果たしていると考えられる二つの側面、すなわち「哲学者・思想家たちの思想的影響」と「豊富な実践の中で獲得した経験の蓄積」に着目する。大戦前のフランクルの理論と実践は、どのようなプロセスの中でどのような深化と拡充をなしていき、ロゴセラピーの構想へと繋がっていったのか。そしてフランクルは、どのようにして理論と実践を融合していき、その融合はロゴセラピーの理論の形成にどのように結実していったのか。それを追究していくことは、フランクルの構想したロゴセラピーが何を目指したものであったのかという、ロゴセラピーの本質を解明していく上で極めて重要な課題であると考えられる。その課題を探究していくために、「心理学主義との格闘」の視点から光を投射しつつ、フランクルの思想的変遷を追跡することを通して、「ロゴセラピー形成のプロセス」を本論文において究明していく。

本研究の特色および意義として、次の四つが挙げられる。

第一に、強制収容所体験前のロゴセラピー形成過程の追究の視座の提唱である。従来のフランクル研究は、主として強制収容所体験を経た後、戦後に確立された、いわば完成したフランクルの思想をベースにして為された探究がほとんどであった。そこではフランクルの強制収容所体験は既成事実であり、強制収容所体験がフランクルのロゴセラピーの構想に確固とした根拠を与えていることを前提にした探究である。本研究においては、ロゴセラピーの思想は強制収容所体験前に既に構想されていたと捉えるところからスタートして、フランクルの戦前の思想遍歴にスポットを当てて探究を進めていく。殊に、第二次世界大戦前のフラ

ンクルの思想的変遷のプロセスを、実践的な側面と思想的影響の側面の両面から追究していく。「強制収容所の体験」がロゴセラピーを形作ったのではなく、むしろ「ロゴセラピーの思想」が強制収容所を耐え抜くことを可能にしたのだという視座に立つ。その視座に立ったフランクルの思想の形成過程の追究は、ロゴセラピーを歴史的な経過を追って解明していくことが可能になり、従来の研究では明らかにされていなかったロゴセラピーの一面が明らかになっていく。戦前の若きフランクルが、どのような内面の苦闘を経て心理学主義の克服を成し遂げたのかを追跡していくことにより、人間フランクルの苦闘や苦悩の内面的な理解に肉薄していくことができる。それは、従来の完成されたロゴセラピーからの研究では見えなかった、若きフランクルの精神的な悩みや迷いにまで、その思想を遡って探っていくことになる。そして、本研究の視座に立つ若きフランクルの思想形成の追究は、強制収容所でも人間性を喪失することなく「十字架の試練」を耐え抜いた、人間存在の可能性の秘義を探っていく手掛かりを得ることができると考えられる。

第二に、若きフランクルの思想形成において重要な役割を果たしたと考えられる実践的な側面として「青少年相談所」の創設とそこでの活動を取り上げ、そこにスポットを当てて研究を深めていくことである。フランクルがモデルにした、ドイツのザウアー（Hugo Sauer）の青少年相談所の研究にまでテリトリーを広げ、フランクルの青少年相談所の創設の目的、経緯、方法、活動の内容、成果等を、ザウアーとフランクルのテキストを手掛かりにして詳細に探究を進めていく。その探究は、これまでに明らかにされていなかったロゴセラピーの構想のプロセスの新しい一面を明らかにしていくことができると考えられる。

第三に、ロゴセラピーの構想の過程において、「理論と実践の融合」について研究を深めていくことである。若きフランクルは、自身で積み重ねた実践とシェーラー等の思想から受け継いだ理論をいかに融合してロゴセラピーのアイデアへと結晶させていったのか、フランクルとシェーラーのテキストを手掛かりにして考察を進めていく。その探求は、従来の研究においては為されておらず、ロゴセラピーの理論的基盤をより明確にしていくことができると考えられる。

第四に、本研究それ自体が、フランクルの思想から学校教育への提言を読み解く端緒となる可能性を提供できることである。今日、教育の現場はあまりにも多くの問題を抱え、学校の存在そのものの根拠が崩れ、教師は「教えることの意味」を問われ、ともすれば生徒は「学ぶことの意味」を喪失している。「教育の崩壊」が声高く叫ばれる今日こそ、人間形成の本質にかかわる人間の実存の真の姿への根本的洞察が求められる。その意味で、「意味への意志（*der Wille zum Sinn*）」⁹が人間に生来備わっている根源的な欲求であり、人間は常に「生きる意味」を志向し、そしていかなる状況に置かれ、いかなる制約を受けようとも、それを実現することによって自己の生成を成し遂げ成熟していくと考えるフランクルのロゴセラピーの人間観とその哲学は、今日の教育のあり方に貴重な提言をしていると考えられる。

フランクルは、人間を決定づけるものとして、「素質」と「環境」の他に、“第3の”「自らの態度決定の可能性」を提唱する。いかなる困難な状況に置かれても、「それにもかかわ

らず、イエスと言うことのできる最後の決断の自由」の可能性を指し示すフランクルのロゴセラピーの思想は、「存在の価値」と「生きる意味」を中核に据えた、人間に対する「根源的信頼の教育」の提唱でもある。フランクルが戦前に、青少年相談所を創立し、そこで困窮の中で苦悩している若者たちに相談助言をしていった実践の営みから生み出したロゴセラピーの思想は、現代の学校教育現場の困窮の探索に重なり合うものがあるのではなかろうか。戦間期のウィーンの若者の置かれた状況と、今日の学校教育の現場の状況とはもちろん異なるが、フランクルが当時、若者の中に見た真の困窮「内面的な空虚、生の目的と目標を見出していない状況」は、「現代の青少年の困窮」を、内面的な苦悩として考察していく手掛かりになっていくと考えられる。いかなる素質を持ち、いかなる状況に置かれていようとも、前向きに生を肯定して生きていくのか否かを決定し自らの生を築いていくのは、最終的には自らの決断次第であるという、フランクルの「態度決定」に着目したロゴセラピーの基盤となる考えは、現代の教育を考えていく上で、大きな示唆を与えると考察される。

研究を進めていくにあたり、「実存分析」と「ロゴセラピー」の言葉をどのように用いるのかを明らかにしておきたい。フランクルは、「実存分析」と「ロゴセラピー」の二つの言葉をほとんど同義的に用いるが、その区別については次のように述べている。「すなわち精神的なものからの療法（それを私はロゴセラピーと呼んだ）であり、ないしは、人格的、精神的な実存を目指す限りにおいて、精神的なものに向けられた療法（私はそれを実存分析と名づけた）なのである」¹⁰。また別の個所では次のように語っている。「ロゴセラピーと呼ばれるものの関心事は、心理療法にロゴスを導入して関係づけることであり、実存分析と呼ばれるものの課題は心理療法に実存を取り入れることである」¹¹。またフランクルの研究者、ツォックは、彼の著書の中で次のように述べる。「ロゴセラピーと実存分析は、まったく同一の理論の、それぞれの、ある一つの側面である」¹²。概して、「ロゴセラピー」は精神的なものからの療法としての実践的側面を指し示し、「実存分析」は人格的精神的実存の深さを解明するという意味で、精神的なものに向けられた研究方向として語られることが多い¹³。後年、フランクルは、公の場での講演と自らの著作において、「ロゴセラピー」という言葉で彼のオリジナルな心理療法の理論と実践を表現するようになった。本論文の中では、フランクルの業績としての独自の心理療法の理論と実践を、引用文以外においては「ロゴセラピー」という語で統一して用いる。

II 先行研究

フランクルの思想は、これまで、実に様々な分野から研究が進められてきている。フランクルの専門領域である精神医学・心理学・哲学はもちろんのこと、教育学、看護学、倫理学等々といった、おおよそ「人間の問題」を考究していこうとする学問分野において、フランクル研究は広く網羅されてきた。例えば、『ロゴセラピーとキリスト教(logotherapy and the Christian faith)』¹⁴ (D. トウィディ)、『フランクル心理学入門』¹⁵ (諸富祥彦)、『フラ

ンクルを学ぶ人のために』¹⁶ (山田邦男編)、『フランクフルト教育学への招待』¹⁷ (広岡義之)、『シェーラーからフランクフルトへ』¹⁸ (菅井保)、「V. E. フランクフルトにおける『自己超越と宗教』」¹⁹ (佐々木勝彦) などが挙げられる。

フランクフルト研究のほとんどは戦後のフランクフルトの「強制収容所」体験後の著述や論述に依拠して進められた研究である。フランクフルトの名が世に知られるようになったのは、フランクフルトが強制収容所体験の直後に執筆して公刊した『夜と霧』と『死と愛』が、世界中で読まれるようになってから後のことであった。それ故に、フランクフルトが唱える独自の心理療法「ロゴセラピー」は、強制収容所の体験をベースにして構築されているという、誤った理解が広まっていた。戦前の論述は、著書としては公刊されておらず、また戦前の彼の活躍も、ウィーンのごく限られた範囲であったためほとんど注目されていなかったからである。しかし、フランクフルトの娘ガブリエレによって編集された『ヴィクトル E. フランクフルト初期の著作』²⁰が2005年に公刊された頃から、主として海外において、次々と戦前のフランクフルトの思想研究がなされ始め、公にされていった。ここでは、幾多のフランクフルト研究の中でも、大戦前のフランクフルトの思想形成に論及した研究の主要なものを見ていく。

(1) 諸富祥彦の「フランクフルト研究」

諸富祥彦は近著『知の教科書—フランクフルト—』²¹において、フランクフルトの戦前の思想遍歴の探求の重要性に着目し、若きフランクフルトの思想形成について論述した。管見による限り、戦前のフランクフルトの論文に着目して彼の思想形成を探求していった、日本で最初の試みである。諸富は、その著書の中で、教育学者かつ臨床心理士として、フランクフルトの思想を、「フランクフルトの生涯と思想形成」「フランクフルトの思想のキーワード」という二つの視点から解き明かし、フランクフルトの思想の現代的意義を問いかける。諸富は、この中で、「絶望の時代」に「生きる希望」をもって生き抜く思想と人間の「本来の生き方」をフランクフルトの思想の探求に求め、読者にその手がかりと根拠を提示しようと試みる。その著作は、三部構成となり、第一部は「フランクフルトの生涯と思想形成」、第二部は、「フランクフルトの思想のキーワード」、第三部は「作品解説」よりなる。その第一部で諸富は、フランクフルトの生涯をたどりながら、その思想形成のプロセスをたどっていく。

諸富の研究で注目されることは、彼が“若き”フランクフルトの思想形成のプロセスのていねいな探求を試みていることである。諸富は「まず最初に留意しておく必要があるのは、フランクフルトの思想形成と、『夜と霧』に記された強制収容所体験を必ずしも同一視してはならない、ということである。フランクフルト自身、強調しているように、フランクフルトの思想の骨格は第二次世界大戦以前に、したがって彼が強制収容所に捕えられる以前に形づくられていた」²²と述べ、彼の強制収容所体験以前の思想形成の歩みを、思想遍歴の重要な時期ととらえて詳細に探求している。諸富は、戦前のフランクフルトの4本の論文を特に重要なものとして取り上げる。諸富が着目した論文は、「身振りの肯定と否定の成立について」²³ (1924年)、「心理療法と世界観」²⁴ (1925年)、「心理療法の精神的問題性について」²⁵ (1938年)、「哲学と心理療法—実存分析の基礎づけのために—」²⁶ (1939年) である。

諸富はこの中で、 فرانクルにおける、フロイトとアドラーとの出会いと離別のプロセスを、フランクルの回想録等を引用しながら解き明かしている。諸富は、フロイトの精神分析とアドラーの個人心理学がフランクルのロゴセラピーのバックボーンとなっていることを認め、それらから離脱していった理由は、フロイトとアドラーの人間理解の制約性にあると考えた。諸富によれば、フランクルの人間理解においては「人間は、衝動や目的によってコントロールされている存在」ではなくて、人間を動かしているものは「意味」であると考えた²⁷。諸富は、次のように述べている。「フランクルは、人間の精神の本質的な特徴は『指向性』にある、と考えた。自分ではない何かへと向かっていくところに、人間の精神の本質はある、と考えたのだ。たとえば、愛。誰かを愛するとき、人は、その愛する人のもとにある (Bei-sein)。この、自己超出的な精神の働きこそ、人間精神の本質である。自らを超え出て、ほかの何か、ほかの誰かに差し向けられる。そしてその何か、誰かのもとにある。この自己超出性にこそ、人間精神の現実性がある」²⁸。

諸富は、「精神の本質」について、臨床心理学的に詳説して述べている。「個人の『心』というパッケージの内側に、いくつかの『心のパーツ』が包まれているかのような心のイメージは精神の本質を見誤っている。愛の衝動や、生の衝動や、死の衝動といった部分 (パーツ) が『心』というパッケージ (容器) の中に入っているかのように考える多くの心理学理論は、人間精神の根本的特徴を捉えそこなっているとフランクルは、考えたのである。フランクルによれば、アドラー心理学もこれと同じ過ちを犯している」²⁹。さらに諸富は、「現実に存在するものは『心の中にある何か』であり、すべては『心の中の何かの投影』であるとみなす傾向を、『心理学主義』である」³⁰としたうえで、フランクルが心理学主義を克服することができたきっかけを、シェーラーの現象学的価値論にあることを突きとめて論述していく³¹。さらに諸富は、青少年相談所等での豊富な臨床実践の蓄積や強制収容所体験で、フランクルが思想を深めていったことにも論及するが、フランクルの思想の骨格は、強制収容所体験以前に築き上げられていたことを強調し、収容所体験前のフランクルの著述をベースにして論述している。

(2) クライトマイアーの「フランクル研究」

クライトマイアーは、彼の著『意味に満ちた魂の配慮 (Sinnvolle Seelsorge)』³²の中で、若きフランクルの思想形成に論及している。クライトマイアーは、戦前のフランクルの思想遍歴を考究しているが、その論述は大戦後のフランクルの著作とフランクル研究者の成果に依拠して展開している。

彼は、フロイトの精神分析、アドラーの個人心理学、ユングの分析的心理学のそれぞれの心理学の類似点と相違点を明らかにしつつ、それらの心理学の学派に対してのフランクルの立場と、フランクルの思想への寄与を解明していこうと試みる。フランクルにとって根本的に問題になっていることは、さまざまな主義 (生物学主義、社会学主義、心理学主義等) において明らかになるニヒリズムを暴露し、それに対して立ち向かっていくことであると、クライトマイアーは分析する。そして、フランクルは、フロイトの精神分析、ア

ドラーの個人心理学、ユングの分析的心理学の歴史的意義をそれぞれ評価したうえで、それらの心理学は、人間の精神的・人格的な全体性を顧慮せず、いずれも人間の一面性を強調し、その根本的な公理は心の動力学に支配された心理学であることを看破し、心理学主義に陥っていると見做しているというのが、クライトマイアーの考察である。

クライトマイアーは、フロイトとアドラーの心理療法の方向性の類似点と、 فرانクルによる決定的な批判点について論じた上で、両者の人間像の範囲内においては、人間がそれを目指して懸命に努力する目標は心理的枠組を超越していないと結論づける。また、ユングの分析的心理学の中にも、フランクルは心理学主義を見ていると考察する。そしてクライトマイアーは、「意味への意志と呼ぶところのものは、なおはるかにずっと深く、人間の中に根を下ろしている」というフランクルの人間理解を前面に押し出して、フランクルの心理療法の理論を考究していく。クライトマイアーの理解によれば、フランクルは、フロイト、アドラー、ユングの心理学を、人間の人格を横領してしまう危険性の中に落ち込んでいる心理学と見なしている。

さらに、クライトマイアーは論を進め、シュヴァルツ、アラース、フッサール、シェーラー、ハルトマン、ヤスパース、ハイデッガー等の哲学者たちによる、フランクルに対するの思想的影響と、彼らに対するのフランクルの立ち位置を論述する。

(3) ツォックの「フランクル研究」

ツォックは、彼の著書『医師哲人－ヴィクトル E. フランクルー (Der Arztphilosoph; Viktor E. Frankl)』³³の中で、フランクルの精神的なプロフィールを描出しようと試みている。ツォックは、フランクルの哲学的な思索に重点を置きながら、フランクルのテキストとフランクル研究者の成果を手掛かりに、フランクルの精神的な人間像を究明する。ツォックは、フランクルが精神的次元ならびにそれと結合した根本的な意味と価値の方向づけを、医学的な治療と精神医学の中へと持ち込んだことを評価している。ツォックはその探究を、フランクルの戦前・戦後の著作とフランクル研究者の著作、ならびにフランクル自身の伝記と、その信頼性が高く評価されているリーマイアー著のフランクルの伝記に依拠して進めている。

著書の前半部においては、フロイト、アドラー等の心理療法医たちとシェーラー等の哲学者たちからの、フランクルに対するの思想的影響に論点を絞って論述している。フランクルが「人間の本質は本来的に意味を探し求めているということの中に存し、人間は絶えず何かに向けて方向づけられ導かれ整えられている」と考え、「人間存在は常に自分自身を超えて彼方を指し示し、彼らの超越性は人間的実存の真髄である」と把握していたことを、ツォックは考究する。そして彼は、フランクルが「精神的な次元」と「人格的な良心」を顧慮していたことをベースにして、フランクルの精神的なプロフィールを描き出している。

この書の中でツォックは、なぜフランクルがフロイトとアドラーの二人の心理療法医の師を「超越」して、彼自身の独創的な道を歩まなければならなかったのかを探求している。殊に、フランクルによるアドラーの個人心理学との対決の問題に関して、ツォックは多く

のスペースを割いて論述している。その中でツォックは、 فرانクルが人間の基本的な姿勢を意味への志向に置き、意味を中心に置く心理療法を展開していこうと志し、「自己 - 超越」を動機づけ理論の中心的視座に持ち込もうとしたことが、アドラーとの対決の核心であったことを究明している。さらに、ツォックは、フランクルが決定的最終的に、彼自身の心理学主義を見抜き目覚めたきっかけは、マックス・シェーラーに起因していたことを解明する。

ツォックはフランクルを、精神的 - 霊的な源から、宗教的な源泉から靈感を与えられた医師哲学者と見なして、固有の意味への意志を備え、かつ原初的根源的な最終的な意味への意志を備えた、精神的なものに基づく存在者、制約されない人間像として描出する。ツォックによれば、フランクルは、内在性「身体的 - 感覚的な世界の内側に存在するもの」と、超越性「身体的 - 感覚的世界を超越するもの」とを結合しようとする越境者である。

(4) リーマイアーの「フランクル研究」

リーマイアーは、著書『ヴィクトル・フランクルのロゴセラピーとそのさらなる発展 (Die Logotherapie Viktor Frankls und ihre Weiterentwicklungen)』³⁴の中で、主としてフランクルの戦後の著作と戦前のシェーラーの著述に依拠して、ロゴセラピーと実存分析の包括的かつ体系的な外観の描出を試みている。その前半部では、フランクルの思想形成について論述している。リーマイアーは、フランクルの「精神史上の背景」として影響を与えた人物として、医学・心理療法の観点から、精神分析のフロイトと個人心理学のアドラーを、哲学と人間学の観点からマックス・シェーラーを、実存哲学の観点からカール・ヤスパーズを、存在論の観点からニコライ・ハルトマン、対話の原則ないしは我 - 汝の関係に関してマルティン・ブーバーを挙げて、その思想的影響を論述している。リーマイアーは、ドイツの実存哲学 (ハイデッガー、ヤスパーズ) は、フランスの実存哲学 (サルトル、カミュ) よりも、フランクルに対して近しい親密さを持っていると結論づけている。

リーマイアーは、彼の著書の中で次のように述べている。「実存分析とロゴセラピーは、哲学、心理学、医学、教育学の根源との数多くの接点ないしは交差する重なりを持っている。フランクルが、たくさんの思想家たちから援用しており、そして彼らから影響を受けていることは、疑問の余地がなく明白である。彼のロゴセラピーの決定的な点は一価値実現の基盤上での意味発見の可能性と無意味感の治療は—確かにフランクル自身によって発展させられている。フランクルは、カール・ヤスパーズと同様に再三再四、最初からずっと、人間の本質に関する問いに対して興味関心を抱いていた。そしてここでは何よりも、心理療法と哲学との間の境界領域に対して関心を抱いていた」³⁵。

リーマイアーは、ヤスパーズとフランクルの哲学的心理学的な比較を為し、両者の「実存についての解釈」「人間の自由に対するの見解」「人間の超越への関係」について、その類似性と相違について論述し、そこに本質的な一致と交差が見られることを明らかにしている。リーマイアーは、「シェーラーの価値論と人間学」をフランクルのそれと比較しつつ描出した上で、シェーラーの哲学とフランクルの思想との関係を論述する。リーマイアー

によれば、 فرانクルはシェーラーの教えを完全に体系的には受け継いではいないが、シェーラーの教えを普遍的な哲学的基盤として用い、それに基づいてフランクル自身の心理療法の理論と人間学を発展させていると考察している。

シェーラーとフランクルの間の最も重要な一致として、「楽天主義的な人生の基本的態度」「人格の概念」「形而上学的な方向づけ」「あらゆる結果倫理学の拒絶」が、リーマイアーによって簡潔に描出される。特に、シェーラーの価値概念とフランクルの意味概念の両者は、超主観的な所与性に関係していると、リーマイアーは分析している。

結論としてリーマイアーは、フランクルのロゴセラピーはシェーラーの影響なしではほとんど不可能であったと考察する。リーマイアーは、フランクルの思想は原則的にシェーラーの哲学に根を下ろし、シェーラーの哲学は、フランクルに最も強い影響を及ぼしていることを洞察している。そして、リーマイアーは、ロゴセラピーと実存分析の治療上の方向性において重要な点は、精神性に基づく「人間の意味への意志」からスタートしている、動機づけの理論的な基盤であると考察を深めている。

(5) バッチャニーの「フランクル研究」

バッチャニーは、近年、極めて注目すべき論文「《常に確かに人格が働いていた》ヴィクトル E. フランクルのロゴセラピーと実存分析への道 (»Immer schon war die Person am Werk«, Viktor E. Frankls Weg zu Logotherapie und Existenzanalyse)」³⁶を公にした。この論稿は若きフランクルの思想形成の歩みをていねいに追跡し、21歳になったフランクルがいかにしてロゴセラピーを構想していったのか、その足跡を戦前のフランクルの著述にも光を当てて探求している。

論文は、①「個人心理学からロゴセラピーへ」(1923-1927)、②「青年期の心理学に関して」(1927-1930)、③「若き医師—精神医療的実践におけるロゴセラピー」(1930-1938)、④「それでも人生にイエスと言う(人間の意味探求)」(1938-1945)、⑤「体系化と確証」(1945-1997)の五つの段階の探究から成る。特に、バッチャニーは、第2番目の「青年期の心理学に関して」の段階の考察において、フランクルの青少年相談所の創設とそこでの活動について論述していることは、他のフランクル研究者には見られない探究であり、特筆に値する。

バッチャニーは、フランクルが二人の師であるフロイトとアドラーから離れていったのは、「フランクルが、早くから精神的なものや人格的なものへの指向性をもっていた」³⁷からだと推察している。そしてバッチャニーは、次のように個人心理学からのフランクルの離脱を分析する。フランクルはアドラー学派になった当初、個人心理学の枠組みを広げるとともに深めていくことにより、それを治療に役立てようとしていた。しかし次第に、彼の仲間であるアラーズとシュヴァルツと共に、アドラーの単一原因からなる概念で解説しようとする神経症の理解と、個人心理学の哲学的・人間学的なシステムを支える学説全体に対して批判的になっていき、そのことがきっかけでアドラーと離別することになった。特にフランクルは、人格の真の現れとして神経症を説明することにより、正当な個人心理

学の立場を放棄したと、バッチャニーは論述する。

他方で、バッチャニーは、 فرانクルの実践的なカウンセリング活動としての青少年相談所の設立とそこでの活動を取り上げて論究する。フランクルが早くから論文等のなかで、青年の精神的なケアの必要性を強調し、自ら実際にウィーンに青少年相談所を開設して青少年のカウンセラーとして活動して成功を修めたことを、バッチャニーは概略的に論述している。さらにフランクルがウィーン精神科クリニックと精神科病院で精神医学と神経学の分野の専門的な研修を修め、患者との直接的な関わりを通して経験を積み重ね洞察を深めていくことにより、ロゴセラピーと実存分析の基盤となる理論的方向性を形成していったことを、バッチャニーは論述する。

さらに探求の結果として、バッチャニーは、若きフランクルが臨床的実践のなかで発見したテーゼ「人間の精神的次元は、カウンセリングと治療の過程に貢献することができ、精神は病気から比較的独立しており、最後の瞬間まで可能性として自由である」³⁸に基づき、この考えをベースにしてロゴセラピーの構想を築いていったと、結論づけている。

以上、大戦前のフランクルの思想形成に論及した研究の主なものに焦点を当てて見てきた。クライトマイアー、ツォック、リーマイアーの研究は、上述のように若きフランクルの思想形成の研究の成果を表したものである。その他に、ウィーン精神科の風土を顧慮しながらフランクルの哲学的な方向づけを探求したラスコプの研究³⁹、フランクルの思想におけるマックス・シェーラーの影響を探求したフェッツ、グレスナー、グリッチェネーダー、ヘックマンの哲学的な研究の成果等も公にされている⁴⁰。しかし、それらはいずれも、主としてフランクルによる戦後の回顧的な論述を手がかりに、彼の思想の遍歴を追究していく手法をとっている。いわば戦後の完成されたロゴセラピーに立脚した視座から、今日的な眺望のもとに大戦前の若きフランクルの遍歴を照射して、その思想形成を探究し論及していかうとした試みである。諸富祥彦の研究は、フランクルの戦前の思想遍歴の探求の重要性に着目し、若きフランクルの思想形成について論述した。諸富の探求も、フランクルの「戦後に完成された」ロゴセラピーの視座が入り込んでいる。また、実践的な側面の究明において、殊に青少年相談所等の具体的な実践の探究に今一步踏み込めていない。バッチャニーの近年の論稿は、若きフランクルの思想の歩みを彼の戦前の著述にも光を当てて探究していかうとした、注目すべき論考である。彼は、フランクルの個人心理学からの離脱の経緯とロゴセラピー構築の心理学的・精神医学的プロセスを、戦前のフランクルの著述も手掛かりにしながら丁寧に追跡している。ただし、フランクルの青少年相談所での実践の論述において、青少年の苦悩と真正面から向き合って苦闘したフランクルの、具体的な実践活動とその経験を通しての思想的変革への掘り下げた探究は見られない。また、理論と実践の統合、殊に「心 (Seele)」の平面から「精神 (Geist)」を包括する次元へと飛翔する構想によってフロイトとアドラーの理論を凌駕していかうと試み、その構想のもとに理論と実践を融合していったフランクルの内面的な格闘の過程の論及はない。

Ⅲ 方法と構成

上述の先行研究を踏まえ、本論文では、戦後に完成されたロゴセラピーの立場に立って、そこから فرانクルの青年時代の思想遍歴を概観するのではなくて、大戦前の若きフランクルの思想形成の歩みを、彼の内面的苦闘の変遷の解明に焦点を当てて辿っていくことにより、「フランクルの心理学主義との戦い」の内実を明らかにしていく。そのために、わずかなではあるが現在まで残されている戦前のフランクルの著述にできる限り依拠し、そこから彼の内面的な探索を読み解き、彼の思想の変遷を内側から内在的に理解していくアプローチを試みる。すなわち、フランクルが生きた時代の思潮を明察し、若きフランクルの試行錯誤の歩みに同行していくことを心がけ、フランクルの「心理学主義との格闘」の歩みが結果的にロゴセラピー創出へと至った道を、彼の抱いた問題意識を共有しつついねいに解き明かしていく。殊に、フランクルの実践的側面、その中でも資料が比較的豊富に残っている青少年相談所での活動に着目し、青少年相談所での実践と、フランクルの心理学主義克服の理論的基盤を与えた哲学者、シェーラーの思想的影響との関連性を探求することにより、強制収容所体験前にどのようなプロセスを経て、どのようなロゴセラピーの構想に至ったのかを解明する。その探究は必然的に、力動性心理学からの離脱が、後のロゴセラピーの構想にどのようにつながっていったのかを解明する重要な手がかりを探ることになっていくであろう。

研究を進めていくにあたり、「フランクルの心理学主義との格闘の問題」に光を投射していくことを特に留意し、その視座に立ち続けて探求を深めていく。フランクル自らがその回顧的自伝で語る「心理学主義に由来する非人格化と非人間化の傾向に対しての戦い」の内面的な戦いの貫徹が、大戦前に結果的に現象として表出していったのが、フロイトとアドラーの唱える「力動性心理学」⁴¹からの離脱と、青少年相談所を中心とした実践的な活動の場での精神的に困窮した人々への救済であり、そのプロセスの中で鮮明に理念化されていったのが、「精神 (Geist)」を中核に据えた独自の心理療法の構想であったのではないのかという仮説を立てる。そして、その仮説のもとに、フランクルの内面的な思索の変遷を内側から辿っていくことにより明らかにしていき、フランクルのロゴセラピーの本質に迫っていく。

その解明のために、本研究の構成は以下の通りとする。

第一章では、まず、フランクルのロゴセラピー創出の素地となったウィーンの精神的な風土と、フランクルの心的・精神的な内面的基盤を明らかにする。そして、フランクルが、どのようにフロイトの精神分析とアドラーの個人心理学を受容して、そして、なぜ両者の心理学から離脱していったのか、その原因となるフランクルの内的な格闘を、精神的な背景を顧慮しつつ、明らかにしていく。

第二章では、フランクルが、フロイトの精神分析とアドラーの個人心理学からの離脱のきっかけとなった、シェーラーの哲学的人間学への傾倒と、シェーラーの思想からの影響

を、心理学主義の克服の視座から明らかにする。

第三章では、青年期の فرانクルが、ドイツのザウアーの青少年相談所をモデルとして、ウィーンで青少年相談所を創設し、そこで困窮する若者の救済に心を傾け、その実践から多くの経験を積み重ね、それが実践的な叡智となって、後のロゴセラピーの構想のアイデアに繋がっていったことを明らかにする。

第四章では、シェーラーの思想的な影響と、青少年相談所での実践で獲得した経験が、どのように融合していった戦前のフランクルのロゴセラピーの構想に形づくられていったのか、そして、そのロゴセラピーは、従来の心理療法とどこが異なり、何を究極的に目指したものであったのかを明らかにする。

第五章では、ロゴセラピーの基盤となっている、フランクルの人間観を明らかにしていく。フランクルが従来の心理療法においては顧慮されていなかった「精神 (Geist)」の次元に目を向ける必要性を強調したのはなぜか、フランクルの青年期のニヒリズムとの格闘と「精神 (Geist)」との関連性から探究していくことにより、ロゴセラピーの構想の基盤となるフランクルの人間観を明らかにしていくことを試みる。

序章 註

- 1 フランクルが戦前に構想し、そして戦後に体系化した「ロゴセラピー」とは、未来に目を向け、将来待ち受けている意味の可能性に着目する、「意味」を中心とする心理療法である。「フロイトの精神分析」、「アドラーの個人心理学」に対して、「心理療法における、ウィーンの第三学派」と呼ばれる。ロゴセラピーでは、「人間存在の意味」と人間による「意味の探究」に焦点を当てる。人間の持つ「意味」への意志、「意味と目的」を発見しそれを実現しようとする人間の実存的な欲求に目を向け、実存的対話によって、人生に対する自由と責任を自覚させ、人生の意味を見出すことで変容（人生の生き方の転換）をはかる。
- 2 「逆説志向 (Paradoxe Intention)」は、「反省除去 (Dereflexion)」と並んでロゴセラピーを代表する治療的技法である。「逆説志向」において、患者は自分が一番恐れていることを意図し望むように励まされることにより、自分の不安を客観視できるようになり、神経症的な不安の帆から風を取り去り、今までの悪循環を打ち破って、神経症的な徴候を消滅させることができる。不合理な恐怖と闘う代わりに、それを誘い出し歓迎し誇張して、もはや抵抗しないことによって、患者の不安感をしばませてしまう。(Vgl. Frankl, V.E.: *Theorie und Therapie der Neurosen*, Wien 1956, S.83-92. [V.E.フランクル (霜山徳爾訳)『神経症II その理論と治療』みすず書房 1961年, 151-170頁。])
- 3 Frankl, V.E.: *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen*, München 1995, S. 44-45. [V.E.フランクル (山田邦男訳)『フランクル回想録』春秋社, 1998年, 80-82頁。]
- 4 Ebenda, S.75-76. [邦訳, 131頁。]
- 5 Frankl, V.E.: *Theorie und Therapie der Neurosen*, a.a.O., S.170. [邦訳, 97頁。]
- 6 諸富祥彦は次のように、大戦前のフランクルの思想形成の検討の重要性を主張している。「これまで我が国では、一般に、オーストリアの実存的心理療法家フランクルの思想に関して、彼のアウシュビッツ収容所の体験の中から初めて生まれてきたもののように受けとめられてきた。たしかに、アウシュビッツでの体験がフランクルの思想形成において一定の役割を果たしたことは認められよう。しかし、自らその小伝において記しているように、彼の思想の骨格は、第二次世界大戦前に既に形成されており、アウシュビッツでの体験は彼の確信をいっそう強めたにすぎない。(中略)この事実を顧みれば、当然、フランクルの思想形成に関する研究においては、アウシュビッツでの体験よりもむしろ、それ以前の彼の論文(すなわち第二次世界大戦前の論文)の検討が中心に据えられなければならない」。(諸富祥彦「訳者解説」教育思想研究会編『教育と教育思想』第12集, 1992年, 73頁。)
- 7 Klingberg, H. Jr.: *When life calls out to us*, New York 2001, p.61-62. [ハドン・クリングバーグ・ジュニア (赤坂桃子訳)『人生があなたを待っている I』みすず書房, 2006年, 104頁。]
- 8 Frankl, V.E.: *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen*, München 1995, S.75. [V.E.フランクル (山田邦男訳)『フランクル回想録』春秋社, 1998年, 130頁。]
- 9 Vgl., Frankl, V.E.: *Der Wille zum Sinn*, Bern 1972. [V.E.フランクル (山田邦男監訳)『意味への意志』春秋社, 2002年] この著書の中で、フランクルは次のように述べている。「人間は、結局のところ、意味を充足する程度に応じてのみ—自分自身の中においてではなく、自己の外で、世界において充足するほどにだけ—自己を実現することができる。」[Ebenda, S.17. (邦訳, 14頁。)]
- 10 Frankl, V.E.: *Theorie und Therapie der Neurosen*, a.a.O., S.118. [邦訳, 5頁。]
- 11 Frankl, V.E.: *Homo Patiens, Versuch einer Pathodizee*, Wien 1950, S.12. [V.E.フランクル (真行寺功訳)『苦悩の存在論』新泉社, 1972年, 26頁。]
- 12 Zsok, O.: *Der Arztphilosoph Viktor E. Frankl*, München 2005, S. 116.
- 13 クリングバーグは、フランクルの伝記の中でロゴセラピーと実存分析について、次のように明快に説明している。「当初フランクルは、彼の理論を精神分析と区別するために『実

存分析』と名づけていた。だがほどなく彼は『ロゴセラピー』という語を造り、しばらくは自分の理論体系を『ロゴセラピーと実存分析』と呼んでいた。この二つの用語はほとんど同じ意味で使われる場合もあったが、フランクルは、実存分析という語を自分の『人間学』とその哲学的基礎を指すときに用い、ロゴセラピーという語は彼の心理療法上の理論と実践—方法論と技法—を指すときに用いた。時が経過し、また自分の講演と著作をさらにわかりやすくするために、フランクルは彼の体系のすべてを指して『ロゴセラピー』という語だけを用いるようになった。」(Klingberg, H. Jr.: When life calls out to us, New York, Notes 5, 2001, p.336. [ハドン・クリングバーグ・ジュニア (赤坂桃子訳) 『人生があなたを待っている I』 みすず書房, 2006年, 注(5)。])

- 14 Tweedie, D. : logotherapy and the Christian faith, baker book house. 1961. [D. トウイディ (武田健訳) 『フランクルの心理学』 みくに書店, 1965年。]
- 15 諸富祥彦『フランクル心理学入門—どんな時にも人生には意味がある』コスモス・ライブラリー, 1997年。
- 16 山田邦男編『フランクルを学ぶ人のために』世界思想社, 2002年。
- 17 広岡義之『フランクル教育学への招待』風間書房, 2008年。
- 18 菅井保『シェーラーからフランクルへ』春風社, 2012年。
- 19 佐々木勝彦「V. E. フランクルにおける『自己超越と宗教』『わたしはどこへ行くのか—自己超越の行方—』所収, 教文館, 2013年。
- 20 Viktor E. Frankl: Frühe Schriften 1923-1942, Gabriele Vesly-Frankl (Hrsg.), Wien /München /Bern 2005.
- 21 諸富祥彦『知の教科書—フランクル』講談社, 2016年, 30-70頁。
- 22 同上書 30頁。
- 23 Frankl, V.E.: Zur mimischen Bejahung und Verneigung, In: Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse, 10, 1924, S.437-438.
- 24 Frankl, V.E.: Psychotherapie und Weltanschauung, Zur grundsätzlichen Kritik ihrer Beziehungen. In: Internationale Zeitschrift für Individualpsychologie III, 1925, S.250-252.
- 25 Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, In: Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, Bd.10, 1938, S.33-45. [V.E.フランクル (赤坂桃子訳) 「心理療法における精神の問題について」『ロゴセラピーのエッセンス』新教出版社, 2016年。]
- 26 Frankl, V.E.: Philosophie und psychotherapie, Zur Grundlegung einer Existenzanalyse, In: Schweizerische Medizinische Wochenschrift, 69, 1939, S.707-709.
- 27 諸富祥彦『知の教科書—フランクル』講談社, 2016年, 51頁。
- 28 同上書, 52頁。
- 29 同上書, 52頁。
- 30 同上書, 59-60頁。
- 31 同上書, 60-61頁。
- 32 Kreitmeyr, C.: Sinnvolle Seelsorge, München 1995.
- 33 Zsok, O.: Der Arztphilosoph Viktor E. Frankl, München 2005.
- 34 Riemeyer, J.: Die Logotherapie Viktor Frankls und ihre Weiterentwicklungen, Bern 2007.
- 35 Ebenda, S.58.
- 36 Batthyány, A.: »Immer schon war die Person am Werk«, Viktor E. Frankls Weg zu Logotherapie und Existenzanalyse, (Otmar Wiesmeyr, Batthyány, A. (Hrsg.) Sinn und Person, Weinheim und Basel 2006). [A. バッチャニー「ヴィクトル・E・フランクル博士の生涯とロゴセラピーおよび実存分析の発展」: V.E.フランクル (広岡義之訳) 『虚無感について—心理学と哲学への挑戦—』所収, 青土社, 2015年。]
- 37 Ebenda, S.13. [邦訳, 12頁。]
- 38 Ebenda, S.19. [邦訳, 25頁。]
- 39 Raskob, H.: Die Logotherapie und Existenzanalyse Viktor Frankls, Wien 2005.

-
- ⁴⁰ Fetz R. L., Graeßner M.:Die wertpragmatische Methode, Frankls Therapeutische Umsetzung von Schelers ORDO AMORIS. Gritschneider M.: der Einfluss der Philosophie Max Schelers auf Logotherapie Viktor E. Frankls. Heckmann W.:“Geistige Person” bei Viktor E. Frankl und Max Scheler [In: Viktor Frankl und die Philosophie, Batthyány D., Zsok O.(Hrsg.), Wien 2005] .
- ⁴¹ Vgl. Frankl,V.E.: Das Leiden am sinnlosen Leben, Freiburg 1977, S.43. [V.E.フランクル (中村友太郎訳)『生きがい喪失の悩み』, エンデルレ書店, 1982年, 58頁。] フランクルは、「力動性心理学」を「本能的な衝動のエネルギーが人間の心的現実を決定している心理学」と考察している。

第一章 力動性心理学の受容とその批判的継承

本章では、 فرانクルが生を受けた当時のウィーンの精神的な風土と、フランクルの出生からフロイトに出会うまでの内面的な探索の歴史、そして、フロイトとアドラーとの出会いと離別の経緯を論述する。殊に、フロイトの精神分析とアドラーの個人心理学の何に惹かれ、そしてなぜフランクルはそれらから離れていったのか、その背景には何があったのかを、フランクルの思索の変遷を辿りつつ究明していく。その究明は、フロイトの精神分析とアドラーの個人心理学からの離脱が、フランクルの新たな実践活動の広がりと思想的発展の基盤として、どのような意味を持つのかを明らかにしていくこととなる。

考察の手順は以下の通りである。第1節において、フランクルの生きた時代のウィーンの風土とフランクルの精神的な素地を明らかにする。第2節において、フランクルによるフロイトの精神分析の受容と批判を論じる。第3節において、アドラーの個人心理学の何に惹かれ、なぜそれから離れていったのかを究明していく。そして第4節においては、フロイト、アドラーといった力動性心理学からの離脱の背景にあったものはいったい何だったのか、フランクルの思想的な変革のきっかけを与えた二人の人物、アラースとシュヴァルツに焦点を当てて、彼等からの思想的影響を考察していくことにより明らかにしていく。

I ウィーンの風土とフランクルの精神的な素地

(1) ウィーンの風土

フランクルの伝記を著述したハドン・クリングバーグは、その冒頭で次のように記している。「ヴィクトール・フランクルの生涯と20世紀は、共に始まり、共に終焉を迎えたが、その時代に起きた出来事は決しておだやかではなかった。その生涯は、家族とウィーンの街に深く埋め込まれ根づいていたが、それは、彼らに壊滅的な打撃を与えた重大な出来事と全世界をおおう劫火に翻弄された年月でもあった。彼は、時代の最善の部分と最悪の部分に向き合うように運命づけられていた。彼の生涯は、時代と場所の背景に直面して、初めて理解することができる」¹。

20世紀の初め、世界観的な潮流を伴うウィーンの風土は、ロゴセラピーの成立に対して肥沃な土壌を提供していた。この時代に、ウィーンは精神的な思潮と反動の集結するたまり場であった。古くから脅かされている形而上学、新しく起こってきた心理学主義的な方向性、そして、ウィーンのサークルの、両者を克服しようとして戦う新しい強力な科学理論的な傾向の領域上で、集結していた。それらは、初期の実証主義的な試みの活性化と先鋭化を伴っていた。形而上学に対しての敵対的な傾向は、強力であった²。

フランクルがウィーンで出生した1905年、同じ都市で活躍していたフロイトは49歳、アドラーは35歳であった。フロイトの深層心理学的な先駆的仕事は、前述の潮流の世紀の変わり目とちかちかして同時的に生起した。彼の最初の先駆的研究は、フロイディズムの精神分析学派として輪郭ができていた。無意識の学術的な発見に関して、魅惑と感激が広がっていた。しかし、この理論の背後に隠されていた人間像に対しての懐疑と厳しい抵抗が、

勢いを増していった。この人間像は、自然科学的に把握可能な、生理的心理的な衝動の力学に還元されているように思われた。

アドラーと彼の同志たちは、当時、独断的に把握されていた衝動の理論と性の理論に関して不満であった。彼らは、制約されない自由な精神分析の研究の方向性を基礎づけた。この方向性は、フロイトの精神分析の枠を越え出て、共同体の体験における個人心理学的な構成要素へ向かって、アドラーの社会的な方針に基づいて発展した。アドラーと彼の仲間たちは、ウィーンにおいて新しい潮流を作り出した。それは、外部からは、最終的に設立された「国際個人心理学協会 (der Internationale Verein für Individualpsychologie)」において認識されることができた³。

このより包括的な人間像も、心理学的哲学的な関心を抱いているウィーンの思索のすべての方向性を、なお満足させなかった。シュヴァルツ (O. Schwarz) とアラース (R. Allers) は、アドラーから離れていった。アドラーによって既に拡張されていた人間像を越え出て、精神的、実存的な視座を取り入れようとする企てとともに、二人は離脱していった。彼らは、価値の問題が本質的な役割を果たすべきであると考えた。彼らは、アドラーの人間像を未だ心理学主義的であると判断した。その問題性は、実証主義的、形而上学的な格闘の中において、重要なカテゴリーであるべきだと考えた⁴。

精神的な指導者としてフレーゲ (F. L. Frege) を抱く、第一次世界大戦前のマック (E. Mack)、ノイラート (O. Neurath)、カルナップ (R. Carnap) 等のウィーン学団は、新しい形而上学 (プラトンからカントまで、とりわけハイデッガー) ならびに古くからの形而上学に由来する心理学主義と、交戦状態にあった。数学者、論理学者、哲学者たちのこの学団は、一部は個人で、学術的理論的な問題に献身していた。その際、この学団は、信望を失っていた 19 世紀の実証主義を、言語分析的・数学的・自然科学的に様々に分離していく傾向を伴う、殊に論理的な経験論か論理的な実証主義を伴う新実証主義において、活気づけ過激化させた。価値と意味の問いは、ここで妥当する論理学の意味においては証明不能なサイズとして、思考の枠組からこぼれ落ちた。神についての伝統的な神学的かつ哲学的な発言は、論理的な実証主義の文法規則によると、無意味であるということが判明した。

とりわけあいまいでぼやけた、すべてのものを証明するが何も証明していない哲学と神学に対しての徹底的な批判が問題となっていた。経験によって実証できるものと論理によって演繹できるものが、そしてそれとともに、全学術活動の中でのある種の認識論的な変革が問題となっていた。そのためにウィーンのサークルにとって、形而上学だけではなくて形而上学から生まれた心理学主義もまた、精神的な絶対性の要求と科学哲学にとっての不適切な言語に関して、厄介な問題となっていた。実証主義的な思想をもつウィーンのサークルと、心理学主義的な思想をもつ精神分析学派は、ウィーンの知的な風土を決定していた。この風土は、 فرانクルによるロゴセラピーの創設に対して、本質的なものであった。フランクルは、彼の精神的な父であるとともに友人でもあるシュヴァルツとアラースと一緒に、直接的には心理学主義と、間接的には実証主義と戦った⁵。

(2) フランクルの精神的な素地

フランクルは、新世紀の嵐のように猛烈に荒れ狂った数十年間においてはまだ青年であった。けれども彼は、その状況を、社会的に積極的に関与した興味関心からと同様に、学問的な興味関心から観察し、多彩な方法で自身の中に取り入れることになる。

フランクルは、1905年3月26日に、兄ヴァルターと妹ステラに挟まれた第二子として、オーストリアの首都ウィーンのレオポルトシュタットで生まれた。母エルザは、プラハの貴族の由緒正しい名門の出であり、心優しい信心深い女性であった。フランクルは、自分の母親を、子供の心をもち、信心深く、人間的な温かさに満ちた人だったとしばしば語った。フランクルの父ガブリエルは、当時オーストリア=ハンガリー帝国の一部であった南モラビアの出身であり、製本業者の貧しい家庭の子どもとして育ち、苦学しながら医学部の勉学を修了したものの経済的な理由から医師の道を断念し国家公務員となり、大臣の個人秘書として児童青少年の保護育成部で働いた。彼は、人生に対してスパルタ的な厳格な考えをもっていた。自らの信条をもち、それに忠実であった。フランクルが子どもの頃、毎週金曜日の夜にヘブライ語でユダヤ教の祈祷書一章を朗読するように命じられていた。しかし厳格な父は同時に、いつも子供を守ってくれる「正義の人」でもあった。両親は敬虔なユダヤ教徒であった⁶。

1909年頃、フランクルは、自分もいつかは死ななければならないと気付いたと、彼の自伝的素描の中で、次のように記述している。「4歳の時であったと思う。私はある晩、眠り込むちょっと前に、驚いて飛び起きた。私もまたいつか死ななければならないと悟ったことによって揺り起こされたのだ」⁷。しかし、その頃のフランクルを苦しめたのは、死への恐怖ではなく、人生の無常性であり、生命のはかなさが人生の意味を無に帰してしまうのではないのかという問題であった⁸。

1910年、フランクルが5歳の頃、避暑地のハインフェルトに滞在していた時の経験を語り、「外部からまもられている」という安心感は、彼自身の生活の環境によって贈られたものであると感じていたことを述懐している。ある晴れた朝に目覚めたフランクルは、目を閉じたまま庇護されているという感情に包まれ、言葉では言い表せないほどの至福感に満たされて目を開けると、父が微笑みながらフランクルの上に身を屈めてのぞきこんでいたという記憶を回想している⁹。

1916年の秋、フランクルが11歳の時、シュペル・ギムナジウムに入学し、8年間、そこで学んだ。フランクルの生い立ちにおいて、「人生の意味と価値」のテーマが傑出して、彼の心をとらえていた。13歳の時に、フランクルは、深い衝撃の中で次のことを体験した。人生を酸化過程に還元することを望む生物学の教師がクラスで講義し、その時代のシニズムとニヒリズムを反映する命題を表明したのだ。その教師は言った。「結局、人生は燃焼過程、酸化現象以外の何ものでもない」。それに対して、若きフランクルは跳び上がって激昂して抗議し、問いを投げかけた。「それならいったい、全生涯はどんな意味を持つというのか」¹⁰。同じ時期に、後にフランクルが自ら「無神論または不可知論の時代」と呼んだ

個人的な危機が始まった。フランクフルは、真剣な探求、自問自答を繰り返し、ときには希望を見失いそうになった。価値と意味が收拾のつかない混乱状態を呈していった。彼は、徹底的な探求と問い、そして絶望の段階を生き抜いた。フランクフルが知的な困難に突き当たった時、心理学が彼を魅了した¹¹。

1919年の頃、フランクフルが14歳の頃に、ヴィルヘルム・オストヴァルト (Wilhelm Ostwald) やテオドール・フェヒナー (Gustav Theodor Fechner) 等の自然哲学者たちの思想に惹かれていた。その後、避暑でエファージングに出かけるために、蒸気船でドナウ川を遡っていた日の真夜中、デッキに横たわって「私の頭上の星空」と「私の内の均衡原理」を熟視していた時、涅槃とは「内側から見られた」熱死なのだと悟る「アハ体験」をした¹²。中学生の頃には、フランクフルは公開講座の知らせを見落とすことなく、夜間の市民向け心理学講座に出席した。週末の朝は夜明けに起きて、市民講座の精神分析学の講義を聞きに行った。フロイトと心理療法は若きフランクフルの興味関心を惹き付けた¹³。医者になりたいという幼い頃の夢が、「精神分析」の影響によって明確に精神科医になりたいという希望にまとまり始めた。応用心理学や実験心理学にも興味を抱くようになり、勉強をしようと民衆大学に出入りした¹⁴。16歳の時に、フランクフルは、ウィーンの民衆大学の哲学的な共同研究グループの中で、人生の意味について研究報告をした。当時、フランクフルは既に、生涯にわたり重要であり続けた根本的な表現を見出していた。「私たちは、人生の意味を尋ねてはならない。そうではなくて、私たちは問われている存在である。そして、私たちは、私たちの現存在の責任を負うことによってのみ、この生の問いに答えることができる」¹⁵。また、超意味の概念、人間の理解力を越え出る「最終的な意味」の概念の探求も、当時既に、フランクフルの頭に浮かんでいた¹⁶。

フランクフル自身が、心理学主義的な誘惑に抵抗するにはまだ未熟であったことを、後に述べているように、当時の時代に即応した心理学的な考えに対してなお開かれたままで、フランクフルは高校卒業資格試験研究として、論文「哲学的な思考の心理学について」を執筆した。この研究に対しての確定的な結論として彼は、ショーペンハウアーの哲学と取り組み、「病気/健康」と「誤り/真理」のカテゴリーが曖昧にされてはならないという考えを強調した。この考えは、後に次の決まり文句に凝縮していく。「人生の意味を疑う人は、それどころか人生の意味に絶望する人は、それだからといって直ちに、彼が病気であることと等しいわけではない」¹⁷。心理学主義的な誘惑に、さらに社会学主義的な (soziologistisch) 誘惑が加わり、フランクフルは、ギムナジウムの時代を通じてずっと社会主義労働者青年団 (Sozialistische Arbeiterjugend) の役員を務め、1924年には、「全オーストリア社会主義中高校生連盟 (sozialistische Mittelschüler von ganz Österreich)」の代表理事も担当した¹⁸。21歳のフランクフルは、フランクフルト・アム・マインで、社会主義労働者青年団の前で、人生の意味のテーマについて講演した¹⁹。

哲学的な興味関心は、フランクフルにおいて、ロゴセラピーを特徴づける哲学的な性格の中で貫徹された。フランクフルは、彼の自伝的なスケッチの中で、次のように記述している。

「私のすべての研究を一貫して流れて費やされたテーマは、心理療法の意味の問題性と価値の問題性を考慮した、心理療法と哲学の間の境界領域の解明である。そして、私が全生涯の間に格闘したほどにひじょうに長く、この問題性と格闘した人をほとんど誰も知らないということ、私は述べておかなければならない。その解明が、すべての私の仕事の背後にある主題である。しかし、私にその仕事を仕上げる気にさせた動機は、心理学主義がたいてい同時に《病理学主義》に付随して現れている、心理療法の領域での心理学主義の克服であった。両者はしかし、より包括的な現象の、すなわち社会学主義と生物学主義もそれに属する還元主義の視座でもある。還元主義はいずれにせよ、今日のニヒリズムである。それは人間を縮小し還元し、ある完全な次元を、すなわち人間的な次元を奪い去る。それは、特殊なヒューマン (Humane) を、人間的な空間から副次的な人間の平面の中に投影する。一言で言うと、還元主義は副次的なヒューマニズム (Subhumanismus) である」²⁰。

ここには、フランクルの哲学的な興味関心からスタートした、彼の生涯を貫きとおしたライフワークのテーマが簡潔に示されている。

II フロイトの精神分析の受容と批判

(1) フロイトへの接近と精神分析の受容

「人生の意味と価値」を求めての関心からフランクルは、ギムナジウム時代にフロイトの精神分析に興味を持つようになり、市民講座で精神分析の講義を聞き、16歳の頃には、当時既に著名であったフロイトと文通を始める。フロイトへの個人的な接触は、手紙によるやりとりで制限されていた。1922年に、フランクルはフロイトに「身振りの肯定と否定の発生について」というタイトルの原稿を送った。フロイトは、ギムナジウム最上級生であるフランクルの、精神分析的に方向づけられたその論文を、『国際精神分析ジャーナル』の掲載のために転送した。2年後の1924年に、この論文が雑誌に公表された²¹。この論文の中で、フランクルは肯定的な表情と否定的な表情を、性衝動と栄養摂取衝動に対しての嫌悪感の反応の結果として説明を試みる。フランクルは明らかに、根本的な人間の関心の問題を、リビドーへと還元するフロイトの無意識の心理的な力動性を根拠にして解明しようと試みている。殊に、フランクルがこの論文の中で、「嫌悪感を惹き起こすものとして、性衝動と同じように栄養摂取衝動の対象が考慮される。しかし私たちが、両方の基本的な生命の衝動を“リビドー”の意味における概念的な統一体の中に持ち運ぶやいなや、身振りの肯定の説明に際しては、結局、関連づけの二元性によって条件付けられる仮説の多様性が相殺される」²²と述べる時、そこに、精神分析によって魅了されたフランクルの理論的同一視を見ることができる。

フランクルが、フロイトの学説において評価したものは、フロイトが、「意味への問いを提出した功績」と、神経症的な症候を解釈するために「無意識的な心的生活に分け入り、人間の心的存在を解明しようとした業績」であった²³。フランクルによれば、フロイトは、

神経症的な症候の発生の本質的な契機が、抑圧・意識内容の無意識化の中に存していると解釈した。そのことはフロイトに、無意識の心的生活の中へと突き進み、人間の心的存在の全次元を解明することを強要した²⁴。精神分析の範疇において、人間は、完全に無意識的本能的なものから理解された。フロイトは、唯物論的機械論的なものの見方をその根底に置いた。それに基づく、すべての心的な現象は、ただ単に原因と結果のパターンに従って自動的に進行する生理学的なプロセスだけである。 فرانクルの理解に基づく、精神分析にとっては、「結局、神経症は妥協という結果に、心的葛藤を引き起こす衝動か、精神分析のいわゆるエス・自我・超自我のような心の内部の抑制中枢 (Instanz) の諸要求の間の妥協という結果に帰着する」²⁵。

フロイトにとっては、衝動の学説が精神分析の中心に位置している。精神分析の人間像は、人間が衝動と無意識によって決定された存在である地点を出発点とする。「無意識 (エス)」の決定性は、あらゆる心的な行為が無意識の行為として始まり、そして自我によっては制御されることができないという現象の中で出現する。そのことは最終的に、人間は無意識の支配下にあるということの意味する²⁶。

(2) フランクルによる精神分析批判

フランクルはギムナジウム在学中の1923年に、社会主義労働者青年団の役員として、新聞『その日 (der Tag)』の青少年の新聞折り込みの中に、次のタイトルの論説を投稿している。それらは、「“歓喜の歌...” (“Freude, schöner götterfunken...”)」 「精神のスポーツ化 (Geistversportlichung)」 「サッカースポーツの心理学へー健全なる精神は健全なる身体にー」 「自省」の4点である。フランクルは、1924年以降、フロイトの思想から離れ去るのであるが、上記の論説の中において、彼が未だ精神的な影響を色濃く受けていたことを窺い知ることができる。しかし、既に当時、フランクルが明らかに精神分析以外の「他の」世界に目を向けていたことも、それらの論稿から読み取ることができる。たとえば、論説「“歓喜の歌...”」の中で次のように語っている。「私は、人生の“自己目的”という常套句を憎む。そのフレーズは、人生からできる限りの最大限の価値と意味を奪う。人生の価値と意味に関しての正当な承認のための、他の道が存在している。人は、ただ誠実でなければならない」²⁷。そこには、フランクルのロゴセラピーの基盤的概念である「自己超越」による「人生の意味と価値の志向」に、フランクルが既に視線を向け始めていたことが伺える。さらに、この論稿の中で、フランクルは、哲学への積極的な興味関心も示している。あるいはまた論説「精神のスポーツ化」の中では、「医学的・臨床的な意味ではなく、言葉そのものについての最も真実な意味で精神的な病 (Geisteskrankheit)」の可能性について指摘している。そこで、「私は精神 (Geist) について語るのであり、心 (Seele) について語るのではない」²⁸と述べ、精神と心の区別をして両者を使い分けようとしている。「実存分析・ロゴセラピー」を構想していくうえで重要な鍵概念となる「Geist」が、「Seele」とは明確に区別されて、文献上、ここで初めて用いられている。

精神分析はその人間学において自然主義を乗り越えていないと、フランクルは把握し始

めていた。1938年に、フランクフルは、精神分析の明瞭な特徴は心理学的な原子論とエネルギー論の可能性についての指摘であり、精神分析の行為の信条と世界観的目標は、無意識の要求と現実の要請または拒絶との間の妥協の確立を、したがって実際の現実世界への衝動性の適応を意味していると、フロイトを批判している²⁹。

フランクフルは、フロイトを「心理療法の開拓者」としてその業績を評価するが、彼の人間観の偏狭さを、後に鋭く批判している。フランクフルは、フロイトの用いる概念の背後にある、人間に対する態度を問題にした。フランクフルは、フロイトの精神分析においては人間性が歪められ、人間を単なる衝動の集まりや反射の連続に化してしまっていると考える。精神分析は、最終的に人間の中に、機械的なモデルに結び付けられた心的な装置の自動性を見る。このことは、人間の目的に向かっての努力は本来的ではないことを意味する。人間は「エス」によって駆り立てられた存在であり、自由がなく責任がないのだから、非本来的になるというのだ。フランクフルは、フロイトの理論のなかに、すべての心的事象を性的衝動である「リビドー」から説明しようとする「還元主義」を嗅ぎ取り、それに対して疑念を抱いたのだ。フランクフルが後年、精神分析は「モラルの系譜に関して、モラルを衝動性の抑圧へと還元できると想定する点についてだけではなくて、心的存在を支配する目的論についても、視野を制限するという罪を犯している」³⁰と述べる時、彼の理解によれば、精神分析の人間像は、衝動と無意識によって決定された自由なき存在である。

III アドラーの個人心理学の受容と批判

(1) アドラーへの接近

精神分析に対するフランクフルの信頼が揺らいだとき、心理療法のフィールド上では、アドラーの個人心理学がウィーンでの唯一の選択肢であった。アドラーの個人心理学は、精神分析の機械論的虚無主義的な傾向に対しての批判を描出している。個人心理学は、人間的な関係をその中心に持ち込み、全人格的な発達を力動的、目的論的な共同体に刻印される人生の展開と見なす見解に至っている。人間の心理への社会的かつ目的論的な接近でもって、個人心理学は、現象学的全体論的個性記述的であるとともに人道主義的と称される³¹。アドラーによれば、人間は衝動のメカニズムではなくて、常に目標と価値に向かって立ち上がる、人格的なスタイルを持つ個人である。アドラーは、神経症の発生において、人間は行為し選択し、自分自身を形成する主体として振舞い反応するということを承認する。アドラーによる神経症の定義は、共同体に対しての襲撃（*Attacke*）である。それは、防御（*Sicherung*）と妥協（*Arrangement*）である。神経症は、神経症患者が責任から身をもぎ放すために彼の日常の現実と締結する協定である。したがって、個人心理学の目標は、すべての人生の課題の解決に対して必要とされる、連帯感情による劣等感の克服である。この連帯感情は、人間に対して、完璧性を目指しての努力にふさわしい形として意識させられなければならない³²。アドラーは、社会的な視座に立って、古典的なフロイトの衝動の構想を拡張した。リビドーのエネルギーが、人間の心的支配の唯一のエネルギー源ではなく、

それと等価において、劣等感の補償と補償過剰に対する衝動が存在するとアドラーは述べる。神経症は、否定的な人生経験によって絶え間なく育まれる劣等感の表現だとアドラーは考えた。精神分析が、人間を日常生活の現実には適合させるという目標を定めた一方で、個人心理学は、現実を勇敢に形成していくという目標を追求した³³。1924年に、フランクフルは、フロイト派には欠けていた、個人心理学協会の社会的な隣人愛に基づく慈善の方向性に夢中になっていった。フランクフルはアドラーの支持者となり、1925年、彼の学術論文「心理療法と世界観」が、アドラー派の専門雑誌『国際個人心理学雑誌』の中に掲載された。フランクフルは、アドラーと彼の個人心理学を、フロイトに対して、世界観的な見解において前進させていると見なした。アドラーは、人間に対して、努力の方向性を自ら決定するという決断の自由を認めていた。フランクフルは強い好奇心を持ち、興味を抱いて個人心理学の方向に向かっていった。個人心理学は、若きフランクフルにとって精神的な拠り所となった。フランクフルは、自らの論稿を個人心理学雑誌に掲載して公表するという独自の寄与をもって、個人心理学を支援した。

当時、フランクフルが公にしたいいくつかの論稿の中でも特に、以下の三つの論説「心理療法と世界観」「主知主義の心理学に対して」「愛と責任」において、個人心理学的な思考の枠組の範囲内で、心理療法をより実り豊かなものに発展させていこうとするフランクフルの思考の足跡を、その中に読み取ることができる。

(2) 論説「心理療法と世界観」

1925年に公刊された、フランクフルが20歳の時の論文「心理療法と世界観」の中に、既に、若きフランクフルの哲学的な興味関心が如実に表れている。この研究のアプローチの方向性の中に、フランクフルの生涯のすべての仕事の背後に存在する、フランクフル自身の主題が非常に明瞭に表現されている。すなわち、「心理療法と哲学との間の境界領域の解明」と「心理療法における意味と価値の問題性の解明」である。

フランクフルはこの論説の中で、心理療法において、神経症患者の「世界観」へと目を向けていく必要性に言及する。神経症患者は、ある確固とした世界観、ある哲学的な体系、あるいはまた形而上学的宗教的な人生観を持っており、それらは最終的に、引き続く根本的な治療の基盤をつくり出すために、哲学的な反証でもってのみ対処されることができるといふのだ。ここに、すべての心理療法の問題性が明示されている。すなわち、心理療法の心の治療の際においては、「世界観的な視座への拡張」と「価値づける心理療法」の必要性の問題が露呈してくると考え、フランクフルは次のように述べる。「この最も高次の抽象化も、このすべての情緒的なものから、外見上、原則的に依存しないで独立している思想、哲学問題と見解は、結局、該当者の無意識的な内面生活において、基礎づけられ条件づけられ決定されている。(中略) 神経症から、その抽象的な支え、虚構を奪い、それをより容易に除去するために、真っ先に上部構造に着手することは状況によっては必要不可欠である」³⁴。さらに引き続いて、次のように述べる。「彼らに対して私たちは、それ故に、哲学的な反証を持って近づいて行かなければならない。(中略) より広い治療のための基盤を、

すなわち神経症の議論の余地を創造するために、最初に、彼の価値づけに影響を与えなければならない」。フランクによれば、神経症患者の根本的かつ継続的な治療のためには、患者の思想や哲学的見解に視線を向け、その再構成に向けて、治療の方向性を見出すべきだということである。ただし、「世界観の論理的な上部構造を神経症の情動的な下部構造でもって取り壊す」という治療の方針の承認は、世界観的な決断の領域にまで歩を進めようとしているが、未だしかし、あくまで個人心理学の枠組の範囲内での療法であり、個人心理学の療法内でアプローチしていくことのできる視野の拡張を目指している。

しかし、上記の論説の中で、「神経症からその抽象的な支えと虚構を奪い、それをより容易に除去するために、真っ先に上部構造に着手することは必要不可欠である」と述べる時、フランクは、個人心理学を越えた彼方を指し示している。フランクは、この治療の方向性についてさらに論述する。「必要なことは、総じて、治療と同様に主知主義的な神経症患者の批判的な基礎づけである。私たちは次のことをはっきりと知っていなければならない。すなわち、心理療法の原則は本質的に倫理的なもの、すなわち価値づけるものである」³⁵。フランクの非常に重要な、治療の根本的態度とでもいえる命題が、ここで初めて表明されている。心理療法における「価値づけの必要性」の問題である。フランクは、患者の真の救済のためには、患者の価値づけの問題に突入していかなければならないことに論を進める。後にフランクは、患者の「世界観の中での価値づけ」の問題について考察を深めていき、患者の心的な葛藤を世界観的な決断の領域にまで追求しなければならないという論理的な境界にまでに至り、論考「心理療法の精神的な問題性について」(1938年)³⁶「心の医師の自省」(1938年)³⁷「哲学と心理療法—実存分析の基礎づけのために—」(1939年)³⁸の中で、それについて詳述する。ここで論じられている「心理療法と世界観的な決断」のテーマの中に、フランクによって後に展開されていく、その問題性の追究の端緒を見出すことができる。フランクは、その問題を追究していかなければならない根拠として、次のように語る。「神経症患者は幸福ではありえない。なぜなら彼は、人生を軽蔑し価値無きものにし憎んでいるので、人生を十分に遂行するだけの力がないのだから。人生に対する愛を、共同体に対する意志を、彼に完全に再生させることが心理療法医の使命である」³⁹。

この論考において、価値の問題との取り組みと、病因論的な神経症を引き起こす価値の葛藤との「精神的な対決」の治療上の方法が、析出されて明示される。フランクの次の主張はこの論考の核心を衝いている。「私たちはそもそも、より広いこれ以上の治療のための基盤を造り出すために、ここで最初に彼の価値づけに影響を及ぼさなければならない」⁴⁰。人生の「価値」と「意味」が問題となっているのだ。フランクが共同体感情のアドラーの思想と結び付いている限り、彼は個人心理学的に染められている。しかし、一方において、フランクが価値の実現と使命の発見に関連づけられている限りにおいて、彼は個人心理学の枠組を越えてロゴセラピーの方向に導かれていると言える。

(3) 論説「主知主義の心理学に対して」

1927年の個人心理学の普及のための雑誌『日常における人間』に、 فرانクルの二つの論説「個人心理学への導入」の第一シリーズとその続編が掲載された。この二つの論説はいずれも、環境と教育がいかに関人の全人格性に影響を及ぼすのかを、個人心理学的な経験に基づいて共同体の教育的意義に重点を置いて考察しており、個人心理学に色濃く影響を受けている論述である。しかし、1926年に雑誌『国際個人心理学雑誌』に掲載された論稿「主知主義の心理学に対して」と、1927年に雑誌『客観性 (Sachlichkeit)』に掲載された論稿「愛と責任」の論述の中に、後のフランクルのロゴセラピー構築の契機となる個人心理学に対して挑戦的な、理論的拡張の試みが浮き彫りにされている。

フランクルは、論説「主知主義の心理学に対して」において、主知主義の多様な現象形態を、「知識への渴望」「神秘主義」「懐疑論」「一面性」の四つのグループに分類し、それぞれのグループの問題性を指摘している⁴¹。そして、その克服の可能性は、哲学の領域から出発することによって可能になると考察する。さらにフランクルは、その論説の中で、次のような重要な発言をしている。「私たちが病的であると呼ぶ事柄が、即間違っているということは、ア・プリオリに決して確かではない。私たちが、たとえば主知主義的な見解や価値づけを、個人心理学の光の中で人生の不正だと思ふことでもって、それ自体で人生の誤りであるとはとうてい言えない。私たちはここで、心理学主義の誤りに陥ってはならない。すなわち、心的な行為の事実性から内容の妥当性を解明することができる信じ、病理学的行為のある内容に関する自律性と可能な本質的根拠を見逃す心理学主義の誤りに陥ってはならないのだ」⁴²。すなわち、人が神経症的であるからといって、彼の抱く見解、たとえば「意味への問い」のような内容それ自体がいつでも常に病的な症候であり誤っているとは言えないというのだ。見逃してはならない「内容に関する自律性」と「可能的な本質的根拠」とは、例えば患者が抱く人生観・世界観であり、それをフランクルは神経症の単なる病的な症候であると言って片づけてしまってはならない、神経症患者も意味への問いを發し、真理を語るができること言うのである。ここに、明らかにアドラーの個人心理学的な神経症の理解を越え出て、患者の病気への態度に目を向けようとするフランクルの理論的發展を見ることができる。それ故に、フランクルにとって個人心理学は、「心理学主義と論理主義との間の裂け目の来るべき架橋を考慮して、暫定的に未だ十分には評価することができない部分を成し遂げているように思われる。(中略) いずれにせよ私たちは、既に哲学的な境界領域の基盤上に到達している」⁴³。主知主義の克服の可能性は、哲学の領域からの出発において存在する。哲学の本質は「原則的に偏見にとらわれないで、興味関心から離れて思考すること」であり、「人は、哲学が、哲学の最終的な成果において、人生の価値と人生の意味の(たとえ、単にある限界概念であるとしても)、十分な無条件的な承認に達するという以外に、哲学からは他にほとんど期待することができない」⁴⁴。フランクルは哲学的知見を導入することにより、個人心理学をより実り豊かなものにしていこうと望んでいた。さらにフランクルは、過度に思索的な活動を發展していこうとして

主知主義に陥る神経症的な人間に対して、極端な自己観照によってではなく、行動と行為によってこそ人間は自分自身を認識することができるのだと、視点を転換していく必要性を主張する。

(4) 論説「愛と責任」

1927年、フランクフルは、論稿「愛と責任」の冒頭で次のように述べ、後のロゴセラピー構想の人間観の基盤的な概念となる「責任性 (Verantwortlichkeit)」について言及している。「責任性は、私たちがそれを倫理的に主張したとたんに、人間の人格性の名義に書き換える本質的なものとなる」⁴⁵。フランクフルは、責任性を人間の倫理的な中枢概念であると主張している。しかし、フランクフルは続けて「この倫理的な解釈はまた、私たちのすべての個人心理学的な教育方法と治療方法の基礎にもなっている」⁴⁶と述べ、個人心理学の枠組みの中で論及していこうとしている。引き続いて、フランクフルは次のように論述している。「それに応じて愛の中における責任性は、その解決が望ましいのだけれども困難な、ある問題を意味している。エロティックな領域で、臆病者からすべての責任を奪い、彼を圧迫する重荷から解放することは、まさに精神分析の歴史的な使命であった。なぜなら、衝動で満たされた存在としての人間の見方、すなわち駆り立てられているという人間の構想は、彼に対して、すべての弱さと落ち度の弁解理由を調達してやるのに十分にふさわしかったのだから。いったいどのようにして、私たちは、駆り立てられた人間に責任を問うことができるのだろうか」⁴⁷。衝動によって駆り立てられた存在であるという人間観をベースにした療法によって、困難に直面している人間から責任性を奪い取ることは許されないと、フランクフルは主張しているのだ。彼はひき続き、次のように述べる。「愛とは、次のようなものだ。すなわち、愛においては、衝動的なもの、有機的なもの、運命的なものは、信じられないほどのひじょうにわずかな関与だけしかしていない」⁴⁸。フランクフルによれば、愛の本質は、衝動性や有機的かつ運命的なものには依存していないというのだ。愛する者の責任は、拒否されてはならないのだ。

ここに、人間は衝動によって駆り立てられる存在ではなくて決断する存在であり、愛に基づく「責任性」において態度決定を為すことができる自由な存在として捉える、フランクフルのロゴセラピー的人間観を見ることができる。すなわち愛の現象を単なるリビドーや共同体感情に帰してしまうのではなくて、愛の実在性を守り、愛に基づく責任性において決断する人格の尊厳性を承認する見解が顕れている。次のように述べるとき、青春期にある人間に対して信頼し、彼を内的な自由と自覚的意識的な責任性へと導く、フランクフルの心理療法の方向性を示唆している。「彼に対して、決断を鋭く緊急にする！なぜなら、私たちは、そのようなケースにおいて忠告することは許されないし、できないのだから。すなわち、人間をそれ以上さらに自立していない状態のままに放置しておくことは許されず、また許すこともできない。私たちは、彼に対してむしろ策略を指し示さなければならない。彼を勇気づけて意識的な責任性への自覚へと教育しなければならない」⁴⁹。フランクフルは、個人心理学の人間観の範疇の中に、決断する存在としての「責任性」の意義を導入して、

個人心理学をより包括的な豊かな人間理解へと導こうとしている。ここに、人間を、自由な意志決定において決断する「責任」を引き受けていかなければならない存在として把握しようとする、 فرانクルのロゴセラピー的人間観が如実に表明されているのを見ることができる。

(5) 個人心理学への反駁

上述の3つの論説「心理療法と世界観」「主知主義の心理学に対して」「愛と責任」の中において、フランクルが自らの人間学と哲学的知見を導入することにより、個人心理学の理論を現実の人間に適応できる包括的な、哲学的人間学的な基盤の上に再構成しようとする試みの萌芽が窺える。しかし、その試みは、実際にはアドラーの理論の枠組をはみ出していくこととなり、結果として個人心理学協会からの離脱へと立ち至る。

1925年の論説「心理療法と世界観」において、フランクルは、「心理療法と哲学との間の境界領域の解明」と「心理療法の意味と価値についての問題性の解明」のテーマを提起し、心理療法における倫理的な価値づけの原理を支持した。心理療法が、「価値自由」という原則に固執して患者の価値観に関与するのを控えて手をこまねいているのではなくて、場合によっては積極的に患者の価値観に関わっていかなければならないというのだ。殊に、生の意味を疑い、人生の価値が存在することに異議を唱える患者を前にした時、それから逃げることなく、その世界観に正面から対峙しなければならないと、フランクルは考えた。

アドラーとフランクルの最初の意見の相違は、神経症に対する見解の違いにおいて表面化した。1926年、デュッセルドルフでの個人心理学の国際会議上で行われた基調報告において、フランクルは、アドラーの神経症理解に対して異論を唱えた。「私は、次のことに対して、異議を唱えた。神経症は実際、あらゆるところで常に、その《妥協 (Arrangement) の性格》の学説の意味で、目的のための単なる手段であるということに対して。私はむしろ、神経症を解釈するために、別の可能性を強く主張し固執した。すなわち、神経症を（ただ単なる《手段》としてではなくて、また《表現》として、それ故にただ単に手段として役立つ意味においてだけではなくて、表現的な意味においても解釈できる可能性を主張した」⁵⁰。フランクルは、アドラーの見解とは異なり、神経症を人間の決断の表現として解釈する別の可能性を主張したのだ。フランクルの熟考は、人間はただ単に、神経症的なふるまいの犠牲であるのかという問い、あるいは神経症的な態度を克服するために何かを為すことができるのかという問いに帰着した。フランクルは、神経症患者は自らの神経症に対して責任が問われるのかどうかという意味では自由ではないが、自らの神経症への「態度」に対して責任がある限り、自由が備わっているという見解であった。神経症はあらゆるケースにおいて、ある特定の目的への単なる手段として、利己的な利得の獲得の手段として解釈されるのではない。神経症は、ただ単にアリバイ、口実、妥協ではない。そうではなくて、神経症的な症候は、熟考された決断の、世界観の、哲学的な自己解釈の自由な決断の表現として理解されることができると、フランクルは考えた⁵¹。神経症の症候の、単なる排他的な妥協的性格の把握は、人間の多次元的な性格をなおざりにするというのが、

フランクルの見解であった。

1926年の論稿「主知主義の心理学に対して」の中で、フランクルが「病理学的行為のある種の内容に関する自律性と可能な本質的根拠を見逃す、心理学主義の誤りに陥ってはならない」⁵²と語るとき、そこにフランクルの、人間の本質に眼差しを向けようとする哲学的人間学の視座を窺うことができる。フランクルは、神経症患者の「人生への態度」を、患者の症候から切り離して考察しようと試みた。すなわち神経症を単なる症候として捉えるのではなくて、その症候の根底にある人間の苦悩や決断の表現を見抜き、人間存在全体の真実に迫ろうとしたのだ。

さらに、1927年の論稿「愛と責任」においては、衝動によって駆り立てられた自由なき人間像から、「態度決定」に対しての責任をもつ人間像へと論を進めている。愛の本質を、決断において担う責任性の中で照射し、人間を、衝動性に満ちた存在としての理解からさらに歩を進め、責任性を自覚する存在として把握しようとした。

フランクルにおいては、精神分析か個人心理学だけであった当時の心理療法の文脈の中で、特定の決定論のとりこになっている人間像の克服が問題であった。心理学主義の中で凝縮し、一時的にはあるがフランクルも信奉した人間像の克服が肝心のテーマであった。フランクルの認識では、アドラーもフロイトと同様に一種の還元主義者である。アドラーは、彼独自の体験から、人間の思考と行動を一つの基礎的な衝動、すなわち社会的劣等感とあらゆる種類の欠陥を克服しようとする努力に還元した。フランクルの理解によれば、アドラーはフロイトの心理学主義を自分のそれで置き換えただけなのだ。アドラーの個人心理学の動機づけ理論は、心理的な因果性の場所に心理的な目的性を置くことにより、フロイトの精神分析の動機づけ理論を凌駕しているように見えるが、実際は、個人心理学的な動機づけ理論もまた単子論主義のままであると主張して、フランクルは、その問題性を明確に指摘する。アドラーの動機づけ理論によって導入された目的性は、心的内部の目的性であるのだから、個人心理学の人間像の範囲内では、人間の目指す目標は心理の枠組を出ていない。フランクルの解釈によれば、アドラーにとって、人間とは本来的に、ただ単に劣等感の克服と他の代償作用のメカニズムの克服だけが問題である、単なる心理内部の情勢の再修復だけが問題なのだ⁵³。アドラーの個人心理学は、人間を衝動によって駆り立てられていると見る精神分析に対して、人間を目標によって引き付けられているとして把握するが、人間の精神性に基づく決断の自由の可能性は本質的に顧慮されていない。フランクルは、フロイトの精神分析と同様、アドラーの個人心理学は人間の全体像を見失っていると考えた。力動性心理学としての両者は、人間のすべての経験を心理的な平面で解釈するために偏狭な人間観しかもてなくなり、そのため人間の精神性と人間の本来的根源的な志向性を無視して、人間を単なる本能的な衝動のメカニズムの構造と見做し、人間の現実を、心の内側で生起する心的事象に還元しているとフランクルは考えた。その考察へと導いたのが、アラースとシュヴァルツであった。

IV 力動性心理学からの離脱の背景

(1) アラースとシュヴァルツの影響

1925年、フランクフルトは、アドラーの個人心理学のサークル内で二人の重要な指導助言者、アラースとシュヴァルツと知り合う。当時、アラースとシュヴァルツは、個人心理学協会の人間学の分科会を主宰していた。二人は、フランクフルトに対して、哲学的、かつ人間的に重要な衝撃と影響を与えた。フランクフルトは次のように述べている。「アラースとシュヴァルツは、私に、人間として深い印象を与えただけではなくて、私に対して、持続的に後々まで残る影響を与えた。(中略) 私はアラースのもとで、彼が指導する感覚生理学の研究室で実験的研究を始めた。それに対して、精神身体医学と医学的人間学の創始者であるシュヴァルツは、光栄にも、私に対してある書物の序文を書いてくれるという敬意を示してくれた」⁵⁴。殊に、自由な批判精神の持ち主であった精神医学者アラースから、フランクフルトは大きな感化を受けた。アラースは、フランクフルトと同様に、心理学、精神医学、心理療法に対しての哲学的な思索の必要性を見抜いていた。アラースは、良心を「自分自身を捧げる」形態として、人格の発見の場所と手段として理解した。その把握は、意味付与はもっぱらただ意味発見としてのみ可能であるというフランクフルトの見解に繋がっていった。クライトマイアーは次のように述べている。「超越的なものに向かっての認識の極限状況もまた、超越に向かってのフランクフルトの率直な開放性の中に反映している。この領域は、フランクフルトに際しては、そのとき『超-意味 (Über-Sinn)』と名付けられる。その『超-意味』は、社会に精通している意味と同様に、主観的な意味を誘発している。“客観的な”人格の生成 (Personwerden) を最初に基礎づける表象された価値との、人格的主観的な同一視として言い換えられる、アラースの『人格-存在 (Person-Sein)』を、フランクフルトは、『自己-超越』することができる能力として、彼自身による『意味-器官 (Sinn-Organ)』としての良心の理解と一致させることができた」⁵⁵。フランクフルトは、アラースの人格的形而上学的に方向づけられた思索の中に、自身の考えの統合の可能性を見出すことができた。

フランクフルトの助言指導者であるアラースとシュヴァルツは共に、実存的に方向づけられた心理療法を発展させようと骨を折り、アドラーが同意しなかった人間学的な立場を主張した。フランクフルトは1938年に公にされた論文の中で、実存分析を根拠づけていくために、人格の責任性を人間学的な中心概念として位置づけて「価値づける心理療法」を構想していくが、その文脈の中で、アラースとシュヴァルツに言及して次のように述べている。「心理療法に関して、アラースはかつて心理療法を、“責任性の承認への教育”として定義した。(中略) そしてまたマイネルツも次のことを望んでいる。『… 特定の価値をはっきり示して、考え方を変えるのではない。そうではなくて、彼の価値に、彼の人格にふさわしい可能性に向かって突き進むのを援助するのである』。オスヴァルト・シュヴァルツはまったく明解に、その事態を次の言葉で表現している。『私たちは態度を授けるのであり、中味を与えるのでは決してない』。⁵⁶

精神医学と心理療法は、神経症の臨床的な症状の背後に、ホモ・パチエンスの精神的な

困窮を知覚しなければならないという見解を、フランクフルは、アラースとシュヴァルツによって自分の理論に取り入れることができた。二人の影響によって、心理療法に精神的実存的な次元を包含して構想していこうとする契機が、フランクフルの中に生じた。前節で考察した三つの論説の背景には、時期的にも、二人の思想的影響が色濃く反映されていることを推察することができる。さらにフランクフルは、アラースを通してシェーラーの思想を知ることとなる。

(2) 離脱の内実

1927年、フランクフルは、アドラーとの関係が悪化し、アラースとシュヴァルツの影響下に入っていくが、その頃、マックス・シェーラーの思想に惹かれていく。フランクフルは、回想録の中で述べている。「この時期に、私は最終的に自分自身の心理学主義を見抜いた。私は完全にマックス・シェーラーによって目覚めさせられ、彼の『倫理学における形式主義』をバイブルのようにいつも持ち歩いた」⁵⁷。

シェーラーは、人間を人間にする新しい原理として、「精神 (Geist)」を提唱し主張した。シェーラーは、その人間理解の中に精神の概念を導入し、精神を賦与された存在の「世界開放性 (Weltoffenheit)」と「自己対象化 (Selbstobjektivierung)」の能力を提示した。精神的な存在は、衝動や環境に緊縛されているのではなく、「世界開放的」であり、そのような存在は「世界」を所有するといふのだ。シェーラーの哲学的人間学によれば、人間は、精神の力に基づいて、彼の環境の中で個々の対象に取り込まれてしまうことなく、対象それ自体に向かうことができる。フランクフルはシェーラーの人間学によって、人間は環境の影響と衝動の構造から距離をとって離れることができ、自身の行動を自らの洞察と決断に従って決定することができる、「自己超越」と「自己距離化」の能力を潜在的に保持しているという、より深い包括的な人間理解へと目が開かれていった。

フランクフルは、アラース、シュヴァルツ、シェーラーたちからの思想の影響によって展開していった新たな人間理解とその知見を、自らの心理療法に取り入れてより豊かなものにしていこうと試みる。フランクフルの試みは、しかし、あくまで個人心理学の枠組の範囲内でのチャレンジであった。前節で論及したフランクフルの論説「心理療法と世界観」「主知主義の心理学に対して」「愛と責任」は、フランクフルの思索の試行錯誤的なアプローチが表明されていると考察される。シェーラーたちから示唆を受けて深めていった自らの人間学を、哲学的思索に基づいて新たな地平へと展開していこうとしているが、フランクフルはあくまで、アドラーの個人心理学を、より包括的な人間理解を基盤にした心理療法に変革していこうと努力している。事実フランクフルは、困窮する青少年の相談活動に献身していた1926年に、個人心理学の相談活動の意義とさらなる充実を求めて、「個人心理学的な青少年相談の必要性について」というタイトルで新聞に論説を掲載している。その中で、フランクフルは次のように述べている。「社会的な基準の中における教育への私たちの介入は、もしかしたら、何よりもまず教育相談所の形において、個人心理学の最も実り豊かな適用ならびに民族の集団の中でのその視点の最も広範な普及を、私たちに対して保証する」⁵⁸。そ

して、その論説の締め括りで、「個人心理学者たちにとって、ここで援助する明白な可能性は、彼らに対して、きわめて報われることの多い活動分野を開示している」⁵⁹と述べて、個人心理学が青少年の相談助言活動に対して貢献できることに大きな期待を寄せている。

しかし、 فرانクルの思いは、実際にはアドラーには届かなかった。1927年、フランクルの師であるアラーズとシュヴァルツが、ウィーン大学歴史研究所の大講堂で開催された会議の席上で、アドラーの新しい還元主義を直截に指摘し、個人心理学協会からの脱退を公然と表明した。フランクルはそのころ、彼自身としては個人心理学協会から脱会する意志はもってはいなかった。個人心理学は還元主義から自らを救済することができ、自らの力で心理学主義の殻を破っていけると、フランクルは考えていた。しかし、その場に同席していたフランクルはアドラーに与せず、アラーズとシュヴァルツの肩を持った。このことがきっかけとなり、フランクルとアドラーとの関係は気まずくなり、アドラーが一方的にフランクルを無視するようになり、最終的にフランクルは、アドラーの意思により個人心理学協会から正式に除名されることになった⁶⁰。フランクルの内面的な思想的変遷の推移が、上記の経緯を辿って結果的に個人心理学協会からの除名という形となって生じたのが、力動性心理学からの離脱の内実であった。

第一章 註

- 1 Klingberg, H. Jr.: When life calls out to us, New York 2001, p.19. [ハドン・クリングバーグ・ジュニア (赤坂桃子訳) 『人生があなたを待っている I』 みすず書房, 2006年, 41頁。]
- 2 Vgl. Raskob, H.: Die Logotherapie und Existenzanalyse Viktor Frankls, Wien 2005, S.13.
- 3 Ebenda, S.13f.
- 4 Ebenda, S.14.
- 5 Ebenda, S.15f.
- 6 広岡義之『フランクフル教育学への招待』風間書房, 2008年, 27-28頁。
vgl., Klingberg, H. Jr.: When life calls out to us, a.a.O., pp.21-25. [邦訳, 44-47頁。]
- 7 Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, München 1995, S.9. [V.E. フランクフル (山田邦男訳) 『フランクフル回想録』春秋社, 1998年, 22頁。]
- 8 Frankl, V.E.: Eine autobiographische Skizze , In: Die Sinnfrage in der Psychotherapie, München 1981, S.144. [V.E.フランクフル(赤坂桃子訳)「自伝的素描」, 『精神療法における意味の問題』 2016年, 183頁。]
Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, a.a.O., S.9. [邦訳, 22頁。]
- 9 Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, a.a.O., S.10. [邦訳, 23頁。]
Frankl, V.E.: Eine autobiographische Skizze , a.a.O, S.146. [邦訳, 184頁。]
- 10 Klingberg, H. Jr., a.a.O., p.44. [邦訳, 78頁。]
- 11 Klingberg, H. Jr., a.a.O., p.44. [邦訳, 78-79頁。]
- 12 Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, a.a.O., S.28. [邦訳, 51頁。] Frankl, V.E.: Eine autobiographische Skizze , a.a.O., S.146. [邦訳, 185頁。]
- 13 Klingberg, H. Jr., a.a.O., pp.42-43. [邦訳, 76頁。]
- 14 Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, a.a.O, S.28. [邦訳, 32頁。]
- 15 Frankl, V.E.: Eine autobiographische Skizze , a.a.O., S.150. [邦訳, 190頁。]
Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, a.a.O., S.36f. [邦訳, 68頁。]
- 16 Ebenda.
- 17 Vgl., Frankl, V.E.: Eine autobiographische Skizze , a.a.O., S.150. [邦訳, 190-191頁。]
Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, a.a.O., S.38. [邦訳, 72頁。]
- 18 Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, a.a.O., S.39. [邦訳, 72-73頁。]
- 19 Ebenda, S.40. [邦訳, 75頁。]
- 20 Frankl, V.E.: Eine autobiographische Skizze , a.a.O., S.151. [邦訳, 191-192頁。]
- 21 Frankl, V.E.: Zur mimischen Bejahung und Verneigung, In: Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse, 10, 1924, S.437-438.
- 22 Ebenda, S.438.
- 23 Frankl, V.E.: Freud, Adler und Jung, In: Das Leiden am sinnlosen Leben, Freiburg 1977, S.38. [V.E.フランクフル (中村友太郎訳) 『生きがい喪失の悩み』エンデルレ書店, 1982年, 50-51頁。]
- 24 Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, In: Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, 10, 1938, S.33. [V.E.フランクフル (赤坂桃子訳) 「心理療法における精神の問題について」, 『ロゴセラピーのエッセンス』所収, 新教出版社, 2016年, 78-79頁。]
- 25 Frankl, V.E.: Freud, Adler und Jung, a.a.O., S.39. [邦訳, 52頁。]
- 26 Vgl. Kreitmeir, C.: Sinnvolle Seelsorge, München 1995, S.33f.
- 27 Frankl, V.E.: “Freude, schöner Götterfunken...”, In: der Tag, 28. Jänner, 1923, Nr.60.
- 28 Frankl, V.E.: Geistesversportlichung, In: der Tag, 4. März, 1923, S.12.

-
- ²⁹ Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, a.a.O., S.34. [邦訳, 78-80 頁。]
- ³⁰ Frankl, V.E.: Freud, Adler und Jung, a.a.O., S.40. [邦訳, 53 頁。]
- ³¹ Vgl. Kreitmeir, C., a.a.O., S.45.
- ³² Vgl. Ebenda, S.47f.
- ³³ Vgl. Zsok, O.: Der Arztphilosoph Viktor E. Frankl, München 2005, S.38.
- ³⁴ Frankl, V.E.: Psychotherapie und Weltanschauung, Zur grundsätzlichen Kritik ihrer Beziehungen. In: Internationale Zeitschrift für Individualpsychologie III, 1925, S.250.
- ³⁵ Ebenda, S.251.
- ³⁶ Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, a.a.O., S.33-45.
- ³⁷ Frankl, V.E.: Seelenärztliche Selbstbesinnung, In: Der christliche Ständestaat, 5.Jg., 1938, S.72-74.
- ³⁸ Frankl, V.E.: Philosophie und psychotherapie, Zur Grundlegung einer Existenzanalyse, In: Schweizerische Medizinische Wochenschrift, 69, 1939, S.707-709.
- ³⁹ Frankl, V.E.: Psychotherapie und Weltanschauung, Zur grundsätzlichen Kritik ihrer Beziehungen. In: Internationale Zeitschrift für Individualpsychologie III, 1925, S.252.
- ⁴⁰ Ebenda, S.250.
- ⁴¹ Frankl, V.E.: Zur Psychologie des Intellektualismus, In: Internationale Zeitschrift für Individualpsychologie, IVJg., 1926, S.329-331.
- ⁴² Ebenda, S.327.
- ⁴³ Ebenda, S.327.
- ⁴⁴ Ebenda, S.332.
- ⁴⁵ Frankl, V.E.: Liebe und Verantwortlichkeit, In: Sachlichkeit 2, Nr.1, 1927, IIJg., Nr.1.
- ⁴⁶ Ebenda.
- ⁴⁷ Ebenda.
- ⁴⁸ Ebenda.
- ⁴⁹ Ebenda.
- ⁵⁰ Frankl, V.E.: Eine autobiographische Skizze, a.a.O., S.151. [邦訳, 192 頁。]
- ⁵¹ Ebenda.
- ⁵² Frankl, V.E.: Zur Psychologie des Intellektualismus, a.a.O., S.327.
- ⁵³ Frankl, V.E.: Der Wille zum Sinn, Bern 1972, S.136.
- ⁵⁴ Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, a.a.O., S.41. [邦訳, 75 頁。]
- ⁵⁵ Kreitmeir, C., a.a.O., S.95.
- ⁵⁶ Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, a.a.O., S.38. [邦訳, 103 頁。]
- ⁵⁷ Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, a.a.O., S.42. [邦訳, 76 頁。]
- ⁵⁸ Frankl, V.E.: Über die Notwendigkeit individualpsychologischer Jugendberatung, In: Gemeinschaft, Mitteilungsblatt der Sektionen des Internationalen Vereines für Individualpsychologie, 1.Jg., Nr. 8/9, 1926.
- ⁵⁹ Frankl, V.E.: Ebenda.
- ⁶⁰ Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, a.a.O., S. 42-43. [邦訳, 76-78 頁。]
- Klingberg, H. Jr.: When life calls out to us, a.a.O., p.61-62. [邦訳, 104-106 頁。]

第二章 シェーラーからの思想的影響

フランクフルが、フロイトの精神分析やアドラーの個人心理学から離脱していった理由は、本能的な衝動のエネルギーが人間の心的な現実を支配していると捉えるそれらの力動性心理学が、フランクフルの内的な希求に応えることができなかつたことと、他方、フランクフルの哲学的な探索、殊にシェーラーの思想への傾倒が挙げられる。

本章では、フランクフルがフロイトとの関係に距離を置き、アドラーとの緊張関係の中で苦闘していた時期に出会ったマックス・シェーラーに焦点を当て、シェーラーによってどのような思想的影響を受けたのかを究明していく。フランクフル自身が抱いていた問題意識は何であったのか、シェーラーの哲学的人間学が、どのようにして内面的に揺れ動いていたフランクフルに目を開かせ、新しい思想的境涯に導いていったのかを明らかにしていく。フランクフルの思想的変革のターニングポイントとなるシェーラーの思想的な影響の究明は、ロゴセラピーの創出という新たな展開に踏み出していく際の、フランクフルの思想的基盤を解明していくことに繋がっていくと考えられる。

考察の手順は以下の通りである。第1節において、フランクフルが力動性心理学から離脱していったその本質的な動機は、「心理学主義との闘い」が根底にあったのではないのかという仮説のもとに、フランクフルの思想転換の背景、その観点から見たシェーラーの思想を解明していく。第2節においては、フランクフルが、シェーラーの思想をどのように受容して受け継ぎ、さらに彼の中で発展させていったのかを明らかにしていく。

I 心理学主義との闘い

(1) 思想転換の背景

フランクフルは、幼少の頃より人生のはかなさや無意味さを直感しており、人生の意味への問いを抱き続けていた。彼は、ギムナジウム時代にフロイトの精神分析に興味をもち、当時既に著名であったフロイトと文通を始める。フランクフルが17歳の時、彼の論文がフロイトの仲介で『国際精神分析ジャーナル』に掲載された。やがて、フロイトの精神分析に対して、フランクフルの信頼が揺らいでいくが、その時、ウィーンの心理療法のフィールド上では、アドラーの個人心理学が唯一の選択肢であった。1925年、フランクフルはアドラーの支持者となり、彼が20歳の時、学術論文がアドラー派の専門雑誌に掲載された。

しかし次第に、フランクフルは、フロイトの精神分析とアドラーの個人心理学は、いずれも人間の全体像を見失っていると考え始める。力動性心理学としての両者は、人間のすべての経験を心理的な平面で解釈するために偏狭な人間観しかもてなくなり、そのために、人間の精神性と人間の本来的根源的な志向性を無視して、人間を単なる本能的な衝動のメカニズムの構造と見做し、人間の現実を心の内側で生起する心的事象に還元していると、フランクフルは考えた。すなわち、両者は、「心理学主義」¹に陥っているという見解を抱き始める。

他方、フランクフルが青年時代を過ごした当時のヨーロッパの思想家たちは、フランクフルに

影響を及ぼした。フランクフルは、ショーペンハウアー、ニーチェ、カミュといった無神論的、悲観主義的な哲学者・思想家に対しては概して批判的な態度で距離を置き、有神論的立場に立ち、人生に対して肯定的な哲学者たちに与し、彼らから影響を受けた。ハイデッガー、マルセル、ヤスパース、ブーバーらの超越的な存在を認める彼等から、生を肯定する哲学の豊かな経験に満たされて、時代の悲観主義に苦しめられていたフランクフルの中に、人生には意味があるのだという希望が蘇っていった²。中でも決定的にフランクフルの思想に影響を与えたのは、マックス・シェーラーであった。フランクフルは、自分自身が行っている問題に対して、シェーラーが、彼の探究のテリトリーの中で考察を深めているのを知る。

(2) 基盤としてのシェーラーの哲学

フランクフルは、1926年、デュッセルドルフで開かれた国際個人心理学会（*der Internationale Kongreß für Individualpsychologie*）で基調講演をするが、その時にはもう既に、アドラーの神経症の理解とは異なる見解を主張していた³。フランクフルは、フロイトの影響から離れアドラーの個人心理学にも懐疑を抱き始めたそのころ、哲学者シェーラーに思想的探求の糸口を求めた。シェーラーは、フランクフルの中にまどろんでいた、人間の自由を愛し意味を志向する次元への関心に対して、最大の影響を及ぼした。シェーラーの著作は、フランクフルに、回心にも似た精神的な体験を招来した。フランクフルは回想録の中で、1927年にはアドラーとの関係が険悪になっていたことを記述した後に、次のように述べている。「この時期に、私は最終的に自分自身の心理学主義を見抜いた。私は完全にマックス・シェーラーによって揺り起こされて目覚め、彼の『倫理学における形式主義』をバイブルのようにいつも持ち歩いた」⁴。フランクフルの心に決定的に印象づけ影響を与えたシェーラーの価値論と人間学は、シェーラーの著書『倫理学における形式主義』（1913年）、『実質的価値倫理学』（1913/1914年）、『宇宙における人間の地位』（1928年）の中において描出されている。シェーラーの人間像と世界像、そして神の理解は彼の生涯において変遷していくが、倫理的な人格主義は保持され続けた。

人格の尊厳と自律は、シェーラーの価値論の中で、前面に立ち中心になっている。シェーラーの価値論の描写によれば、価値は、絶対的な、それ自体で存立している普遍的な根源現象である。シェーラーの見解においては、主観的に価値あるものの他に、永遠の客観的な価値あるものが厳然として存在する。価値の客観的な実質的序列は一定不変に存在し、そして、永続性と不可分性等に応じて、高次の価値と低次の価値が区別される。

シェーラーは、人間を人間にする新しい原理として、「精神（Geist）」を提唱し主張した。彼の人間観の鍵概念は「精神（Geist）」である。シェーラーは、この精神作用の中心にあるものを「人格（Person）」にとらえた⁵。人格の概念は、シェーラーにおいて中心的な位置を占める。人格は、思考する自我（Ich）と同一ではなく、その本質からして精神的であり、価値づけることができ態度を決めることができる。精神は、人間を自由にし、有機的な生の束縛から独立させる。自由の中で、ダイナミックに自らを遂行する精神的な存在を、シ

シェーラーは人格という概念を用いて表現する⁶。すなわち、シェーラーの「人格 (Person)」は、志向性、意味の充足、価値の感情といった本質的な存在の統一を、「精神」において基礎づける「人間の実存的な核」、あるいは「精神の担い手・精神が現象する実存在的中枢」と理解することができる。個々の人間が遭遇する具体的な使命は、人間の唯一無二性と人生の一回性に相応して、人格に特有であり状況に特有である。個人は、この使命の充足の中において代用できず代替不可能である。精神性に基づいて、自由と責任性は人間に特有であり、人間の唯一無二である尊厳性を形成している。遺伝的素質、衝動、外的な生存状況から人間は自由であり、また価値に対しても自由である。自由は、価値の現実化に対しての決断への強制を意味する。この決断の前での回避は、「選択」を内容として含む。肯定的な価値の非現実化は、否定的な価値の実現を意味している。シェーラーの自由の概念は、必然的にまた「責任」をも内容として含む。シェーラーは、次のように、人間を理解した。「人間は (中略) 自身を取り囲む現実性に決して安息することはなく、『今ここにおける様存在 (Jetztthierseins)』と“環境世界 (Umwelt)”の桎梏を突破することをつねに熱望する。そのなかには、人間自身のそのつどの自己の現実性 (Selbstwirklichkeit) も含まれる」⁷。

II シェーラーの哲学的示唆

(1) シェーラーの倫理的な人格主義への傾倒

シェーラーの哲学的な著作との出会いは、フランクフルが自身の回想録の中で記述しているように、フランクフルを決定的最終的に眠りから揺り起こし、心理学主義から目覚めさせた⁸。価値哲学者であるシェーラーは、フランクフルを完全に精神的に覚醒させた。その際、さらにフランクフルを助けたのは、彼の友達であるノイアー (Alexander Neuer) である。彼は、フランクフルの原稿に基づいて、フランクフルは「精神の背教者」であることを指し示していると真正面から述べた。このことはフランクフルの心にひじょうに深い打撃を与えたので、フランクフルはその時以来、「もはやそれ以上、妥協すべきものを持たなかった」⁹。フランクフルは、友達の批判的な声に耳を傾けた。フランクフルは、簡潔に書き留めている。「今こそ、自身の心理学主義のそのような自己批判のための絶好の潮時だった」¹⁰。

シェーラーは、フランクフルの中に精神を呼び覚ました。シェーラーの著作『価値倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』は、困難な時代のフランクフルを精神的に支え、この書物からフランクフルは、シェーラーの人格の教えを学んだ。哲学者シェーラーの人格論と価値論は、フランクフルに持続的な影響を与え、フランクフルの人間像にきわめて深く刻印した。フランクフル自ら語っているように、彼は、シェーラーによって「心理学的に蒙が開かれて開眼した」結果、自身の一元論、自然主義、社会学主義、心理学主義をついに克服することができた¹¹。

人間の本来的な存在に対する問い、特有の人間的な行為に対する問いを求めての格闘の時期において、シェーラーとの出会いは、哲学的な覚醒のときであった。その探索の途上において進むべき針路を、フランクフルはシェーラーの哲学的な著作の中に見出した。シェ

ーラーは、 فرانクルにとって最も重要な哲学の教師となった。フランクルは、著名な価値哲学者シェーラーの傍で、その中に精神的な次元が現存する、「精神の認識」を獲得した。シェーラーはフランクルを助けて、人生の肯定的な価値に方向づけられた、新しい視界をフランクルの目の前に切り開いた。シェーラーによって、フランクルは、人生において原則的に妥当する価値が存在していることを見抜く慧眼を獲得した¹²。

フランクルが数多くの重要なことを洞察できたのは、シェーラーのおかげであった。シェーラーの読物を通して、フランクルは、哲学的な人間学へと突き進んでいった。フランクルは、内面的にはアドラーからまだ完全には解放されていなかったが、シェーラーの哲学的人間学により、一步一步徐々に、彼の心理学主義から揺り起こされ目覚めさせられていった。彼はついに、精神的に目が覚めた。すなわち、完全な精神的な生命は、その本質と意味内容に従って心身の有機的組織の事実性 (Faktizität) に依存しないで独立し、行為と行為の法則 (Aktgesetze) を持っているということが、フランクルのなかで明確になった。シェーラーは、精神の情動的なもの (das Emotionale) に対して、彼を啓発する¹³。

フランクルが、シェーラーの助けを借りて洞察したことは、次のことであった。心 (Psyche) は精神 (Geist) ではない。たとえ心が完全に混乱しようとも精神は明晰なままである。心理に基づく治療としての心理療法が、人間の精神的な顕現 (Manifestationen) を、ただ単に心理の眺望の中でのみ見るか、もしくは心理的なものに還元することを目論むとき、その時、心理学主義の現象に対峙することとなる¹⁴。

ロゴスと実存に方向づけられた心理療法が可能であるならば、心理身体的なものに対する精神的なもの優越 (精神的な優位) が原則的に人間学の基盤でなければならないということを、フランクルはシェーラーを通して認識した。フランクルは、個人心理学の範囲内で心理学主義を克服したいと望んだが事態は異なった。彼は、ロゴセラピーと実存分析の起源を苦心して創出しなければならなかった。シェーラーの傍でフランクルは、彼の心の内に抱懐した直感に、言語上の形と哲学的な根拠を提供する多くの考えを見出した¹⁵。ツォックは、これに関して次のように述べている。「一人の人間の内に、自然的 - 感覚的な肉体と『精神的な要素』との間の存在論的な相違を想定することは、当時の、きわめて理知的かつ自然科学的に影響を受けていたウィーンの『精神分析的な雰囲気』の中においては、前代未聞の大胆さと革命的な変革を意味した。人間の中にある『精神的な要素』に対して、マックス・シェーラーは、人格 (Person) という概念を用いた。人格は、心理的なプロセスの総和や性格 (Charakter) と一致するものではなくて、自分自身を形成している精神は、価値の感覚 (Wertfühlen) と存在の知 (Wesenswissen) 『実体の直観 (Wesensschau)』が授けられているということを強調した」¹⁶。

(2) シェーラーの哲学的人間学の創造的受容

シェーラーを通して、フランクルは哲学的な人間学へと踏み込んでいった。フランクルは、シェーラーの教えを体系的には受け継がないが、彼の人間学的な価値人格思想に基づき、自身の心理療法の理論と人間学を発展させ、現実に対応する研究と実践を深めていっ

た。

フランクフルは、自身の実践と著述を通して、シェーラーの人格論と価値論を、実践的な心理療法の確立のために役立てようとした。フランクフルは、シェーラーの高度に抽象的な思考体系を、より現実に即した理論に転換しようとする。シェーラーと同様にフランクフルは、人間を、一回限りのかけがえのない人格として、精神を賦与されているがゆえに自己超越と自己距離化が可能な、価値と意味に関連づけられた存在として理解する。この視点から、人間の「自由」と「責任」を人間学の中心に置き、人間の良心と使命の特別な解釈を抱懐する人間学を構想する。具体的な状況における具体的な人格の、一回限りで唯一無二の可能性を解明することが問題となると、個人的な使命は倫理的な意味をもち、良心に帰属すると把握した。

「意味」は、シェーラーの「価値」と同様に、フランクフルにおいては、ある状況と人格に特有のものである。その一回性は、個人に特有の当為の要請が意味から出発するのとまったく同じように、個人に妥当する価値を出発点とする。そのような人格と状況に特有な使命とその充足を、フランクフルは、「意味 (Sinn)」と呼ぶ。フランクフルは、それ故に、「今、ここで」対応し、自らを方向づけることの必要性を指摘する¹⁷。

次第に、フランクフルの中に、次のテーゼが凝縮していった。人間は、反射の束や心理身体的な自動装置ではない、単に盲目的な衝動によって駆り立てられ、ただ単に劣等コンプレックスによって支配されているものではない。そうではなくて、人間において決定的であるものは、人間が心理身体的に体験し経験するすべてのことに対して態度を決めることができ、自分が価値によって引き寄せられていると感じ、意図的志向的に決断を下すことができる精神的な人格であるというのだ¹⁸。人間には身体と心を超えて、さらなる第3の精神的な次元が存在し、そこから湧き出る力が、恐怖や不安を克服し、欲情を断念し困難に耐え、自身の個人的な弱さを宥和的に受け入れることを可能にする根源的な力を奔出させようという考えが、フランクフルのなかで明確になっていった。

フランクフルは、人間を、身体的 - 心的 - 精神的な統一かつ全体と見なした。フランクフルは、彼の次元存在論 (Dimensionalontologie) において、人間を、「多様性をもつにもかかわらず統一的なもの」として定義する。この治療上の方向性の基盤は、精神性に基づく「人間の意味への意志」からスタートしている動機づけの理論である。意味と価値を目指す努力は、人間の貴重なモチーフであり、人間の主要な動機そのものである。それ故に、意味と価値の問題は、フランクフルの心理療法において中心的なテーマとなり、排除できなくなった。

それまでは、本能、コンプレックス、抑圧、自己顕示欲、投影だけしか範疇になかった心理療法に対して、根源的な「意味」と「価値」を汲み入れて感知する倫理的な視座が可視的になった。フランクフルの中に、しだいに、人間をあるべき本来のものにするのは「精神」であるという確信が強くなっていった¹⁹。フランクフルが心理学主義を離脱してニヒリズムを克服していくためには、彼の世界観・哲学の中に精神の次元を視野に入れ、よ

り包括的な次元の中で人間を見ていかざるをえなかった。心理学主義の限界を突破していく中で、 فرانクルはロゴセラピーの構想を展開していった²⁰。人間の中に、精神的な実存の自律性を発見し、心理療法に精神の次元を導入しようとするフランクルの企図は、心理療法に新しい地平を切り拓くとともに、最終的に、自身の一元論、自然主義、社会学主義、心理学主義を脱出していく突破口となっていた。

シェーラーからのインスピレーションを受けて、フランクルは、困窮の中にいる人間を、彼の精神的な格闘の中において援助することの重要性に目が開かれていった。それは、クライアントの責任の保持の意識化、精神的な基盤の意識化、精神的な無意識の意識化という、精神的なものからの療法としての新しい心理療法の開拓へと、フランクルを導いていくことになる²¹。

第二章 註

- 1 フランクフルは著書の中で、「心理学主義」について、次のように述べている。「心理学主義は、この価値を貶める傾向から、絶え間なく正体を暴こうとする。心理学主義は常に一生懸命になって、仮面の剥奪を企てる。心理学主義は繰り返し、非本来的な、神経症のか文化病理学的な動機づけを捜している。心理学主義は、精神分析的なコンプレックスの意味においてであれ、個人心理学的な劣等感の方法においてであれ、内容的領域から行為の領域の中へ逃避することによって、宗教的、芸術的な領域あるいは学問的な領域における妥当性に対してのすべての問題を回避している。それだから、心理学主義は結局、認識的な所与性と決断の課題の圧倒的な充溢から逃避し、それ故に、現存在の現実性と可能性からの逃避している。(Frankl,V.E.: *Ärztliche Seelsorge*, Wien 1946, , S.16. [V.E.フランクフル(霜山徳爾訳)『死と愛』みすず書房, 1957年, 26-27頁。])「心理学主義」は、フランクフルの見解においては、社会学主義や生物学主義と並んで、人間を縮小・還元し、断片的な人間像を樹立することを企てる還元主義の具体的な表出の様態の一つであると見なされる。そして、今日のニヒリズムは、還元主義の形態を伴って現れると、フランクフルは考察する。
- 2 Klingberg, H. Jr.: *When life calls out to us*, New York 2001, pp.46-48. [ハドン・クリングバーグ・ジュニア(赤坂桃子訳)(2006)『人生があなたを待っている I』みすず書房, 2006年, 81-83頁。]
- 3 Frankl,V.E.: *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen*, München 1995, S.40. [V.E.フランクフル(山田邦男訳)『フランクフル回想録』春秋社, 1998年, 74頁。]
- 4 Ebenda, S.42. [邦訳, 76頁。]
- 5 シェーラーが把握する「精神 (Geist)」と人格 (Person) の概念を、クライトマイアーは次のように説明している。「“精神”は、シェーラーにとって、行為の本質、志向性、そして意味の充足を所有しているすべてのものである。精神的なものと同格的なものの徴表を、シェーラーは、“世界開放性 (Weltoffenheit)”の中に、衝動に束縛されない自由 (Triebungebundenheit) の中に、自分自身 (自己意識) に対して態度決定を為すことができる能力の中に、意味を解明すること (Sinnerschließung) ができる能力の中に見ている。」(Kreitmeir, C.: *Sinnvolle Seelsorge*, München 1995, S.109.)
- 6 Scheler, M.: *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, Darmstadt 1928, S.57f. [マックス・シェーラー(亀井裕・山本達訳)『シェーラー著作集 13』白水社, 1977年, 58-59頁。]
- 7 Ebenda, S.65f. [邦訳, 68-69頁。]
- 8 Frankl,V.E.: *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen*, a.a.O., S.42. [邦訳, 76頁。]
- 9 Ebenda, S.42. [邦訳, 76頁。]
- 10 Ebenda, S.42. [邦訳, 76頁。]
- 11 Zsok,O.: *Der Arztphilosoph ,Viktor E. Frankl*, München 2005, S.56.
- 12 Ebenda, S.57f.
- 13 Ebenda, S. 76f.
- 14 Ebenda, S.84
- 15 Ebenda, S.58f.
- 16 Ebenda, S.60 f.
- 17 Riemeyer, J.: *Die Logotherapie Viktor Frankls und ihre Weiterentwicklungen*, Bern 2007, S.73.
- 18 Zsok,O.: *Der Arztphilosoph ,Viktor E. Frankl*, a.a.O., S.58.
- 19 Ebenda, S.58.
- 20 Klingberg, H. Jr.,a.a.O., pp. 47-48. [邦訳, 83-84頁。]
- 21 Vgl., Kreitmeir, C., a.a.O., S.119.

第三章 青少年相談所の設立とその活動

1927年、フランクフルはアドラーの個人的な希望によって個人心理学協会から除名されるが、そのことは、個人心理学を内側から改革していこうとしていたフランクフルの期待の消失と、個人心理学的な理論と実践の議論の場の喪失を意味していた。フランクフル自らが編集していた個人心理学雑誌『日常における人間 (Der Mensch im Alltag)』も発行を中止された。しかし、フランクフルは、自身の考えのより広範囲な公表の場を求めて出版活動を行うとともに、精神医学的・心理療法的な実践活動に邁進していった。その中で特に着目されるのが、当時、フランクフルが、困窮の中にいたウィーンの青少年に対して深い憂慮を抱き、幾多の出版物の中で若者のための無料の相談所の必要性を訴え、ついには自らがイニシアチブをとって青少年相談所を創設したことである。その青少年相談所において、フランクフルは苦悩する青少年に対して相談助言活動を実践し、多くの経験を積み重ねていった¹。

本章では、フランクフルが設立した青少年相談所の創設の経緯とそこでの活動を、フランクフルの戦前のテキストに依拠することによって明らかにしていく。

考察の手順は以下の通りである。第1節においては、フランクフルが設立した青少年相談所の構想を明らかにしていく手掛かりとして、モデルにしたドイツのザウアーの青少年相談所の構想と活動の内容を、ザウアーの著作に依拠して明らかにしていく。第2節においては、フランクフルの青少年相談所の創設の経緯を、当時のウィーンの青少年の困窮の実態と関連づけながら明らかにしていく。第3節においては、フランクフルの青少年相談所の実践の活動の内容を、来談者、方法、具体的な実践、成果といった面から探究していく。

フランクフルの青少年相談所での活動の探究は、ここでの経験が後のロゴセラピー創出のアイデアに、どのように繋がっていったのかを解明していく手掛かりになると考えられる。

I モデルとしてのザウアーの青少年相談所

(1) ザウアーがとらえたドイツの青少年の困窮

若きフランクフルは、戦前、ウィーンを中心に青少年相談所を組織し、そこで、心的な困窮の中にいる青少年を無料で支援するが、そのモデルとなったのが、「ザウアーの青少年相談所」であった。ベルリンのドレーズデン銀行の文書保管係であったザウアーは、彼の書物の中で、1910年代から20年代のドイツの心的苦境の中にいる青少年の切迫した状況を提示し、途方にくれている青少年たちの状況打破のための手段、必要とされている助言と援助が存在していないことを訴えた。

ザウアーは、青少年の困窮の中でも統計的資料をもとに、特に、自殺の増加、犯罪の激増、そして犯罪予備軍として待ちかまえている、劣悪な環境下に置かれている青少年の群れを指摘した。

当時の自殺の状況を、ザウアーは統計から分析した。1915年から21年の7年間で、プロイセンでは、15歳未満の488人の少年少女が自殺した。プロイセンの統計では、15-20歳の年齢層で、1920年に828人、1921年に727人の自殺者があり、両方の年で、163人の子供

たちの自殺を含めると合計で 1718 人の若者が自殺した。その頃、毎週、ベルリンで平均して 8 人、ブランデンブルクで 10 人、合わせて一週間に 18 人の未成年者たちが、自発的に死に向かっていた²。

また、犯罪についての若者たちの関与の問題は、青少年の心的な困窮を照らし出していた。少年裁判所で責任が問われる不法行為で、最も多いのは窃盗（最初に挙げられるのが金属の窃盗）であり、次いで着服（銀行の見習、店の雇人等）、そして性的な法律違反（売春等）の蔓延であった。ベルリンの教護教育（Fürsorgeerziehung）を受けている青少年に関する 1918 年の統計では、18 歳までの男性 869 人と女性 429 人の計 1298 人の若者が、窃盗、詐欺、横領、文書偽造のために教護院に引き渡されていた。そこには、両親の放任、欠陥のある不十分な教育、虐待、母親からの悪い影響等、子供たちの教育を不可能にするあらゆる種類の不幸が存在していた。プロイセンにおいては、1910 年から 20 年に教護院に引き渡された生徒 118,585 人に対して、就学義務前の子供が約 5% の 5,797 人であり、就学義務のある生徒が約半分の 51,769 人であった。生徒のその他の半分は、まだ未成年であった³。

さらにザウアーは、悪条件下にあって苦境の中にいる青少年を、具体的な状況を挙げて憂慮している。1918 年の見積もりに基づくと、ドイツにおいて、10 万人の保護教育を受けている青少年または強制的な寄宿生、少年裁判所によって捕えられた 5 万人の子供たち、100 万人の非嫡出の子供たち、そして 25 万人の公的な生活保護を受けている子供たちと、保険協会から年金を受け取っている 15 万人の子供たちが判明した。そしてさらに、これに加えて、年金を受け取る多くの戦争孤児、職業上の未成年者労働保護に該当する子供たちが生じていた⁴。

1923 年 5 月 28 日の報告によると、ドイツの警察本部の行方不明者センターにおいて、毎日、平均して 15 人の青少年の家出人が届け出られて、その中に未だ 10 歳の年齢を迎えていない子供たちが存在していた。未だ成長していない少女たちの数もきわだって大きく、彼女たちは通常、身体と心が壊されすべての所有物が強奪されて、慰めようのない絶望的な状態で再び連れ戻された。また、ある雇用者は青少年の給料を成人たちに合わせ、若者たちに、ダンスホール、カフェ等を訪れることを許したが、それはあまりにも悪い結果をもたらした。他方において、仕事を求めて職業安定所を訪れる年若い失業者たちの増大する一群が顧慮されるべきであった。さらにまた、搾取者によって支払われるあまりにも低い賃金を求めて働く多くの人々、修行を終えた従業員に対して賃金を節約するための、多くの企業における徒弟の経営が熟慮されなければならなかった。青少年の大都会の悲惨で陰鬱な像は、刑務所に向かつての温床であり、懲役場に向かうのに十分であった⁵。

ザウアーは、彼の書物の中で次のように訴えている。「私たちは、若者たちが裁判所に出廷する前に、法廷の前に現れるのをできるだけ防ぐために進んで援助しようという気持ちで、ただ若者たちへのこの愛を実現に移したいと望むだけである」⁶。

(2) ザウアーによる「青少年相談所」設立の構想とその実現

ザウアーは、極度の困窮の中に置かれている当時のドイツの青少年の状況に憂慮し、青

少年が絶望して自殺に向かっていくのを防ぐために、進んで援助しようと考えた。青少年を絶望に引き渡さないためには、また死に引き渡さないためには、何かなされうるのかという問いを前にして、ザウアーは、若者たちが裁判所に出廷する前に、若者たちを進んで援助しようと考えた。ザウアーは、青少年の男女の生徒、徒弟、労働者と勤め人に対して、必要なときに強制されることなく、彼等の自由意志に基づいて助言や援助を求めることが可能な、青少年相談所の開設の構想を抱いた。そして既に世界大戦前に、その考えを実行に移すことを要求し、それ以来、絶え間なく主張して闘ってきた。あらゆる誘惑にさらされている若者たちに対して開かれている青少年相談所の形態を明らかにし、青少年相談所は何を成し遂げることができるのかを明確に示した。

ザウアーの青少年相談所の輪郭⁷

- ・未成年の若者が学び働いている所で、すべての教室、事務室、工場の部屋と作業室の中に、成熟しかつ信頼できる、世間で活動している男女のリストが、ポスターで掲示される。
- ・掲示されたリストから、男性助言者と母親のような女性助言者を、自ら好きなように随意に選択でき、住まいの近くで助言を受けることができる。
- ・あらゆる心的困窮のケースにおいて、21歳までのすべての青少年は名前を挙げることなく訪ねることができる。
- ・冷淡な対応は何ひとつとらない、人間的に成熟した相談助言者が、決まった時間に、訪ねて来た経験の未熟な若い人に対して進んで喜んで相談する心づもりがある。そして、相談者の気持ちを理解しながら、助言と行為によって親切に援助する。
- ・相談助言者は名誉職として無料で奉仕し、秘密を守って男女の若者のために活動する。
- ・書類の束はない、記録は為されない、無愛想な態度はない。

「それは、自由な国民の自由な機関である。選び抜かれた適切な人たちが、最も広い規模においてそれに協力するだろう。それは、新式の、ひょっとしたら理想的な教育方法を描出している」⁸と、ザウアーは青少年相談所の可能性の大きさを明言している。

ザウアーの青少年相談の原則の本質は、徹頭徹尾、その私的な性格に存し、その理由から、青少年相談は相談助言者の私宅において行われた。その方法は、青少年の信頼を保証すべきものであった。ザウアーは、これまでの少年保護事業の功績を認知し評価もしているが、それは青少年を魅了する力に欠けていて、あまりにも遅い時期に始まりあまりにも小さなサークルの中での活動であるとして、その限界を指摘する。新しい機関としての青少年相談所は、現存の福祉保護組織と対立するものではなくて、最初の裁判の前や処罰の後に援助する代わりに、不幸が起こる前に予防するシステム、臨時的援助者であるべきである。党员名簿も信条も前科も父親の地位身分も母親の年齢も、彼らの出生地をも尋ねない、困窮の中における忠実な朋友であると、ザウアーは主張している⁹。

1914年4月26日、ザウアーは、初めて『ベルリン地方新聞』の中で、青少年相談所の必要性について明白な考えを公表した。「働きかつ学んでいるすべての未成年の若者のための、

自宅で内密に活動する無料の青少年相談所が、すべての心的な葛藤の中にいる若者に対して開放されている。そしてその青少年相談所の中で、若者は、男性か女性の助言者を選択することによって、絶望、犯罪行為、それどころか自殺からさえも、時宜を得てちょうどよい時に保護されるべきである」¹⁰。その考えは次第に、新聞雑誌や大衆に、そして官庁のもとに受容され実践されていった¹¹。

Ⅱ フランクルによる青少年相談所の創設

(1) ウィーンにおける青少年の状況

フランクルもまた青少年相談所の開設を心に抱くが、ザウアーの実践をモデルにしてウィーンの青少年相談所を構想したことを、青少年相談所の方法と内容についてふれる度に述べている¹²。当時のベルリンとウィーンでは、その政治的な状況、文化的背景、宗教的な素地等大きく異なっていたと考えられるが、フランクルは、当時のウィーンの青少年の心的苦境を、ドイツの青少年の困窮と同質のものにとらえ、同じ方法で解決の糸口をつかむことができると考えたと推察できる。第一次世界大戦後では多くのウィーンの青少年は、経済的ならびに精神的な価値が放棄されて崩壊しているだけではなく、人間生活もまた汚染され危険に晒され壊滅していた。青少年は、世界大戦とその後の経過により肉体的に打撃を受けて、日常の課題と再編成された環境との精神的な対決の問題、ならびに彼らの心的な態度への問いと格闘していた。フランクルの捉えていた当時の青少年の状況への対応は、急を要していた。心的な苦境と困窮の中に陥っている青少年は、どこでだれに頼るべきかを知らなかった。青少年を圧迫する人生の問題と葛藤を乗り越えるために、成熟した判断力を持った面倒見の良い人と語り合う機会が、彼らに提供されることはほとんどなかった。青少年が彼らの両親に対して胸襟を披いて心の中を打ち明けるケースはまれであり、両親との話し合いを厭い心を閉ざしていた。青少年と教師の間も、心中を打ち明けて助言を求めるような関係には至らなかった。知識のない未成熟な、疑わしい友達を頼りにするしかなく、自身の憂慮を一人では克服できず立ちつくしていた¹³。特に思春期にある若人たちは、大人にとってはとるに足りないように思われる些細な問題や困難を、うまく片づけて克服するということができないでいた。彼らはしばしば、何かある小さな誤解から絶望するか、あるいは勇気を喪失し、もっぱらただ途方に暮れていた。青少年はしばしば自分たちの内面生活や心の悩みの吐露に対してひじょうに慎重になって恐れているにもかかわらず、両親や教師、家庭医等々は信頼を得てはおらず、彼等は、青少年の不安や臆病を克服させることができないでいた¹⁴。困窮の中で苦悩する青少年は沈黙し、時とともに彼の悲しみが自ら消え失せるまで待つか、信頼に値しない友人に自分の本心を打ち明けるという事態へと至った。その結果、自らの憂慮と思案を十分に消化することのできない状態が継続し、身体的な損傷へと至る可能性があった。あるいはまた、青年が秘密の重荷にもはや対処できないと自覚して、そのために崩れ落ち、挫折して絶望したときに自殺未遂を行うという破滅へと至っていた¹⁵。

当時の日刊新聞の統計では、青少年の自殺の数は、驚くほど増加していた。ウィーンにお

いては、1926年の最初の4半期中には、若い人の自殺を無視できず、青少年の自殺に関心を払わなければならないときがきていた¹⁶。自殺未遂、人生の倦怠、両親との仲違い等、様々な心的な葛藤があった。青少年の自殺は、当時の社会が克服していない問題として厳として存在していたが、解決の試みは不十分であった。多くの青少年が、自らの秘密の重荷にもはや対処できないと自覚して絶望し、自殺未遂を行うという破滅へと至っていた¹⁷。

青少年の自殺が積み重なる中で、それを予防できる可能性を見出すために、フランクフルは、青少年相談所設立の計画の実現を切望した。信頼し合う中で心を打ち明けて語り合う人を知っていたら、自殺は防止できるとフランクフルは考えた。1927年に発行された個人心理学雑誌『日常における人間』第3号の中においても、フランクフルは青少年の自殺の実例を多数紹介した後で、「もし彼らが、十分な信頼の中で心の中を打ち明けてじっくり語り合うことができる人を知っていたなら、彼らの企ては防止されただろう」と述べて、青年たちが心的な苦境において頼みにすることのできる青少年相談所の創設の必要性を訴えている¹⁸。フランクフルは同じ雑誌の第5・6号の中で、劣等感の帰結としての自殺、誤った方向に導かれた自己顕示欲の働きの結果としての自殺、勇気のない人生観から企てた自殺未遂、そして孤立の状態での破滅していった不幸な悲劇的な自殺の例を列挙し、たとえ困難であるとしても、もし彼等と同じような状況の中にいるたった一人の青年だけでも援助することができたなら、それは青少年相談の必要性の無条件的な根拠であると主張している¹⁹。

(2) 青少年相談所創設の経緯

フランクフルが構想した青少年相談所の目的は、思春期の苦境を乗り越えるのを助け自殺未遂を防ぐために、すべての青年に対して、あらゆる心的な苦境において、思慮分別のある相談助言者との話し合いの可能性を提供することであった。

ウィーンには当時、教育上困難なケースにおいて、助言で両親を援助し、子供たちを心的な成長において保護する労働者会議所の教育相談所（Erziehungsberatungsstelle）が既に存在していた。教育相談所においては、青少年が心的な困窮の中で、両親の同伴なしで自発的に、助言を求め解決策を見出すために訪れて来ていた。若者は、信頼に値する人たちに助けを求めて相談に来ていた。教育相談所における実践的な経験では、困窮が最も大きいときには、内気な臆病や不信等が抵抗とならないために、なじみのない人の助けが歓迎されることを証明していた。ただ、教育相談所での活動は、小さな一部の活動に制約されているとともに、原則的には、両親が子どもを連れて来ることが可能である場合に限定されていた。青年が両親とともに教育相談所を訪れることをためらって避ける年齢に達したときに、青年は思春期の極度の危機的な時期の真只中にいた。これらのことから、青少年が内密に心中を打ち明けて語り合うことのできる固有の相談所を創設するという考えは、自然な帰結であった²⁰。何よりもまず、社会民主主義的青少年運動にとって青少年相談は重要であり、プロレタリアの青少年組織において青少年相談所の組織化を緊急に進めたいと、教育相談所の協力者でもあったフランクフルは考えた。青少年相談所の創設の構想が、討論の対象にされなければならなかった²¹。

アドラー派のサークルの友人や仲間たちのなかで、フランクルの提案に興味関心を抱いた人たちが青少年相談所の考えに協力し、構想の実現に向けて取り組み始めた。フランクルも医学研究のかたわら、組織化された青少年相談所の構想の考えに対して全身全霊をあげて打ち込んだ。フランクルは、数年前にベルリンで創設されてから既に確かな地歩を占め、広く活動していたザウアーの私的な青少年相談所の考えとその方法に着目した²²。フランクルはまず、ザウアーのモデルに基づいて、私的な相談所の創設を宣伝した。緊急処置として、1927年から1928年の間、フランクルの編集する個人心理学雑誌『日常における人間』において、心的な苦境の状態にある青少年の相談に関する欄を設け、青少年の相談に応じた²³。編集局の定まった面会時間に無料の相談の場を設けるとともに、文書による相談に応じ、手紙によって答えるか、匿名の相談には雑誌のこの欄において応えた²⁴。さらにフランクルは、青少年相談所の創設を呼び掛ける論説を發表し、青少年相談所を基礎づけるための最初の第一歩を踏み出すことに、雑誌『日常における人間』の編集局内において成功した²⁵。それは、青少年相談のためのオーストリアの事務所の創設を勢いづけた。その事務所は共通の組織として、ドイツの事務所と同盟を結んでいた²⁶。ウィーンにおいて、青少年相談のための国際的な委員会が、重要な統一的組織の前段階として設置された²⁷。このプロジェクトに、協力者として、医師、教育者、社会福祉士といった人たちが賛同し相談助言者として加わった²⁸。1928年の2月初め、「青少年相談のためのオーストリア事務所」の創設が、新聞「その日 (der Tag)」の中で通告された。ただちに最初のウィーンにおける青少年相談所の創設が企てられた。ポスターが掲示され学校と青少年団体に配布された²⁹。ポスターの呼びかけは、次のような文面であった。「若者たちよ！ どんな心の悩みであっても、深く信頼して青少年相談所に頼りなさい！ 遅すぎることは決してない！ 無料である！ 名前を名のる必要はない！ 秘密は厳守される！」³⁰

Ⅲ フランクルの青少年相談所での実践

(1) 青少年相談所の来談者

新郎新婦、妊娠中の女性、性病に罹っている人、結核に冒された人、大酒飲み、徒弟、どんな職業に就くべきかを知らない人、法律上の助言を必要としている人等、すべての人々を対象として、無料で情報が手に入る青少年相談所が存在していることが宣伝された。教育を受けることが困難な子供と、うまくやっつけられない両親も、助言を求めることができた³¹。

ウィーンの相談所の開設の最初の数週間に、個々の相談助言者に際して10人から20人くらいまでの助言を求める人たちが訪ねて来た³²。彼らのうち、約10パーセントが自殺の企図を心に抱くか自殺を既に試みていた。それに関する最大多数は、エロティックかつ性的な問題と葛藤であった³³。最初の数週間に相談所を訪れた約140人の助言を求める人のうち、心的苦悩としての神経症的症候が存在したのは、その中の15パーセントだけであった。そのことは、「心的な苦境」と「神経症」を同一概念で括ることは間違っており、思春

期の心的な苦境は生理学的なものを意味しており決して病理学的なものではないことを意味していた。他方、性的な問題とエロティックな課題が、相談のテーマの32パーセントを占めていた。職業の問題、家庭の不和等の多くのケースについては、神経症とは何の関わりもなかった³⁴。相談所の設立以来の数ヶ月のうちに、300人以上の青年たちが、心的な苦境において助言を見出すために、ここを訪れていた³⁵。

フランクフルは、青少年相談所に助言を求めて来た人たちが、どのような要件を抱えてやって来たのか、その具体的な例をいくつか紹介している。例えば、少年のときに犯した罪があり、就職するときに前科の履歴のある品行証明書を提出しなければならないために、墮落せずに品性を保って生きたいと願っていても職に就くことができない青年の例、娼婦と呼ばれて嘲られ罵られ、内面的な拠り所を失っている、非嫡出の子供をもつ未婚の母の例、妊娠しているが彼氏に見捨てられ、大人たちに弄ばれてしまっている悲惨な孤児の娘の例、聴力を失って苦悩しているピアニストの例などである³⁶。

1928年2月初めの青少年相談所の創設以来、最初の1年間でおおよそ700人の助言を求め人たちが訪れていて、青少年相談所は延べ約3000人の訪問者に応えている。助言を求め人たちは、しばしば再びやって来た。3分の1がエロティックかつ性的な問題であり、さらに3分の1が家庭内の摩擦や職業的な紛糾であり、その他の若者たちは、神経症的な障害または純粋に医学的な事柄（皮膚病学的な美容上の問題提起、妊娠と性病、それに対する恐怖症と根拠のない不安、軽い脅迫神経症、劣等感等）であった³⁷。フランクフルはまた、別の1929年10月の論稿において、1928年2月のウィーンの青少年相談所の創設以来、1500人以上の助言を求め人たちが相談助言者を訪ね、この訪問者数は延べ約5000回の訪問数に相応していることを記述している³⁸。また、1930年のウィーンの統計として、助言を求めて来た人たちは、男性が女性の2倍であり、労働者とサラリーマンが学生の3倍であり、年齢はたいてい16歳から24歳の間であったこと、そして訪問者の20%に人生の倦怠と自殺の考えが存していたことを記している³⁹。

(2) フランクフルの青少年相談の方法

フランクフルは、ザウアーの考えをモデルにして青少年相談所の創設を図った。困窮の中にいる青少年が本心を打ち明けることができ、自らを救い出して自身の心を解放することのできる話し合いへと導くことにより、あらゆる心的な苦悩の中にいる、すべての青少年たちを援助することを使命とする青少年相談所の開設を、フランクフルは企図した。フランクフルの考えでは、相談は、助言を求め人の人格の尊厳を保持する、人格と人格との間の純粋に人間的な関係に基づかなければならず、相談に訪れる人が相談助言者の客体となつてはならなかった。それ故に、青少年相談は、形式において「私的な」相談であるべきであった⁴⁰。フランクフルの構想に基づいた、青少年相談の本質的方法は以下の通りである。

フランクフルの青少年相談所の輪郭⁴¹

- ・面会時間と住所が記載された男女の相談助言者のリストは、一部は新聞と雑誌の中で公表され、一部は通りのポスターで掲示され、その他、学校と青年団体において配布

される。ポスターは、短い呼びかけを含む。事務所の住所と電話番号も含み、文書か電話で情報が与えられる。

- ・多数の若者に、特に大都会にいるすべての若者に、あらゆる心的な困窮の中において、熟練した信頼に値する人に頼ることのできる可能性を与える。
- ・相談助言者は、専門医（神経科医、精神科医、さらに婦人科医と皮膚性病学者）、法律家、心理学者、教育者、社会福祉士、聖職者等々である。
- ・相談助言者は名誉職であり無給で奉仕するために、相談は無料である。
- ・相談は、原則的に相談助言者の私宅において、確定した週の時間に催される。
- ・助言を求める者が名を名乗ることは要求されない。
- ・最も厳格な秘密の保持が確約される。
- ・全体としての処置も、個々の相談助言者の態度も、厳格に非政治的なものである。

上記のような青少年相談所の原則的方法からも、フランクが、ザウアーの考えを踏襲していたことが見てとれる⁴²。若者の信頼が獲得されるように、本心を打ち明けることに対しての抑制が除去され、話し合いの意欲を妨げるすべての抑圧に対しての抵抗が、できる限り緩和されるように配慮しているのも、ザウアーの考えと同じであった。

フランクは、青少年相談所を企図するとき、あくまでザウアーのそれをモデルにして構想していったので、青少年相談所の実践の方法においてフランクとザウアーの間に本質的な相違はないように伺える。ただフランクにおいては、新聞、雑誌、パンフレット、ポスターといったあらゆるメディア、ジャーナリズムを活用して、青少年相談所を若者たちに宣伝していったことが特筆される⁴³。フランクは、公的な社会福祉機関と一緒に活発な共同作業は、特別に重要であると考えた。当該官庁は、“私的な青少年相談”のような私的な公共機関は無条件的に必要であるという認識に対して、目をそむけることはできなかった⁴⁴。そして、公的な社会福祉の側から、あらゆる点において青少年相談所の活動に対して助成が与えられていたことも記述している⁴⁵。また、純粋に医学的な問題のケースにおいては、結果として治療する医師との共同作業が生じることもあったと記している⁴⁶。

(3) 青少年相談の具体的実践

フランクは、青少年相談所に訪れた助言を求める者の数は、1935年の時点で約 5,000人に達し、その内、およそ 900 のケースについての資料を手中にしていると述べている⁴⁷。しかし、青少年相談所での具体的な実践例を記述として残してはいない。当時の青少年の、悲惨な状況下において苦悩に打ちひしがれている事例については、いくつかの記録が見られるが、青少年相談所に相談に訪れた個々のケースについて、どのようにして苦悩する若者に精神的な支えを与え、「使命を持っているという確信、そして、責任を担うという自覚」へと導き援助していったのかについての具体的な論述はほとんど見当たらない。わずかに、両親の傍で暮らしている少女が、青少年相談のおかげで婦女売春業者の犠牲にならなかった例、青年の中に「詩人の才」を見出して奨励し試させた結果、それによって著名な雑誌の中で作品が公表された内気なはにかみ屋の若者の例、心的な苦境において何年もの間ず

っと青少年相談のような場所を求めて新聞を徹底的に探し続けてきた若い警官の例⁴⁸、両親によって不当に自由を制限されていた17歳の少女の例⁴⁹、あるいはまた「冷感症」であることを恐れ、予期不安のメカニズムの中で悪循環に陥っている典型的な少女の例などを、ごく控えめに簡略に報告している程度である⁵⁰。

しかしながら、助言を求める者が、青少年相談所を最も頻繁に訪ねた要件である「性的な問題」の領域についての فرانクルの論考を考察するとき、フランクルが、苦悩の中にいる青少年に対して、精神科医として専門的に、しかも現実を見据えて、いかに真に若者の立場に立って誠実に向き合っていたのかを推察することができる。

フランクルは、期待外れの不満足な性的衝動が人間を苦しめているという見解は根本的に間違っていると考えた。フランクルによれば、青春期は、職業、生きるための闘い、そして愛の使命の解決に対しての準備期間である。人生の課題の実現は、人生のパートナーの正しい選択をする能力を持つ人間性についての知識、また、友情ある親密な関係の共同体を築くことを助ける、心から誠実であることへの能力の特質を前提としている。両方の特質、人間性についての知識と心からの誠実は、成熟したときに行使されることができると、青春期において学ばなければならないとフランクルは主張した⁵¹。

そしてフランクルは、性的志向に関する思春期に達するプロセスは、本能の増加していく有機体が人格へ同化融合していく過程を表していると考えた。最終的に、「衝動 (urge)」「インパルス (impulse)」「欲求 (desire)」という成長の3つの理想的な段階の最後に、異性のパートナーとの精神的な同志的交わりを求めるエロティックかつ性的な傾向の融合が現れ、この時点で、エロティックな目的と性的な目的は一致するべきであると述べる。発達はこの理論にしたがって、理想的に成熟した人格は、性的に願望することができ、そこに、心理-知的な交わりがあるなら、性的経験は完全でかつ申し分のないものであると、性的志向に関するモデルとしての発達理論を展開している。そして、一夫一婦制の関係と、エロティックかつ性的な欲求の統合は、正常な性的成長の目的を表し、同時に、性教育の究極の目標を表していると、フランクルは結論づける⁵²。そして、若い人々は、そのような結合の責任を恐れて臆病に逃げ去ることを望むのではなく、パートナーに対しての誠実さを持続し、十分に満足する関係が確立されるまで困難と苦闘に立ち向かわなければならないというのだ。したがって人生が青年に要求していることは、フランクルによれば、「成功か失敗であるかもしれない恋に落ちることを学ぶこと」「パートナーのために闘うこと」「自分自身を再び解放すること」「孤独に耐え抜くことができること」である⁵³。フランクルによれば、心的な態度が第一次的なものであり、性的な苦悩はコンプレックスの、より深い理由の部分的な現象である⁵⁴。これに関してフランクルはまた、次のように述べている。「青年に、他の性に対して内気で臆病であることの習慣をやめさせることと、強いられない自然らしきにとって代わらせることが、ここでは何よりもまず肝要である。(中略)他の人間に対する性的な関係は、それが愛の感情によって支えられているとき、それ故に、人間的な結びつきにつなぎ留められているときにだけ、ただ考慮に値する」⁵⁵。

若者たちのための相談機関においては、しばしば議論されているテーマ、「マスターベーション」の問題があった。その問題に関して فرانクルは、それは性的衝動と“目的を阻まれた努力”の間に存在する代償的な関係であり、人格を志向する努力がルサンチマン、諦念あるいは不全感によって抑制され、目的のない性的な衝動が現れ出て来るときに初めて、青少年はマスターベーションを必要とすると考えた⁵⁶。フランクルは、「マスターベーション、売春、性的な禁欲」といった性的な悩みで苦しんでいる青年たちに対しての、その解決策を次のように語っている。「私たちは、彼らを、イデオロギー的に最適な男女のメンバーのいる青年団体に入るように強く勧める。知的かつ陽気な活動が満足を与え、そして、性の問題をいつまでもくよくよと気に病むことから逸れさせてくれるのはもちろんのこと、彼または彼女の関心は、まもなく、この若き男性か女性に特別にふさわしいと思われる異性へと向かっていく。このようにして彼あるいは彼女は、愛の中に存在しているという状態に入っていく」⁵⁷と提言し、青年がこのような状態に陥った瞬間に、これまでに観察することのできたすべてのケースにおいて、性的な悩みは自動的に消失したと述べている。フランクルは、性的な願望は最愛の人格に向かつてのみ向けられるべきであるということを特に強調する。「性的な禁欲の問題」に関して、フランクルは、身体的な医学の観点からと心理的な衛生学の観点から自らの見解を述べた後、その問題は、青年が自らの決断においてその責任を引き受けなければならない領域であることを主張し、次のように述べている。「思春期にある若者のマスターベーションに対しての私たちの態度表明が、些細なこととして軽くあしらうのに対して、青少年の性的苦境からの逃げ道としての売春に対しての私たちの拒絶は、厳格である。なぜなら、マスターベーションはなるほど不必要であるが、無害であるのだから。けれども、売春への逃避は、ただ単に快樂の獲得の手段として、性的な態度をとるように青年を調教するのだから、肉体的な観点においてだけではなく、心理的 - 衛生学的な観点においても危険である。彼は、心的 - 精神的な結びつきの表現として、性の特質の把握へと教育されなければならないだろう」⁵⁸。青年は、あてどない性的衝動に屈服し譲歩することなく、真剣にかつ責任を自覚して自らの性的生活の問題と対決しなければならないというのだ。すなわち、それは最終的には相談の枠組の限界を越えた「決断」の問題であり、身体 - 医学的な観点からも心理学的な観点からも答えが賦与されることのできない領域の問題であり、この最終的な決断は、完全に宗教的、倫理的、社会的な領域での決断に留まったままであると主張して、次のように語る。「相談助言者はだれも、当該の人から責任を取り上げる権利を持ってはいない。それどころか、彼に対して、彼の行為に対する責任を彼自身で引き受けさせることは、私たちの義務である」⁵⁹。すなわち、助言を求めてくる青少年に対して責任を転嫁させることなく、彼等を責任性へと教育することが肝要であり、それこそが青少年相談の任務であると、フランクルは考えたのだ。

相談所を訪れた青年に対しての、この問題に関する相談助言の成果について、自ら次のように評価している。「幸運にも私たちは、より正確な情報を与えるか心理療法的な治療に

よって、初期の性的神経症を取り除くことに、あるいはまた既に確立している形態を解消することにしばしば成功している」⁶⁰。

(4) 青少年相談所の成果

ウィーンの青少年相談所の大きな成果は、まず第一に、自殺の予防である。青少年相談所を訪れて助言を求めた青少年の大部分が、自殺の考えを心に抱くか、あるいはまた自殺未遂を既に企てていた。このことを考慮するとき、ウィーンにおける青少年相談は、広い範囲において若者の自殺の企図を予防することができたと、フランクルは考えている⁶¹。1930年、ウィーンの青少年相談は、成績発表の時期に合わせ、成績証明書の配布の日の前後に特別なキャンペーンを実施した。その企画によって、劣悪に評価された成績証明書のために、思い切って家に帰っていく勇気を失っていたウィーンのすべての学童生徒たちは、助言を求めることができた。そして、多くのケースにおいて、教育的によく訓練された自発的な協力者の付き添いのもとで、両親のところへ連れて帰られた。このキャンペーンを開始した初年度、生徒の自殺未遂の発生は著しく減少し、1931年には、ウィーンで初めて生徒の自殺者が1人も生じなかったことが記録された⁶²。

次の大きな成果は、心の健康に関して、性的な心気症のケースの際に話し合いによって直接的に治療した働きと、神経症のケースの際に予防に関して大きな意味を持ったことである。神経症は、困窮の中にいる若者が相談に来るとき、青少年相談の活動によって効果的に予防された。青少年相談の価値を豊かにしたものは、この心理衛生的な要因であるとフランクルは見ている⁶³。

さらに、青少年相談所がそこで展開し活動したことによって実現していくことのできた機能として、家庭的な紛糾の中での仲裁する機能と、有機的医療的治療の一面性に対しての補完的な機能を挙げている⁶⁴。

第三章 註

- ¹ フランクル一人で個人的な世話をした相談件数は、900 を越えていた。(Vgl. Alexander Batthyány: »Immer schon war die Person am Werk«, Viktor E. Frankls Weg zu Logotherapie und Existenzanalyse, (Otmar Wiesmeyr, Alexander Batthyány (Hrsg.) Sinn und Person, Weinheim und Basel 2006, S.17). [A. バッチャニー「ヴィクトル・E・フランクル博士の生涯とロゴセラピーおよび実存分析の発展」: V.E.フランクル(広岡義之訳)『虚無感について』青土社, 2015年, 20頁。]
- ² Sauer,H.: Jugendberatungsstellen ; Idee und Praxis 1914-1923, Leipzig 1923, S.12-13.
- ³ Ebenda. S.18, S.22.
- ⁴ Ebenda. S.22.
- ⁵ Ebenda. S.22-25.
- ⁶ Ebenda. S.29.
- ⁷ Ebenda. S.31f.
- ⁸ Ebenda. S.35.
- ⁹ Ebenda. S. 35.
- ¹⁰ Ebenda. S.36f.
- ¹¹ Ebenda. S.35-37.
- ¹² Frankl,V.E.: Jugendberatung! , In: Der Tag, 18, Februar, 1928.
Frankl,V.E.: Die Wiener Jugendberatungsstellen, In: Lehrlingsschutz, Jugnd-und Berufsfürsorge, 5.Jg., Heft 10, 1928, S.21.
- ¹³ Frankl,V.E.: Schaft Jugendberatungsstellen, In: Die Mutter, 2.Jg., Nr.39, 1926, S.8.
- ¹⁴ Frankl,V.E.: Jugendberatung! , In: Der Tag, 18. Februar, 1928.
- ¹⁵ Frankl,V.E.: Jugend in Not; Die Wiener Jugendberatungsstellen, In: Arbeiter-Zeitung, 22.07. Nr.202, 1928, S.10.
- ¹⁶ Frankl,V.E.: Schaft Jugendberatungsstellen, a.a.O., S.8.
- ¹⁷ Frankl,V.E.: Was ist Jugendberatung? , In: Der Mensch im Alltag, 1.Jg., Nr.3, 1927, S.4.
- ¹⁸ Frankl,V.E.: Ebenda, S. 5.
- ¹⁹ Frankl,V.E.: Jugendberatung, In: Der Mensch im Alltag, 1.Jg. Heft 5/6, 1927, S.4f.
- ²⁰ Frankl,V.E.: Was ist Jugendberatung ? , a.a.O., S.5.
- ²¹ Frankl,V.E.: Gründet Jugendberatungsstellen, In: Die Praxis,Mitteilungen für die Organisationsarbeit der Sozialistischen Arbeiterjugend Deutschösterreichs, Nr.4, 1927, S.31f.
- ²² Frankl,V.E.: Jugendberatung! , In: Der Tag, 18. Februar, 1928.
- ²³ Frankl,V.E.: Jugendberatung, In: Der Mensch im Alltag, 1.Jg. Heft 5/6, 1927, S.5.
Frankl,V.E.: Jugendberatung, In: Der Mensch im Alltag, 1.Jg. Nr.2, 1927, S.5.
- ²⁴ Frankl,V.E.: Jugendberatung, In: Der Mensch im Alltag, 1.Jg. Heft 5/6, 1927, S.5.
- ²⁵ Frankl,V.E.: Was ist Jugendberatung ? , a.a.O., S.5.
- ²⁶ Frankl,V.E.: Jugendberatung! , In: Der Tag, 18. Februar. 1928.
- ²⁷ Ebenda.
- ²⁸ Ebenda. フランクルはここで具体的に、相談助言者の氏名、住所、相談場所、相談時間、職業を紹介している。相談助言者の職業として記されているのは、神経科医、女医、婦人科医、家庭教師、少年裁判所拘置所の所長、社会福祉士である。
- ²⁹ Frankl,V.E.: Jugend in Not, a.a.O., S.10.
- ³⁰ Frankl,V.E.: Jugendberatung, In: Die neue Generation, Publikationsorgan des Deutschen Bundes für Mutterschutz und der Internationalen Vereinigung für Mutterschutz und Sexualreform, 5. 1928, S.168.
- ³¹ Frankl,V.E.: Jugend in Not, a.a.O., S.10.
- ³² Frankl,V.E.: Jugendberatung, In: Die Bereitschaft 8, Nr.11/12, 1928, S.22.
- ³³ Frankl,V.E.: Jugendberatung, In: Die neue Generation, Publikationsorgan des Deutschen Bundes für Mutterschutz und der Internationalen Vereinigung für Mutterschutz und Sexualreform, 5. 1928,

S.168.

- ³⁴ Frankl, V.E.: Jugendberatung Methoden und Ergebnisse, In: Blätter für das Wohlfahrtswesen der Stadt Wien, 27.Jg., Nr.268, 1928, S.194.
- ³⁵ Frankl, V.E.: Die Wiener Jugendberatungsstellen, a.a.O., S.21.
- ³⁶ Frankl, V.E.: Jugend in Not, a.a.O., S.10.
- ³⁷ Frankl, V.E.: Was ist Jugendberatung ? In: Frankl, V.E. , Bühler, Ch., Kogerer, H., Lukacs, H. (Hrsg.), Jugendnot und Jugendberatung, Selbstverlag, Wien 1929, S.4.
Frankl, V.E.: Die Wiener Jugendberatungsstellen, a.a.O., S.21.
Frankl, V.E.: Typische “Fälle” aus der Jugendberatung, In: Zeitschrift für Kinderschutz, Familien - und Berufsfürsorge, 21.Jg., Nr.11, 1929, S.163-164.
- ³⁸ Frankl, V.E.: Selbstmordprophylaxe und Jugendberatung, In: Münchener Medizinische Wochenschrift, 76.Jg., Nr.40, 1929, S.1675.
- ³⁹ Frankl, V.E.: Jugendberatung, In: Enzyklopädisches Handbuch des Kinderschutzes und der Jugendfürsorge, Leipzig 1930, S.343.
- ⁴⁰ Frankl, V.E.: Was ist Jugendberatung ? In: Frankl, V.E. , Bühler, Ch., Kogerer, H., Lukacs, H. (Hrsg.), Jugendnot und Jugendberatung, Selbstverlag, Wien 1929, S.3f.
- ⁴¹ Frankl, V.E.: Jugendberatung, In: Der Mensch im Alltag, 1.Jg. Heft 5/6, 1927, S.5.
Frankl, V.E.: Jugend in Not; Die Wiener Jugendberatungsstellen, a.a.O., S.10.
Frankl, V.E.: Jugendberatung Methoden und Ergebnisse, In: Blätter für das Wohlfahrtswesen der Stadt Wien, 27.Jg., Nr.268, 1928, S.193f.
- ⁴² フランクルが掲示した青少年相談所のポスターも、ザウアーが掲示した青少年相談所のポスターとほぼ同じレイアウトと内容で作成され、紙面上には「青少年相談所の基本的な原則、相談助言者のリストと住所、面会時間、苦境の中にいる若者への呼び掛け」等が載せられた。Vgl. Sauer, F.: Jugendberatungsstellen ; Idee und Praxis 1914-1923, Leipzig 1923, S. 81f.
V.-Frankl, G. (Hrsg.) Viktor E. Frankl; Frühe Schriften 1923-1942, Wien /München /Bern: Verlag für Wilhelm maudrich, 2005, S.86.
- ⁴³ Frankl, V.E.: Gründet Jugendberatungsstellen !, In: Der Abend, 31. 8. 1926, S.7.
- ⁴⁴ 江口布由子「19-20 世紀転換期のオーストリアにおける児童福祉」九州西洋史学会編『西洋史論集』第 43 号, 2005 年, 1-19 頁を参照。
- ⁴⁵ Frankl, V.E.: Typische “Fälle” aus der Jugendberatung, a.a.O., S.164.
- ⁴⁶ Frankl, V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, In: Psychotherapeutische Praxis, 7, 1935, S.158.
- ⁴⁷ Ebenda, S.155.
- ⁴⁸ Frankl, V.E.: Was ist Jugendberatung ? In: Frankl, V.E. , Bühler, Ch., Kogerer, H., Lukacs, H. (Hrsg.), Jugendnot und Jugendberatung, Selbstverlag, Wien 1929, S.6.
- ⁴⁹ Frankl, V.E.: Typische “Fälle” aus der Jugendberatung, a.a.O., S.164.
- ⁵⁰ Frankl, V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S.157.
- ⁵¹ Frankl, V.E.: Die Lebensgemeinschaft als Lebensaufgabe, In: Das kleine Blatt, 22. Dezember 1929 , Nr.353, S.16.
- ⁵² Frankl, V.E.: Erotic Problems of modern Youth, In: Marriage Hygiene III, No.3, February. 1937, p.233.
- ⁵³ Ibid, p.233.
- ⁵⁴ Frankl, V.E.: Was ist Jugendberatung ? In: Frankl, V.E. , Bühler, Ch., Kogerer, H., Lukacs, H. (Hrsg.), Jugendnot und Jugendberatung, Selbstverlag, Wien 1929, S.5.
- ⁵⁵ Frankl, V.E.: Die Lebensgemeinschaft als Lebensaufgabe, a.a.O., S.116.
- ⁵⁶ Frankl, V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S.156.
- ⁵⁷ Frankl, V.E.: Erotic Problems of modern Youth, op. cit., p.234.
- ⁵⁸ Frankl, V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S.155f.
- ⁵⁹ Frankl, V.E.: Erotic Problems of modern Youth, op. cit., pp.234-235.

⁶⁰ Ibid, p.235.

⁶¹ Frankl,V.E.: Jugend in Not, a.a.O., S.10.

⁶² Frankl,V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S.159.

Frankl,V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, München 1995, S.48. [V.E. フランクル: 山田邦男訳 『フランクル回想録』 春秋社 1998 年, 86 頁。]

⁶³ Frankl,V.E.: Jugendberatung Methoden und Ergebnisse, In: Blätter für das Wohlfahrtswesen der Stadt Wien 27, Nr.268, 1928, S.194.

Frankl,V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S.158.

⁶⁴ Frankl,V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S.158.

第四章 ログセラピーの構想

フランクフルは精神科医師として、あるいはまた困窮のなかで苦悩する青少年の相談助言者として多くの実践を積み重ねていくなかで、人間の偽りなき現実の姿に突き当たる。目の前に対峙した患者や青少年の心的苦悩に、理論的武装を脱ぎ捨てて虚心坦懐に歩み寄って治療や相談助言活動を続けたフランクフルの中に、人間の尊厳性への信頼を中核に据えた人間観が次第に醸成されていき¹、その人間観がベースとなってログセラピー構想のアイデアが創出されていく。

本章では、実践的活動の中で蓄えられた経験はどのようなものであり、それがどのようにシェーラーの哲学的人間学と結びつき、フランクフル独自の心理療法「ログセラピー」の構想へと展開していったのかを、フランクフルが実践の中で抱いた問題意識の解明を手掛かりにして明らかにしていく。

考察の手順は以下の通りである。第1節において、フランクフルが設立を訴えていた青少年相談所の構想に対して、「それは意味がない」と主張するゾフナー（Heinrich Soffner）に反論したフランクフルの見解の根拠を明らかにする。第2節において、ログセラピー構想の契機となったのは何だったのか、フランクフルの青少年相談所での実践を分析することを通して明らかにしていく。第3節では、フランクフルの実践とシェーラー等からの思想的な影響との両面を、どのように融合してログセラピーの理論に結実していったのかを解明していく。第4節では、フランクフルが戦前に構想したログセラピーの理論的構造を解明する。第5節では、ログセラピーの理論が突き当たらざるをえなかった壁を、フランクフルがどのようにして乗り越えていったのかを究明していく。

I 青少年相談所をめぐる論争

フランクフルが青少年の相談助言活動に献身していた頃、当時のウィーンの青少年の置かれていた状況に深く心を痛め、彼が編集していた個人心理学雑誌『日常における人間』の中で、青少年の自殺の実例を紹介している。17歳の肉屋の徒弟の自殺、人生に何の喜びも持っていないことを表明した別れの手紙を後に残して逝った15歳の弟子のガス自殺、誕生日に自殺した19歳の青年、弱視のために苦悩していた皮革装身具の弟子の自殺、商業学校の勉学に嫌気がさして自殺未遂をした16歳の青年、自分の立場に不満であり死にたいという内容の手紙を書き残して姿を消した17歳の商売人の徒弟、両親の家から逃げ出してドナウ河の運河に飛び込んだ10歳の少女、15歳の家政婦の少女の自殺、自分は醜いと思い込んでいた15歳の孤児の少女の自殺、職業に喜びを覚えていなかった16歳の給仕見習いの青年の自殺、14歳の家具職人の徒弟の自殺未遂、人生に目的を持てなかったギムナジウムの生徒の自殺等を載せた²。

その一方で、1927年にゾフナーが、雑誌『夕暮れ (der Abend)』の中に掲載されたフランクフルの1926年の論説「青少年相談所を創立せよ！」³を引き合いに出して、プロレタリア階級の青年の心的な苦境は第一に社会的な性質であり、それは役に立たないと言って、青

少年相談所の創設の呼びかけに反対する考えを論文で公にしたとき、 فرانクルはそれに対して真向から反駁した。ゾフナーが、ひとえに経済的な困窮だけが青少年の心的な苦境の本質を形成しており、それは外面的な社会的な状況の改善によって取り除くことができると述べたことに対して、フランクルは次のように異議を唱えた。「この経済秩序の内側で、勇敢な人たちと意気地のない臆病な人たちが存在している。屈しないで持ちこたえている人たちと、そして、打ち負かされ屈服させられている人たちが存在している。まさに、事実上の状態だけが問題であるのではなくて、それに対する態度も問題である。心的な苦境の発生を促進するだけではなくて、心的困窮に対しての口実を提供する社会秩序においてさえ、依然としてなお、個人的な態度決定のための十分な余地が残ったままである」⁴。フランクルは、経済的な困窮の中でも、その困窮に屈してしまっている人と、困窮の中でもそれに屈することなく持ちこたえている人の両者がいることを指摘し、経済的な困窮の真只中においても、その中で苦境に立ち向かっていく「態度決定の自由の余地」が残されていることを提示している。青少年の自殺の頻発を、社会的、経済的な条件で引き起こされたものとして理解することを承認してはいるが、そこでは単なる動機が問題となっているのであり、真の理由は、彼らの環境に対する人間の「態度決定」の中に、彼らの勇気のない臆病の中に存していると、フランクルは考えた⁵。1927年はまさしく、フランクルが、アドラーの個人心理学協会から除名された年であったことに留意しなければならない。フランクルはさらに別の論文の中で、助言を求める人のわずか数パーセントだけが経済的困窮に起因する理由のために青少年相談所を訪れて来ていたにすぎず、しかもそれは、彼らが青少年相談を職業相談と取り違えていたという理由からであったことを指摘し、ゾフナーの主張に論駁している⁶。

II ログセラピーの構想の契機

フランクルは多くの青少年の相談助言に関わっていく中で、経済的な困窮は心的苦境を培養する温床ではあるが、決して神経症の直接的な原因ではないという見解に至った。フランクルは、同じ経済的な苦境の中でも、その困窮の中で勇敢に苦境に立ち向かい、打ちひしがれることなく屈服していない青少年たちが、生き生きと活動していることに着目する。まさに、無感情と抑鬱性とに特徴づけられた、神経症的な青少年のタイプには欠けている感情と自覚である。フランクルは、若者を取り巻く外的な条件は、当時の若者の多くの自殺の、単なる「動機」、「きっかけ」にすぎないと見なした。フランクルは、「青少年の自殺の現在の集積を、社会的な集団現象として、そして社会的または経済的に誘発されたものとして十分によく把握している」⁷と述べて、心的な苦境の原因が経済的な困窮にあることを認識しそれを解決していくことの重要性を認めつつも、その解決に突き進むだけでは、政治的な解決だけでは若者の苦境は解決できないと考えた⁸。経済的状況は人間の心と相互に作用し合い、心的な苦境の原因であるよりも、むしろその結果を意味しているという見解に達する。制約を受けつつも自由に行動することのできる余地をだれでもが持って

おり、経済的な危機の影響は決して直接的な影響ではなく、それを媒介する個人の内側の中間地帯を通して干渉してくるのだと、そのメカニズムを解き明かした⁹。したがって、経済的苦境を同胞の前での口実と自分自身に対しての言い逃れの材料にするタイプは、彼のすべての苦悩を一点上に集中しており、経済的困窮は「敗残の現存在の罪をなすりつける、身代わりとしての贖罪の山羊、スケープゴートの性格を手に入れる」¹⁰と、フランクフルは述べている。

事実、フランクフルは、経済的な困窮に屈することなく勇敢に人生を切り拓いていく、真の英雄と呼ぶべき青年たちを知っていた。当時のウィーンの青少年たちの中で、同じように困窮に苦悩し飢えに苦しんでいるにもかかわらず、あるタイプの青少年たちは、まっすぐに立ち、ある種の快活さを保って優れた姿を保持することができていた。彼らの自由な時間は、有益な取り組みによって埋められていた。彼らは、共同体の中で遊び、徒歩旅行をし、スポーツをし、体操をし、学び、成人学校の講座と講義に通っていた。あるいはまた、何かある組織内で、自由意志による援助者として働いていた。空腹の中で、図書館の助手として働いているか、民衆大学の整理係として働いていた¹¹。フランクフルは、その具体的な例を当時の雑誌や新聞の中でたびたび紹介した。「ぐうぐう鳴るおなかで腹をすかせて、彼らはある団体に働いている。たとえば、図書館で自発的な助手として働くか、民衆大学で整理係の仕事を果たしている。彼らは、ある事がらやある考えへの、それどころかより良い時間を求めての格闘への、失業の問題をも解決する新しい世界を求めての格闘への献身によって満たされている。彼らの残念ながら過剰にも手もとにある自由な時間は、有益な取り組みによって埋められている。彼らは読書をして学ぶ、講義と講座を聴く、遊ぶ、そしてスポーツをする」¹²。経済的困窮の中で人生を意味豊かに生きている具体的な姿を眼前にして、フランクフルは、同じ外的な状況として直面している同一の飢えにもかかわらず、彼等の人生に対する態度が、他方の無感情を伴う失業神経症的な人たちの人生に対する態度と比較して、かくも相違しているのは何が原因であるのかと自問し、次の結論に達する。すなわち、生を肯定的に考えて生活に向き合う人たちは、そのつど内面的に何らかの方法で満たされていた。人生の目標と目的を持つ人間は、その困窮に打ちのめされることなく、有意義な時間を過ごしていることを経験的に知った。

物質的な苦境はそれ自体で直接的に心的な影響に至るのではなく、人格によるその精神的な「消化」、すなわち彼らを取り巻く環境に対する人格的な態度決定によって初めて決定的な要因となっているという考察に、フランクフルは至った。彼らの内面で遂行される、外的状況に対しての自らの「態度決定」こそが、決定的な問題であるという結論に至る¹³。人生からの逃避が問題になっている限り、その解決に向かう問題性は、世界観的な態度決定の領域の中に帰着するとフランクフルは考えたのだ。そしてさらに、外的な困窮に対して屈服することなくそれに立ち向かい、積極的に自分の人生を切り拓いていこうとする、人生に対するポジティブな態度はどこから生じて来るのか考察を進め、彼らが内面的に満たされているという理解へと、フランクフルの洞察は深まっていった¹⁴。

苦境の中にある青少年を前にして、何の理論的な前提を持つことなく虚心坦懐に彼らを見たとき、彼らの苦悩の本質は経済的な外的な苦境ではなく、外的な苦境に打ち克つ根拠となる「生きる意味」が存在していないことであった。 فرانクルは断言している。「若者は、少なくとも仕事とパンを求めるのと同様にひじょうに激しく、人生の意味内容を、人生の目標と目的を、現存在の意味を求めて叫ぶ」¹⁵。まさに青年が、ある内容を、ある目標を見出すということがまず第一に重要な問題であった。人間の心的 - 精神的な現実世界を正当に評価したとき、実存を支える最終的なカテゴリーは「充足のカテゴリー」「意味発見のカテゴリー」であるという見解に、フランクルは達した¹⁶。青年たちの心的な困窮の真の理由は、「人生の意味内容、人生を充実させるものが欠けている」¹⁷という若い失業者の言葉そのものであった。若い世代の苦悩する能力と課題を遂行する能力を過小評価するのではなく、彼等は実は価値を実現することを渴望しているのだという、彼らの苦悩の内奥にフランクルは目を向けた¹⁸。「私は最も簡素で素朴な生活に満足する。それが意味内容を持つとき、私の思考と感情がある方向を手に入れるときに」¹⁹という、ある若者からの手紙の記述そのものが心的な困窮の本質的内容であると理解した。自殺の心理的な根拠がどんなに異なっているとしても、その一貫した精神的な背景は「生の意味」への信頼の欠如であるとフランクルは解した。生を肯定し心が満たされて、快活に生きている若者のタイプは、人生の意味内容、人生を充実させるものを内に持っていた。そして、内面的に満たされていることの内実とは、「生の意味の信頼」に満たされていることであり、人間の根源的な欲求は、人生の意味内容、人生の目的、現存在の意味を求める欲求であるという洞察に至る。この生命の充足は、使命と任務をもち、それを果たしていく責任を引き受けていくことの中にこそ存在していた。しかも人生の意味内容は、彼のごく身近な、与えられた具体的な課題の中に存していた。フランクルは、経済的困窮の中で人生を意味豊かに生きている具体的な姿を眼前にして、人生の目標と目的を持つ人間、すなわち任務、使命を持つ人間は、主観的な労苦と客観的な困窮に打ちのめされることなくそれを克服し、有意義な時間を過ごしていることを経験する。逆に、そのように前向きに生きている人間は、経済的な困窮を脱していくチャンスがより多くあることを知った。使命を持っているという確信、責任を担うという自覚以上に、人間が困難を克服できるようにすることは不可能であるとフランクルは考えた。フランクルは次のように確言する。「心的な健康と生きる喜びは、何よりもまず、成し遂げられる業績の充足する体験に依拠している」²⁰。

したがって、若者を、使命を果たしていく責任性へと、物質的な苦境を態度決定によって消化して乗り越え自らの生を充足させていく責任性へと教育することこそ、相談助言者の為すべきことであるとフランクルは考えた。困窮にうちひしがれて失望し、そのことからさらに苦境に陥っていくという悪循環から脱出させていくためには、そのサイクルを絶ち、自分自身に課せられた責任を引き受けるという「態度の転換」へと援助していくことが大切であると考え、そのことを青少年相談の主眼としていかなければならないと主張する。ここにこそ、ロゴセラピー構想の契機が見出される。相談者に態度決定を要求し、自

らの人生の意味を信頼し、その充足に対して「責任を担う」という世界観へと導くことは、単なる心理療法の枠組を超えて、心理療法の中へ哲学を導入し、心理療法に哲学を応用していこうとする試みでもある。すなわち、ロゴス、意味と価値の世界へと相談者を導こうとしているのだ。相談助言者は、助言を求める者から彼の決断の責任を取り除いて転嫁させることに誘惑されてはならず、助言を求める者を、彼自身において引き受ける責任性へと教育することを何よりもまず心にかけていかなければならないと、フランクフルは考えた。その責任性から、助言を求める者は迅速に、彼に適切な社会的状況と同様に、個人的状況にふさわしい使命に至る道を、自ら見つけ出していくというのだ。

Ⅲ 理論と実践の融合

フランクフルが、困窮の中にある青少年の問題解決の視座として、「態度決定」「態度の転換」に着目したことこそ、まさしくシェーラーから受けた思想的影響であったと考察できる。フランクフルは、フロイトの精神分析、アドラーの個人心理学の枠組の中では、青少年の心的な困窮を根底から救うことはできないと考えたのだ。心理学的な平面から精神の次元へと飛翔し、そこでの態度決定こそが、直面している実際の状況での具体的現実的な、心的困窮の救済の道であるという結論に至った。まさに、シェーラーの哲学的人間学こそが、「自由な意志による態度決定」へと視座を転換させ目を開かせたのだ。

シェーラーは、その人間理解の中に精神の概念を導入し、精神を賦与された存在の「世界開放性 (Weltoffenheit)」と「自己対象化 (Selbstobjektivierung)」の能力を提示した。シェーラーの人間学の解明によれば、「精神的な存在の根本的規定 (Grundbestimmung) とは、呪縛からの、抑圧からの、有機的なものの依存からの、『生 (Leben)』と生に属するすべてのものからの、それ故にまた、それ自身の衝動に基づく知能 (Intelligenz) からの、実存的な解放であり、自由であり、剥離の可能性である。ないしは、精神的存在の現存在の中心 (Daseinszentrum) の解放、自由、剥離の可能性である」²¹。精神的な存在は、衝動や環境に緊縛されているのではなく、環境世界から自由であり、「世界開放的」であり、そのような存在は「世界」を所有するというのだ。人間は、精神の力に基づいて、彼の環境の中で、個々の対象を、自身の心理身体的な存在に関するコンテキストから引き離し、対象それ自体に向かうことができる。すなわち、人間は、自身の環境の刺激に対して、予定された通りに反応するのではなくて、刺激 - 反応の型から自身を引き離し、行動それ自体を決定することができる存在であるという人間理解が、シェーラーの人間学的探究の精髓である。精神を賦与された存在のさらなる徴表は、自己客観化対象化の能力であり、人間の対象化の能力は、環境ならびに自身の心身の状態をも包括し、人間は精神性の力に基づいて両方の視座に対して距離を持った態度をとることができるというのが、シェーラーの理解する人間の能力である²²。世界の脱現実化という作用を遂行しうるのは「精神」の存在だけであると、シェーラーは考えた²³。

シェーラーと同様、フランクフルは、人間を、一回限りのかけがえのない人格として、精

神を賦与されているがゆえに自己超越と自己距離化が可能な、価値と意味に関連づけられた存在として理解する。この視点から「今、ここで」対応し、自らを方向づけることの必要性を指摘することにより、人間の「自由と責任」を人間学の中心に置き、人間の良心と使命の独自の解釈を抱く。具体的な状況における具体的な人格の一回限りで唯一無二の可能性を解明することが問題となる時、個人的な使命は倫理的な意味をもつというのだ。

人間は、環境の影響と衝動の構造から距離をとって離れることができ、自身の行動を自らの洞察に従って決定することができるという「自己超越」と「自己距離化」の能力こそが、シェーラーの人間学から受け継いだ、フランクルの人間学的理解の核心であったと考察できる。人間は精神的な存在として心理身体的な存在から距離をとって離れ、心的状態と外的状況に対して自由に選択的に行動することができる可能性が与えられているという、より包括的な人間理解の考察が、「困窮の中にある青年を態度転換へと導く」というアイデアへと導いていった。困窮している人たちを前にしての根源的な解決を求めたとき、シェーラーの人間学に探求の糸口を求めていかざるを得なかったのは必然的であった。フランクルは述べている。「この人間学的なものが本質的に他の地平に横たわっているか、あるいは少なくとも、何らかのより全体的かつ包括的なものを、単なる衝動的なものに対して描出しているということを既にマックス・シェーラーは教えていた」²⁴。また、次のようにも記述している。「人間の安寧（Heil）は、できる限りの価値の充足の中にあるというマックス・シェーラーの定義を思い出す」²⁵。

フランクルは、困窮にある青少年の真の救済の方向性を示唆するとき、「態度決定」と「決断の自由の余地」について、度々言及した。「ただ単に家庭からの逃避だけではなく、人生からの逃避もまた話題になっているかぎり、ある一つのことが忘れられてはならない。後者の解決において、私たちの問題性は、世界観的な態度決定の領域の中に注ぎ込み帰着する」²⁶。「物質的な苦境はそれ自体で、直接的に心的な影響に至るのではなくて、人格による消化が、すなわち物質的困窮に対しての人格の態度決定が初めて、決定的な要因と見なされうる」²⁷。さらにフランクルは、人間の価値実現のカテゴリーとして、創造的価値と体験的価値の記述の後に次のように言及する。「人間は永続的な、あるいはまたさしあたりの、避けることのできないまさに運命的な事態に対して、どのような態度でふるまうのかと問いかけることは、なお価値実現のチャンスを生み出す」²⁸。生を充足させるべき責任性への、態度決定の可能性に眼差しを向けたフランクルの人間理解こそが、「青少年相談の実践から得た叡智」と「シェーラーの思想」が交差する場であったと考察できる。フランクルは、強制収容所体験前の発言の中で、シェーラーの思想的影響を直接的には述べてはいないが、既に見てきたように、青少年相談所に関する1927年以降の彼の著述の中に、その影響の痕跡を明確に認めることができる。

次第に、フランクルの中に、次のテーゼが凝縮していった。人間は、反射の束や心理身体的な自動装置ではない。単に盲目的な衝動によって駆り立てられ、劣等コンプレックスによって支配されているのではない。そうではなくて、人間において決定的なもの、

心理身体的に体験し経験するすべてのことに対して自ら態度を決めることができ、価値によって引き寄せられていることを感知し、意図的志向的に決断を下すことができる精神的な人格なのだ。そこから فرانクルは、青少年の困窮が治療されなければならない本質的な地点は、責任性へと教育すること、自身の生の充足という責任を担う人間へと、助言と励ましによって導いていくことをスタートとする地点である、という結論に到達した²⁹。フランクルは語る。「相談助言者は、残念ながら青少年の経済的な状況を変えることはほとんどできないが、それに対して、経済的な状況に対する態度に影響を与えることができる。相談助言者は、当事者が必要ならば経済的苦境に耐えることができ、可能ならば経済的困窮を除去することができる能力を獲得するという、彼らのこのような転換を引き起こすべきである」³⁰。この理論と実践の融合の胎動は、次節で述べる収容所体験前に築かれていったロゴセラピーの理論構想へと結実していく。

IV ログセラピーの構想

フランクルは、強制収容所に収容される前に、以下の3つの重要な論文を発表する。「心理療法の精神的な問題性に対して」(1938年)、「心の医師の自省」(1938年)、「哲学と心理療法—実存分析の基礎づけ—」(1939年)。そこにおいて、フランクルが、青少年相談所の実践の中で蓄積された経験をもとに、新しい心理療法のベースを形成していこうとする試みを見ることができる。いわば、ここで論述されている理論が、強制収容所に収容される前に到達したフランクルの思想と考えるとよいだろう。フランクルが、彼の実践をどのような心理療法の形に結晶させていこうとしたのか、これらの論文を分析しつつ考察を深めていく。

フランクルは、フロイトの精神分析とアドラーの個人心理学の限界を指摘する。フランクルの解釈は以下の通りである。精神分析医は、神経症的な症候の発生の契機を、抑圧の中に、意識内容の無意識化の中にその本質が存しているととらえる。精神分析における治療の原則は、抑圧の破棄の意味において意識化させることである。それに対して、個人心理学的な治療法においては、神経症的症候は責任を転嫁するという個人の試みとして解釈される。両方の学説は、心的な現実を制限している。精神分析は、すべてのものをリビドーに還元し、最終的な解決において常にリビドー的なものだけを承認しているのに対して、個人心理学的な見解では、心的な生起を制約し、すべての神経症的な症候を目的への手段と評価する。精神分析と個人心理学は、根本的立場においては、お互いの必然的な補完のみを描出している。精神分析の行為の信条が、現実世界への衝動性の適応であるのに対して、個人心理学は、自我の側からの現実の勇敢な形成に到達するという治療上の格言を持つ³¹。

これに対して、フランクルは、自らの実践とシェラーの人間学から示唆を得て、クライアントの中に「人間」を見、人間的なものに対して信頼しようとする。精神分析と個人心理学の人間像を越えて、適応と形成を打ち破るより包括的な次元、より全体的な地平を

希求する。心的 - 精神的な現実世界を正当に評価したときに、人間像の中に包含される最終的なカテゴリーは、「充足のカテゴリー」「意味発見のカテゴリー」であると結論づけた上で、フランクフルは次のように述べる。「心的領域を超越し、人間の実存のすべての深みと高みにおいて全人間の実存を顧慮し、そしてそれに応じて実存分析と呼ばれうる、もっぱら心的な、特に神経症的な事象に関する理論はどこにあるのだろうか」³²。ここに、1933年に初めて用いられた「実存分析」という術語が、1938年の論文「心理療法の精神的な問題性に対して」の中で使用され、その概念が形作られた。フランクフルはさらに、実存分析について次のように述べる。「心理療法が、心的に苦悩する者の背後に、さらになお精神的に格闘している者を、必然性と可能性の世界の中に、存在（*Sein*）と当為（*Sollen*）の緊張の中に置かれた存在として認識するとき、そのときにだけ、精神的なものに方向づけられ実存分析となって、すべての治療上の可能性を使い果たすだろう」³³。そしてまた、フランクフルが、以前から講演の中で用いていた術語「ロゴセラピー」も、同じ論文の中で、初めて出版物の形で出現し次のように述べられる。「哲学の内部での、論理主義による心理学主義の克服と同じように、心理療法の範囲内での、ある種のロゴセラピーによる従来の心理学主義的な逸脱を克服することが重要になるだろう」³⁴。フランクフルの構想した心理療法が、これまでの心理療法の規範的な硬直した一面性を越え出て、人間存在の全体性を、心的に病む人間の全体像の中で柔軟に把握することを目指したとき、「ロゴセラピー」の構想が生まれたのだ。

V 心理療法における精神の自律性の尊重

フランクフルの、強制収容所に収容される直前の「心理療法の精神的な問題性に対して」（1938）と「哲学と心理療法—実存分析の基礎づけ—」（1939）の二つの論文は、心理療法と哲学の境界領域と両者の相互への浸透性について踏み込んでいく、同じ思想的境涯に立つ論考である。そこでは、フランクフルが実践と理論の架橋を試み、独自の心理療法としてロゴセラピーと実存分析という形に体系的に結晶させていく構想を見ることができる。それは、自己の生の充足への責任性への覚醒を促す、「価値づける心理療法の価値観強要」の危険性の回避という、デリケートな問題に対しても踏み込むこととなる。

フランクフルの考えでは、心理療法はすべての精神的なものの自律性に対するの尊重を保証し、心理療法医の側からの心理学主義的な干渉を避けるべきである。具体的な心理療法内部では、人格的なもの、そのつどの患者の世界観、一回的なもの、具体的 - 精神的なものが問題となるなかで、医師はそれに対して、尊敬の念をもって思慮深く寛容かつ公正に向き合って対峙しなければならない。しかし、実際の臨床の場においては、患者の側での世界観的な決断と人格的な価値づけが為されなければならない状況に出会う。そのとき、医師は、その問題を回避することなく、それに対して立ち向かい、自ら態度を決定することが強いられる。

ロゴセラピーにおいては、世界観と価値の問題性を心理療法の中に持ち込むという必然

性に伴って生じて来る、特殊な危険性が現出した。患者に対しての、純粋な医療的行為の越境と医師の人格的世界観の強要の危険性である。患者に対して世界観的な意識的な価値づけの態度決定を求めるのだが、価値づけることを促すことは許されるのか、そのような態度決定は可能であるのかどうかという問題、「価値づけの不可避性・前提性」と「強要の不能性」というジレンマの問題に直面する³⁵。「価値づけるものとしての心理療法は可能なのだろうか。そして、価値づける心理療法は、いかにして可能なのだろうか」³⁶。そのジレンマに対しては、素朴な包括的な思慮が解決を見出すと فرانクルは述べる。純粋に形式的な倫理的な価値として、まだ具体的な諸価値への方向性を包含していない価値、すなわち責任性の価値に拠ることが必要であると、フランクルは考えた。「(当然自明な)意識 - 存在と並ぶ責任 - 存在が、人間の現存在の本質を形成している」³⁷というところを出発点とする、人間の現存在の最も深い熟考がそのジレンマを解決できるとフランクルは理解する。人間の人格の責任性は、人間学的な中心概念であり、それは倫理的に中立な概念を意味しているのだ。責任性は、倫理的な中立の極限値を表現しており、その極限値にまで、心理療法は、暗示的かつ明示的に価値づける行為として、前方へ突き進むべきであるとフランクルは洞察した。

心理療法の中で、実存の本質的特徴としての責任性の深層意識に達した患者は、そのとき自動的に、もう既に自分自身から、人格の唯一無二性と運命の一回性とにふさわしい価値づけに到達しているというのだ。責任性を実存の根本的な基礎として意識させるとき、それは既に、価値づける態度決定に対しての無条件的な拘束力を内容として含んでいるとフランクルは考えた。フランクルによれば、「責任性はいわば主観的な側面であり、客観的な側面上には価値が位置する」³⁸。価値の選択、価値の淘汰と承認が、そのとき、医師の側の強制なくして、結果として生じる。責任性を意識するようになった人間は、この責任性から自ら価値づけていくのだ。重要なことは、「患者が世界観そのものを持ち、そして、そもそも価値に対して責任を自覚するところまで患者を導くこと」³⁹なのである。

フランクルは、その考えを、青少年相談所での具体的に体験した例を挙げた後で、次のように説明している。「青年がある内容を、ある目標を見出すということ—どんな種類のものなのか、それはもはや相談助言者の問題ではない。彼は、助言を求める者から彼の決断の責任を取り去るか、ないしはその責任を転嫁させることへと決して誘惑されてはならない。彼はむしろ、あらゆるほんとうの心理療法医と同様に、まさしく助言を求める者を、自身の責任性へと教育することを心掛けなければならない。その責任性から、当の本人はそれだけますますより迅速かつ容易に、彼に適切な、個人的ならびに社会的な状況にふさわしい使命に至る道をうまく見つけるだろう。この精神的な困窮がもしかすると、たとえ表面的かつ通俗的な価値判断にとっては最も目立たない点であろうとも、そこから青少年の困窮が癒されなければならない最も本質的な地点である」⁴⁰。

すなわち、クライアントに対して、現存在を責任存在として理解させるとき、責任性を実存の根本的な基礎として意識させるとき、そのことは既に価値づける態度決定に対して

の無条件的な拘束力をもつと、 فرانクルは考える。責任性を意識するようになった人間は、この責任性から価値づけることを強いられているのだ。しかし、どのように価値づけるのか、どのような価値の序列を樹立するのか、それは、医師の影響力の行使から免れている。患者は、意識的になった責任性から、独りで自主的に個性に適した価値と価値の序列に向かって突き進んで行くということが要求される。この具体的な態度決定に対しては、個々の価値内容に対しては、医師は介入を行使することを断念しなければならない。フランクルは、青少年相談所での実践を積み重ねた結論として次のように述べた。「人間的な援助の特殊な形態としての相談は、その固有の精神的な問題性を持つ。その問題性は、一方において、相談の内容に対しての相談助言者の積極的な責任の緊張から、他方において、助言を求める者が自由な責任性の中で為さなければならない決断の十全な完璧さに対しての、相談助言者の消極的な責任から生じる」⁴¹。

最終的に、相談者は問う者ではなくて、逆に問いかけられている者であることを自覚しなければならない。自分自身を人生の側から絶え間なく尋ねられている人間として体験するときに、自分自身を内的な素質の一回性と外的な状況の唯一無二性の中で、自身の使命を充足しなければならない存在として体験するときに、現存在の責任性の根源的事態に合致するとフランクルは考える⁴²。フランクルが青少年相談の実践の最中で語っている「心的な健康と、それとともに生きる喜びは、何よりもまず成し遂げられる業績の、充足する体験に依拠している」⁴³という言葉は、その確信であったと考えられる。

責任存在であり使命を有するという人間の実存の本質を心理療法の中核に据えて、唯一性と一回性において、自身の人生から意味を引き出すことのできる人格的な能力、自主的に意味を発見することができる能力へ、心理療法医は患者を導いていかなければならないとフランクルは考察を進めた⁴⁴。まさにこの考えがベースとなってオリジナルな視座が創出され、フランクルのロゴセラピーの構想の核心となっていった。

第四章 註

- ¹ フランクルは回想録の中で、民衆大学と社会主義労働者青年団においての講演の経験が、青少年相談所での来談者との接触で得たものと融合し、彼自身の中に財産となって蓄積したことを述べた後で、まだ医学生でありながら病院で心理療法を始めたときのことを、次のように記述している。「私は、精神分析や個人心理学で学んだことをすべて忘れようと試みた。患者から学ぶこと、患者の言うことに耳を澄ますことに努めた。患者の病状が良くなる時、彼がどんなことをするのかを探り出そうとした。私は、即興で行い始めた。」(Frankl, V.E.: Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen, München 1995, S. 51f. [V.E.フランクル (山田邦男訳) 『フランクル回想録』春秋社, 1998年, 89-90頁。])
- ² Frankl, V.E.: Was ist Jugendberatung?, In: Der Mensch im Alltag, 1. Jg., Nr. 3, 1927, S. 4f.
Frankl, V.E.: Jugendberatung, In: Der Mensch im Alltag, 1. Jg., Heft 5/6, 1927, S. 4f.
- ³ Frankl, V.E.: Gründet Jugendberatungsstellen!, In: der Abend, 1926, S. 7.
- ⁴ Frankl, V.E.: Zur Frage der Jugendberatung, Eine Entgegnung, In: Die Bereitschaft, 7, Nr. 5, 1927, S. 14.
- ⁵ Frankl, V.E.: Gründet Jugendberatungsstellen, In: Die Praxis, Mitteilungen für die Organisationsarbeit der Sozialistischen Arbeiterjugend Deutschösterreichs, Nr. 4, 1927, S. 32.
- ⁶ Frankl, V.E.: Jugendberatung, In: Die Bereitschaft 8, Nr. 11/12, 1928, S. 22.
Frankl, V.E.: Was ist Jugendberatung? In: Frankl, V.E., Bühler, Ch., Kogerer, H., Lukacs, H. (Hrsg.), Jugendnot und Jugendberatung, Selbstverlag, Wien 1929, S. 4f.
- ⁷ Frankl, V.E.: Gründet Jugendberatungsstellen, In: Die Praxis, Mitteilungen für die Organisationsarbeit der Sozialistischen Arbeiterjugend Deutschösterreichs, Nr. 4, 1927, S. 32.
- ⁸ Ebenda, S. 31-32. フランクルは、ゾフナーの考えに反駁するこの論説の中で、次のように述べている。「私たちが、私たちの目標への最良の道を探し求めるとき、心理学的な極値の中へ逃げ込むことも、また政治的な極値の中へ逃げ込むことも許されない。」
- ⁹ Frankl, V.E.: Wirtschaftskrise und Seelenleben, Vom Standpunkt des Jugendberaters, In: Sozialärztliche Rundschau, 4, Nr. 3, 1933, S. 44.
- ¹⁰ Ebenda, S. 44.
- ¹¹ Frankl, V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, In: Psychotherapeutische Praxis, 7, 1935, S. 157-158.
Frankl, V.E.: Die seelische Not der arbeitslosen Jugend, In: Blätter für Krankenpflege und Fürsorge, 3. Jg., Nr. 11-12, Nov.-Dez., 1936, S. 86.
- ¹² Frankl, V.E.: Wirtschaftskrise und Seelenleben, Vom Standpunkt des Jugendberaters, a.a.O., 45.
- ¹³ Frankl, V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S. 157.
- ¹⁴ Frankl, V.E.: Die seelische Not der arbeitslosen Jugend, a.a.O., S. 86.
- ¹⁵ Frankl, V.E.: Wirtschaftskrise und Seelenleben, a.a.O., S. 45.
- ¹⁶ Ebenda., S. 45f.
- ¹⁷ Die seelische Not der arbeitslosen Jugend, a.a.O., S. 86.
- ¹⁸ Frankl, V.E.: Wirtschaftskrise und Seelenleben, a.a.O., S. 45.
- ¹⁹ Frankl, V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S. 158.
Frankl, V.E.: Die seelische Not der arbeitslosen Jugend, a.a.O., S. 86.
- ²⁰ Frankl, V.E.: Die seelische Not der arbeitslosen Jugend, a.a.O., S. 87.
- ²¹ Scheler, M.: Die Stellung des Menschen im Kosmos, Darmstadt, 1928, S. 47. [マックス・シェーラー (亀井裕・山本達訳) 『シェーラー著作集 13』白水社 1977年, 48頁。]
- ²² Ebenda. S. 51. [邦訳, 52頁。]
- ²³ Ebenda. S. 65. [邦訳, 67-68頁。]
- ²⁴ Frankl, V.E.: Seelenärztliche Selbstbesinnung, In: Der christliche Ständestaat, 5, 1938, S. 73.
- ²⁵ Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, In: Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, Bd. 10, 1938, S. 36. [V.E.フランクル (赤坂桃子訳) 「心理療法における精神の問題について」『ロゴセラピーのエッセンス』新教出版社, 2016年, 82頁。]
- ²⁶ Frankl, V.E.: Kinder als Ausreißer, In: Arbeitersonntag, 15, 4., 1934.

-
- ²⁷ Frankl, V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S.157.
- ²⁸ Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, a.a.O., S.44. [邦訳, 98 頁。]
- ²⁹ Frankl, V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S.158.
- ³⁰ Frankl, V.E.: Wirtschaftskrise und Seelenleben, Vom Standpunkt des Jugendberaters, a.a.O., S.46.
- ³¹ Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, a.a.O., S.34f. [邦訳, 80-81 頁。]
- ³² Ebenda, S.36. [邦訳, 83 頁。]
- ³³ Frankl, V.E.: Seelenärztliche Selbstbesinnung, a.a.O., S.74.
- ³⁴ Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, a.a.O., S.42. [邦訳, 94 頁。]
- ³⁵ Ebenda, S.37. [邦訳, 85 頁。]
- Frankl, V.E.: Philosophie und psychotherapie, Zur Grundlegung einer Existenzanalyse, In: Schweizerische Medizinische Wochenschrift, Bd.69, 1939, S.708.
- ³⁶ Frankl, V.E.: Philosophie und psychotherapie, a.a.O., S.708.
- ³⁷ Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, a.a.O., S.37. [邦訳, 85-86 頁。]
- ³⁸ Frankl, V.E.: Philosophie und psychotherapie, Zur Grundlegung einer Existenzanalyse, a.a.O., S.708.
- ³⁹ Frankl, V.E.: Seelenärztliche Selbstbesinnung, a.a.O., S.73.
- ⁴⁰ Frankl, V.E.: Aus der Praxis der Jugendberatung, a.a.O., S.158.
- ⁴¹ Ebenda, S.159.
- ⁴² Frankl, V.E.: Philosophie und psychotherapie, Zur Grundlegung einer Existenzanalyse, a.a.O., S.709.
- ⁴³ Frankl, V.E.: Die seelische Not der arbeitslosen Jugend, a.a.O., S.87.
- ⁴⁴ Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, a.a.O., S.38. [邦訳, 87 頁。]

第五章 ログセラピーの人間観

ログセラピーは、人間を、身体 (Leib) - 心理 (Seele) - 精神 (Geist) の統一体として捉え、身体、心、精神の三次元の一体性の中において初めて人間性の本来的な姿が現出すると考え、従来の心理療法に、より包括的な精神の次元の視座を取り入れようと試みる。精神の次元の導入は、すなわち「意味」と「価値」という倫理学の領域を心理療法に取り入れて適用することを意図している。人間の実存の本質を自由性と責任性にあると考えて、そのことを心理療法の中核に据えることを要請する¹。

精神的実存的人格に呼びかける、「精神 (Geist)」を顧慮した「ログセラピー」を、フランクフルはなぜ提唱しなければならなかったのか。若きフランクフルの思想形成を概括しつつ、そのことを追究していくことは、ログセラピーが目指していたものをより鮮明にしていくと考える。フランクフルが、なぜそれまでの心理療法に満足せず、「精神 (Geist)」の次元を考慮に入れようとしたのか、そして「精神 (Geist)」の次元を取り入れた心理療法は、人間の現実と可能性をどのように把握していたのかを本章において論述していく。

考察の手順は以下の通りである。第1節において、ログセラピーの目指したものを、心理学主義からの離脱の視点から明らかにしていく。第2節において、心理学主義からの離脱を理論的に可能にし、ログセラピーに理論的な根拠を与えることができたと考えられる「精神 (Geist)」とは何かを究明していく。

I 心理学主義からの離脱

フランクフルのログセラピーの出発地点は、心理療法の範囲内での、心理学主義に対しての抵抗であった。フランクフルは、心理学主義の最大の問題を、精神的な次元を否定してすべてのものを心的なものの次元へと投影することの中に見ていた。心理学主義は、精神的なものを見落とすだけではなくて、心的なものの内部で病理学的なものだけを見る。しかし、精神的なものからの療法としてのログセラピーは、患者の臨床的な症状の背後に、「精神的な困窮」「意味を求めて格闘している苦悩の姿」を見ようとする。そのことは、患者の心的葛藤を世界観的な決断の精神的な領域の中にまで追求すること、それによって心的に苦悩している者の背後に精神的に格闘している実存的な存在を見抜くことを意味する。

フランクフルは、病む人間を深く洞察していた。すなわち、神経症患者は確固とした世界観、哲学的な体系、形而上学的宗教的な人生観を持っており、それ故に、最終的な治療上の基盤をつくり出すためには、世界観的な体系上での哲学的な反証でのみ対処されうると考えた²。フランクフルが、神経症の患者に誠実に対峙したとき、彼らの人間観・世界観と対決せざるをえないところに立たされた。現実世界に対する彼らの肯定的積極的な生の態度を導くためには、彼らに対して世界観的哲学的なアプローチが求められたのだ。

そのことは、フランクフルが人生の問題に苦悩する青少年に対峙したときも、同様であった。フランクフルは、青少年相談所に相談助言を求めてやってきた青少年の声に虚心に耳を傾け、その底に苦闘する人間の真の姿を見ようとしたとき、人間の実存の最も深い基盤に

対しての普遍的な熟考へと導かれていった。その具体的な実践の中で築き上げていった彼の人間観は、ある確信となった。与えられた現実や運命に対して、人間は「ある態度をとることができる」という考えである。人間は、自らに与えられた生物学的事実、心理学的事実、社会学的事実のそれぞれから自分を引き離し、それに対して態度をとり意味発見と意味充足に向かうことのできる、自由を持った存在であるという確信が、フランクルのなかで芽生える。すなわち、相談助言を求めてやってきた青少年に対しても、その人間観に依拠した世界観的哲学的な方向性を持った対応が求められたのだ。

フランクルの実践は、シェラーの思想から哲学的な根拠を提供され、殊に彼の「精神 (Geist)」の概念から啓示を与えられてロゴスとして結晶し体系的な形に仕上げられていく。人間は、身体的および心理的な現象と明確に区別される精神的な現象の次元において、世界と自分自身に対して立ち向かうことができるというのだ。「精神 (Geist)」は、「心 (Seele)」と明確に区別され、心的な現象に従うのかそれともそれに抗するのかを決める、主体的な決断の自由が人間の中に存しているという見解である。その主体的な決断の場が「精神 (Geist)」の次元であり、精神的な次元にこそ、まさに人間の本質的な特徴があるという考えに至る。人間は決断する存在であり、「その瞬間、瞬間に彼が決断しているものは、その次の瞬間に彼がそれに成るもの」³である。すなわち、ロゴセラピーの基盤となっている人間観は、人間を、いかなる状況にあっても決断し、次の瞬間に決断したものに成っていく自由を持っている精神的な存在と見る。人間を、意味の充足と価値の実現に対して責任をもつ存在とみなす。ロゴセラピーは本質的に責任性への教育であり、この責任性から、自身の人格的かつ具体的な意味の充足に向かって自立して突き進むことを要請する。人間が自らの自由を自覚することにより、自己の責任に基づいて、意味と価値の世界に対して自己決定することを要請する。

フランクルが、心理学主義の克服を成し遂げてロゴセラピーを構想していくプロセスは、人間の中に発見した「精神 (Geist)」を心理療法の根幹に位置づけて、それを心理療法の枠組の中でロゴス化していく探究の軌跡であったとも考察することができる。その探究において、フランクルが「精神 (Geist)」をどのように理解していたのかを以下に論述していく。

II 「精神 (Geist)」への眼差し

大戦前の若きフランクルが、自身のニヒリズムの克服を目指して格闘し、また精神科医師・青少年相談助言者として、患者や青少年に対峙し彼らの困窮を救おうとしたとき、従来の心理学的平面に留まる人間像からは真の解決の糸口が見出せなかった。困窮している人間を精神的な苦境の中において見、より真実な人間像からスタートする心理療法とロゴスを希求したとき、精神的な次元を包括する人間観を抱かざるをえなかった。フランクルが青少年相談所での相談助言の場で、あるいはまた精神科医師としての臨床の場で対峙した人たち自らが、フランクルに「精神的な苦境」を訴えた。「患者は彼の世界観の苦境を、彼の精神的な支えのない不安定さと彼の人生の意味発見を求めての彼の苦闘を、私たちに

押し付ける。(中略) 彼らの完全に心的な苦境を、いわば精神的な領域の中へ移調する」⁴。

青少年の「精神的な苦境」は、彼等の最も根源的な「意味を求めての欲求」が満たされていないことであると見なすところまでに、フランクルの洞察は深まっていく。青少年は、「苦悩の意味」を求めていたのだ。フランクルは次のように述べる。「私たちが、人間に健康を取り戻させたいと望むとき、適応 (Anpassung) と形成 (Gestaltung) 以外に、人間がその中に突き進んでいかなければならない、さらなる次元がいったい存在するのだろうか？あるいはまた人間の心的 - 精神的な現実世界を正当に評価すべきであるとき、私たちがなお、私たちの人間像の中に含めなければならない最終的なカテゴリーはどんなカテゴリーなのだろうか？ そのように自問するとき、このカテゴリーは、充足のカテゴリー、意味発見のカテゴリーであるかもしれないという見解に到達する」⁵。人間が人間であることの本質は、最終的かつ本来的に意味を探し求めているということの中に存した。人間は、絶えず自分自身ではない何かあるものに向けて方向づけられ導かれている。彼が充足する意味、あるいはまた彼が会う他の人間的な存在に向かって、人間は、常に自分自身を超えた彼方を指し示して志向する。精神的な存在としての人間の超越性は、人間の実存の真髄であり核心であることをフランクルは洞察した。

精神分析の行為が目指すべき最高の格率は、一方における無意識的なものの要求と他方における現実の要請・拒絶との間の妥協の樹立であり、したがって現実世界への衝動性の適応である。それに対して個人心理学は、個人のあらゆる適応を越えて、自我の側からの、現実性の勇敢な形成に到達するという治療上の格言を持つ⁶。しかしフランクルが、心的な困窮を訴える人間の根底に精神的な「意味を求めての苦闘」を看破したとき、従来のフロイトの精神分析やアドラーの個人心理学では、彼等の苦悩の根源的な解決に至ることは不可能であると考えた。フランクルは、フロイトの精神分析とアドラーの個人心理学は、いずれも人間の全体像を見失っていると見なした。力動性心理学としての両者は、人間のすべての経験を心理的な平面で解釈するために偏狭な人間観しかもてなくなり、そのために、人間の精神性と人間の本来的根源的な志向性を無視して、人間を単なる本能的な衝動のメカニズムと見做し、人間の現実を心の内側で生起する心的事象に還元しているとフランクルは把握した。それらの偏狭な人間像を超え出るものとして、フランクルは、自身の人間像の中により広い次元、「意味発見」と「意味充足」の次元を取り入れていこうとした。意味発見と意味充足はベクトル的な方向性を持ち、個人心理学の外延的な「形成」の概念よりも包括的であるとフランクルは考えた。意味発見は、あらゆる個々の人間の人格に課せられている、充足されるべき価値可能性に向けられていた。身体的な症候の背後に、ただ単に心的な (seelisch) 原因だけを、心的発生 (Psychogenese) だけを見るのではなくて、フランクルは彼独自のアプローチでもって、なおその先の最終的な一步を踏み出し、心因性のものの背後にすべての動力学 (Affektdynamik) を越えて、全き人間を精神的な苦境の中において見た。心的に苦悩している者の背後に、フランクルはなお、精神的に格闘している者を、必然性と可能性の緊張の世界の中に、存在 (Sein) と当為 (Sollen) の緊張状態の

中に置かれている存在として見た。 فرانクルが困窮している人間を精神的な苦境の中において見、より真実な人間像からスタートする心理療法とロゴスを希求したとき、精神的な次元を包括する人間観を抱かざるをえなかった。フランクルは、人間存在のすべての深みと高みにおいて全人間の実存を顧慮し、人間の中における「精神 (Geist)」の自律性と優位性を承認し、人間存在の全体性を身体的・心理的・精神的な統一体として理解する人間像を描出した。

「精神的な次元」を取り入れて、より包括的な人間観に基づいた独自の心理療法で青少年や患者の苦悩の核心に向かっていこうとしたフランクルは、1938年に公刊された論文の中で、「心的な領域を超越して人間のすべての深層と高層における全人間の実存を顧慮し、それに応じて実存分析と呼ぶことのできる、まさしく心的な事象、特に神経症的な事象に関する理論」⁷について言及した。さらにフランクルは、患者の精神的な係留に寄与するために、彼に対して精神的なもののよりどころを与えるために、実存分析の形において、心理療法的治療の全体の中への世界観的な対決の包含による、心理学主義的逸脱の克服が重要であると主張する⁸。

フランクルが、精神科医・青少年相談助言者として、患者や青少年の苦境に真正面から対峙し、彼等の苦闘の最深の根底に、精神的な「意味を求めての苦悩」を洞察し、そこに向かってアプローチしていこうとした心理療法が、後にウィーン第三学派と呼ばれるようになるロゴセラピーであったと考察される。フランクルは、それに関して直截に次のように述べている。「人が身体的な症状の背後に心的な原因を見ることに、それ故に身体的な症状の心理的発生を発見し始めたとき、心理療法の出生時刻は時を打っていた。しかしさらになお最後の一步を踏み出し、心因性のものの背後に、神経症のすべての情動の力学を超えて、人間を彼の精神的な苦境の中にとらえ、方法論的な可能性を描出しようと試みる意味において、ここから援助することが必要である」⁹。ロゴセラピーは、人間における精神的なものを、身体的心理的なものに対して人間のより高い次元として、無意識的な深みにまで追究する。フランクルは次のように述べる。「私たちはさらに、心理療法が心理学主義の誤りに陥っていくのに代わって、精神的なものそのものの自律性を尊重することを要求している」¹⁰。

フランクルの人間理解によれば、人間は身体的および心理的な現象と明確に区別される精神的な現象の次元において、世界と自分自身に対して立ち向かうことができるというのだ。殊に、「精神 (Geist)」は、「心 (Seele)」と明確に区別され、心的な現象に従うのかそれともそれに抗するのかを決める、主体的な決断の自由が人間の中に存しているという見解である。その主体的な決断の場が精神の次元であり、精神的な次元にこそまさに人間の本質的な特徴があるという考えに、フランクルは到達する。

すなわち、人間は、すべての現実世界の領域に対して態度をとることができるということの中に、精神の本質があると見なした。この精神は、身体的な有機体の中心において生起するすべてのものとの間に距離を置くことができる。心理身体的な生起から、自身を一

定の距離だけ離して締め出すことのできる能力を持つ。精神は、衝動的な知性に対して態度を決めることができ、衝動的なものから自身を一定の距離だけ遠くへ引き離すことができるのだ。人間の精神性は、自己意識と自己決定、自由と責任を包含する。実存は精神的な存在であり、身体的な肉体としての生物学的な生命とは異なる法則に従う。「可能態である根源的な力 (Dynamis)」¹¹として特徴づけられた精神の根本的定義は、有機的なものからの実存的な解放の自由、有機的なものへの従属からの剥離の可能性、すなわち「自己距離化」の能力である。

フランクフルはさらに、精神性の本質は「自己超越」にあり、それが人間に自由をもたらすと考えた。自己超越によって、人は自分自身と環境の制約を超え出ることができる。人は自分を超越し、世界に、他者に、場合によっては神に向かって出ていくことによるのみ完全な人間となり、真の精神性を獲得することができるというのだ。フランクフルにとって、精神性の本質は自己超越の中にあり、それが人間に自由をもたらすと考えた。

フランクフルは、彼の心理療法の実践の場で、「精神の担い手・精神が現象する実存的中枢」としての「人格の理解」をクライアントに対する態度の根底に置き、あくまで決断の自由を留保して、対峙する人格の尊厳をどこまでも保持した。すなわち、若きフランクフルがロゴセラピーの構想において基盤として依拠した「精神 (Geist)」とは、人間の中に内在する根源的な力 (Dynamis) としての「自己距離化」と「自己超越」に基づいて、外界と自己の身心の状況に対して、世界に向かって解放された実存的な自由の中で為しうる、人格の中核における究極的決断の「場」あるいは「根拠」であると考察することができる¹²。

フランクフルは、青少年相談所での相談助言活動、また精神科医師としての臨床の体験の中で、従来の心理療法では根源的な解決ができない状況に突き当たり、そこで、人間の精神性に目を向け、精神的な次元を取り入れるより包括的な人間観に依拠したカウンセリングや心理療法が求められた。すなわち若きフランクフルの中で結晶し析出していった「精神 (Geist)」とは、観念的なものではなくて、フランクフルが真剣に対峙した青少年や患者の最深の内的な「根源的な苦悩」の救済の道を探求していく中で辿り着いた、「ロゴセラピー」の構想の契機となる彼の人間理解の核心であった。それは、「心 (Seele)」に対して「精神 (Geist)」の優位性を主張し、その「自己距離化」と「自己超越」の能力に基づいて、環境世界と自己に対して、「イエス」か「ノー」のいずれかを選択することのできる自由な「態度決定」の究極的な基盤であった。そして「精神 (Geist)」を導入する心理療法としての、フランクフルのロゴセラピーの構想への歩みは必然的に、結果的に心理学主義からの離脱の道を進んで行くプロセスを経ざるをえなかった。逆に言えば、若きフランクフルは、自身のニヒリズムと、ニヒリズムの変種である心理療法における心理学主義の克服を目指して歩んだ途上において、「精神 (Geist)」の次元の実在への認識に到達し、それに基づくことによって初めて、「意味と価値の問題」の前で立ち塞がっていた壁を突破することができたと考察することができる。そしてその探究のプロセスの結果として創出されたのが、「ロゴセラピー」であったと結論づけることができる。

第五章 註

- ¹ Vgl., Frankl, V.E.: Philosophie und psychotherapie, Zur Grundlegung einer Existenzanalyse, In: Schweizerische Medizinische Wochenschrift, Bd.69, 1939, S.709.
- ² Frankl, V.E.: Psychotherapie und Weltanschauung, Zur grundsätzlichen Kritik ihrer Beziehungen. In: Internationale Zeitschrift für Individualpsychologie III, 1925, S.250.
- ³ Frankl, V.E.: Homo Patiens, Versuch einer Pathodizee, Wien 1950, S.50. [V.E.フランクル (真行寺功訳) 『苦悩の存在論』新泉社, 1972年, 92頁。]
- ⁴ Frankl, V.E.: Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, In: Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, Bd.10, 1938, S.43. [V.E.フランクル (赤坂桃子訳) 「心理療法における精神の問題について」『ロゴセラピーのエッセンス』, 新教出版社, 2016年, 97頁。]
- ⁵ Ebenda, S.35. [邦訳 81頁。]
- ⁶ Ebenda, S.35. [邦訳 80-81頁。]
- ⁷ Ebenda, S.36. [邦訳 83頁。]
- ⁸ Ebenda, S.42. [邦訳 94頁。]
- ⁹ Ebenda, S.45. [邦訳 99頁。]
- ¹⁰ Frankl, V.E.: Philosophie und psychotherapie, Zur Grundlegung einer Existenzanalyse, a.a.O., S.709.
- ¹¹ Vgl. Zsok, O.: Der Arztphilosoph Viktor E. Frankl, München, 2005, S.75.
- ¹² 『フランクルの辞書』の中において、その消息が次のように記述されている。「ロゴセラピーは、精神的なものを人間の精神的な人格の中において認識し、それをロゴセラピーの人間的な表現方法 (たとえば、志向、決断、価値に向かっている努力、愛、自由、責任) の中において具体化する。そして、それを“精神的な”次元の中において位置づける (verorten)。」(Wörterbuch der Logotherapie und Existenzanalyse von Viktor Emil Frankl, Wien・Köln・Weimar 2008.)

終章 研究のまとめと課題

I まとめ

1980年に75歳の فرانクルは、ロゴセラピーのテーマについてスピーチしたとき、自ら次のように語っている。「喜んで告白させていただきますが、青年の頃、私は人生の明白な無意味さに絶望するという地獄を通り抜けなければなりませんでした。完全な、かつ究極的なニヒリズムを経験しなければなりませんでした。しかし私は、ニヒリズムに対する『免疫』を発見することができるまで闘いました。こうしてロゴセラピーが生まれたのです¹。若きフランクルの思想形成を、「ニヒリズムの克服の格闘」の視座に立って概観するとき、ロゴセラピー誕生までの軌跡が、その必然性を伴って鮮やかに再構成されて浮かび上がってくる²。

本研究は、ロゴセラピーの大枠が強制収容所体験前に既に出来上がっていたという認識のもとに、第二次世界大戦前にフランクルが構想したロゴセラピーが何を目指したものであったのかを探究していくために、戦前のフランクルの思想的変遷を追跡し「ロゴセラピー形成のプロセス」を究明していった。

第二次世界大戦前の若きフランクルは、フロイトとアドラーに接近するがやがて離れていく。その最も深い根本的な理由は、実はニヒリズムの克服の格闘の延長線上にあったと考えられる。フランクルの人間理解においては、人間の中に「意味への意志」が深く根を下ろし、意味と目的を発見し現存在を充足しようとして格闘する意志が何よりも根源的かつ本来的に存在していた。それ故に、自らはもちろんのこと心理療法においても、この「意味への意志」に忠えていかなければ、救いを求める者の真の安寧はないと考えたのだ。フロイトとアドラーの心理学では、フランクルの内奥の心的希求は満たされなかった。フランクルにとって問題となったことは、さまざまな主義において明らかになるニヒリズムに対して、その真実の姿を暴露しそれに立ち向かっていくことであった。フランクルのアプローチは、心理療法の範囲内での、ニヒリズムの変種である心理学主義に対しての抵抗であった。その最大の危険は、それが精神的な次元を否定し、すべてのものを心的なものの平面下へと投影することの中に存していた。心理学主義はただ単に精神的なものを見落とすだけではなくて、心的なもの内部で病理学的なものだけを見た結果、「精神 (Geist)」なき心理学をもたらしているとフランクルは考えた。精神分析と個人心理学はいずれも心理学主義の陥穽に嵌ってしまい、人間のすべての経験を心理的な平面に投影し、人間を単なる本能的な衝動のメカニズムとして取り扱っているというのが、フランクルの見解であった。人間は、衝動的なものによって駆り立てられた存在ではなくて、価値的なものによって引き付けられ、自由と責任において価値の実現をしようと決断する存在であると、フランクルは考えた。

心理学主義的な心理療法においては、精神の消失と並んで価値の消失が現出する。価値の排除は、人間の価値を目指しての努力を除外する。価値自由 (Wertfreiheit) と称される価値の排除は、最終的には「人間の人格的尊厳」を剥奪して「人間の利用価値」と取り違え、

人間を「モノ」にする。人間の尊厳を奪還し、現実の人間を真の姿で理解するためには、身体的・心理学的次元の範疇を超えて、意味と価値のカテゴリーを視野に入れる精神的な次元を包括する、真の人間理解へと歩を進めていかなければならないことに、若きフランクは次第に目が開かれていった。そのためには決断の自由の可能性に対して、根源的な能力で支える「精神 (Geist)」を顧慮していかなければならない。人間の行為の動機づけの問題は、人間の実存性の最高段階である認識論的次元と人間の精神性が顧慮されるときにだけ解決されうるとフランクは考えた。「意味への意志 (Wille zum Sinn)」と呼ぶ、人間の現存在を意味で充たそうとする実存的欲求が人間の中に根を下ろしているという人間理解とそこを起点とした心理療法の探求が、ロゴセラピー構想のスタートであった。すなわちフランクは、「精神 (Geist)」の次元を顧慮し、心理療法に「精神 (Geist)」の次元を導入することによって初めて、「意味」と「価値」の問題で苦悩している人間の解決の方向性を指し示すことができ、その問題に答えていくことができると考え、それは真の安寧と救済を提供する心理療法のための必要かつ十分な条件であると推察したのだ。そして、心理療法に精神的実存的な次元を包含して構想していく方向性の示唆を与えたのがアラーズとシュヴァルツであり、理論的な確固とした基盤を提供したのがシェーラーであった。

さらにまたロゴセラピーが、その理論的な構想を現実に適用可能なものにしていくためには、青少年相談所やクリニックでの臨床的な経験の蓄積と、シェーラー等の思想家たちからの影響との融合のプロセスが必要であった。殊に、青少年相談所での多くの実践の経験が、彼独自の心理療法であるロゴセラピーの構想に、大きな役割を果たしていく。フランクは、当時の若者たちの心的な困窮を救おうとして、若者たちに対して広やかな愛情と深い同情に満ちた眼差しで対峙し、困窮の真の原因を深く洞察し、より根源的な解決策を目指して全身全霊を傾けていった。フランクは自ら語っている。「私は、民衆大学と同じく、社会主義労働者青年団の組織でも定期的に講演を行っていた。そして、そのような何百回という講演の後には、そのつど、文書による質問にも返事を書いていた。これらの経験は財産となって私のうちに集積していき、青少年相談所における何千という来談者との接触で得たものと融合していった」³。

フランクは、青少年相談所に相談助言を求めてやってきた青少年に対して、人間対人間として真摯に対峙し、彼等にレッテルを貼ったり、あるタイプの人間として類型化して見ることなく、何の先入観を持つこともなく彼等の中に真実の人間の姿を見ようとした。ある理論、原理から出発して、その理論や原理を前提にして青少年を導き指導しようとしなかった。若きフランクが、青少年相談所において、苦悩する青少年に対峙して見たものは、裸の人間、人間そのものであった。若者の声に虚心に耳を傾け、その底に苦闘している人間そのものを見ようとした。そのとき、人間の実存の最も深い基盤に対しての普遍的な熟考へと導かれていった。その具体的な一つ一つの誠実な実践の中で築き上げていった彼の人間観は、フランクの中で整理され、ある確信となってロゴセラピーのアイデアへと結実した。

自分に与えられた現実や運命に対して、どのようなときでも、「ある態度をとることができる」という考えから出発した فرانクルのロゴセラピーの構想は、明晰な考察のもとに掘り下げられ鮮明化され実践されていく。人間は、自らに与えられた生物学的事実、心理学的事実、社会学的事実のそれぞれから自分を引き離し、それに対して態度をとることができる自由を持った存在であるという確信が、フランクルのロゴセラピーのベースとなる。人間は、身体的および心理的な現象と明確に区別される精神的な現象の次元において、世界と自分自身に対して立ち向かうことができるというのだ。殊に、フランクルは「精神(Geist)」と「心(Seele)」をはっきりと区別し、心理的な現象に従うのか、それともそれに抗するのかを決める「主体的な決断の自由」が人間の中に存しているというのが、フランクル独自の考えであり、その主体的な決断の場が、「精神(Geist)」の次元なのであり、その精神的な(geistig)な次元にこそ、まさに人間の本質的な特徴があると、フランクルは洞察した。すなわち、フランクルの説くロゴセラピーの基盤となっている人間観は、人間を「いかなる状況にあっても決断し、次の瞬間に決断したところのものになっていく自由を持っている」精神的な存在であると考え、どこまでも人間の可能性に信頼を置く人間観である。意味の充足と価値の実現に対しての責任を持つ存在としての理解をその中核に置く人間観である。そしてその意味と価値は主観的なものではなくて、客観的世界でありコスモスともいべき秩序ある世界である⁴。ロゴセラピーは、本質的に責任性への教育であり、この責任性から、人は、人格的存在の具体的な意味に向かって自立して突き進まなければならない。フランクルは、次のように明言する。「実存分析が最終的に意図していることは、人間が自身の自由について自覚することである。そしてロゴセラピーが最終的に意図していることは、人間が自己の責任に基づいて、意味と価値の世界の背景に対して、まさに『ロゴス(Logos)』とエートス(Ethos)の背景に対して、自覚をすることである」⁵。まさしく、その「最終的な意図」へと、若きフランクルは接近していこうとしていた。

戦前の若きフランクルの思想的変遷を追跡し、ロゴセラピー構想までのフランクルの思想形成を概観した上で、本研究において明らかになったことをまとめると、次のように記すことができる。

フランクルの生涯は、その青少年期から、「意味」と「価値」を求めての探究の歩みであった。その関心から、フロイト、アドラーに接近していくがフランクルの内的希求が満たされることなくやがて彼等から離れていく。自身のニヒリズムの克服を目指して格闘し、また精神科医・青少年相談助言者として、患者や青少年に誠実に対峙し彼らの困窮を救おうとしたとき、従来の心理学的平面に留まる人間像からは真の解決の糸口が見出せなかったのだ。殊に青少年相談所での実践の経験は、フランクルに大きな影響を与えたと考えられる。苦悩している青少年に対して、困窮を自ら乗り越えていくことができる援助を与えることの可能な現実的な対応が求められたのだ。そのとき、フランクルは、従来の心理療法の基盤となっている人間観からの指導助言では、彼らの困窮の克服の援助はできないと考えたのだ。困窮している人間を精神的な苦境の中において見、真の人間像からスタート

する心理療法を希求したとき、精神的な次元を包括する人間観を抱かざるをえなかった。そこで فرانクルは、これまでの心理療法に、「意味と価値の問題」、倫理的関心の問題を導入しようと試みたのだ。その試みは、これまでの心理療法の地平を飛翔し「精神 (Geist)」の次元へと眼差しを向けることによって、いわばこれまでの心理療法が抱いていた人間観の思索の方向性を止揚することによって初めて可能となった。すなわち「フランクルの闘い」とは、人間存在のすべての深みと高みにおいて全人間的実存を顧慮し、人間の中における「精神 (Geist)」の自律性と優位性を承認し、人間存在の全体性を身体的・心理的・精神的な統一体として構想し、世界観的な対決を恐れることなく、それを自らの実践に生かそうと試みる苦闘であった。フランクルは、心理学主義の克服を、青少年相談の実践から得た叡智と、シェーラーの哲学的人間学の現実化との融合により、「精神 (Geist)」の次元への洞察を手掛かりにして成し遂げる。その成果が心理療法において理論的に結実したものが、フランクルの「ロゴセラピー」であったと考察することができる。若きフランクルが内面的な格闘の末に獲得した知見は、自らの強制収容所での「十字架の試練 (experimentum crucis)」⁶を耐え抜くことで実証されることとなる。「心理学主義に由来する非人格化と非人間化の傾向に対しての戦い」は、強制収容所からの解放後のフランクルの生涯を一貫して貫き通され、フランクル自身のその後の「生きる意味」となっていく。

II 今後の課題

本研究において、「強制収容所体験前のロゴセラピー形成過程」を追究し、殊にこれまでの研究では光が当てられていなかったフランクルの実践の「青少年相談所の創設とそこでの活動」を、フランクルの原資料に基づいて解明した。そしてさらに、ロゴセラピーの構想過程において、シェーラーの哲学的人間学からの示唆によって成し遂げた、フランクルの「理論と実践の融合」を、フランクルの人間観の変容を探ることにより明らかにした。

残された課題として、四つ挙げておきたい。

第一は、フランクルが具体的にどのように青少年相談所の設立に関わりそこでどのような具体的実践をしていったのかを、フランクル自身の記述をもとにして考察していただくのではなく、より客観的に裏づける資料を用いて解明していく必要がある。本研究で参考文献として用いた資料は、フランクルの娘のガブリエルが、フランクルの直接の教え子やガブリエルの娘、ウィーン大学の中央図書館等の協力のもとに収集したテキストに基づいている。大戦前のフランクル自らが執筆した文献等の資料は、これ以上は見つからないと考えられる。しかしフランクルが誰か他の人に宛てた手紙、あるいは、フランクルの活動や仕事の足跡を記録している誰か他の人の資料についてはまだ発掘の余地は残されていると考えられる。若きフランクルの思想形成について、フランクル以外の人が記述した資料により、より客観的に検証していく必要があると考えられる。

第二の課題は、フランクルの思想的展開に対しての批判的検証の必要性である。本研究における大戦前の若きフランクルの思想形成の探究は、「フランクルの側の視点」に立って

進めていったものである。フロイト、アドラー、シェーラー等の思想の受容・批判・超克も、あくまで فرانクルが彼等の思想をどう受けとめたのかというところを出発点にして展開していった。フロイト、アドラーの心理学を心理学主義と見なしたフランクルの把握、そしてシェーラーの哲学的人間学の中に心理学主義を克服していくことのできる根拠を見出し、それを契機として新しい心理療法を構想したフランクルのシェーラー理解は、果たして本当に妥当であったのか、誤解や曲解、未消化のところはなかったのか、確認していかなければならない作業が残されている。フロイト、アドラー、シェーラー等の原典となるテキスト、およびフランクルの考えに対しての批判等も読み進めることにより、研究をより深め広めていくとともに客観的に検証していく必要があると考える。また合わせて、シェーラー以外の思想家や哲学者、ハイデッガー、マルセル、ヤスパース、ブーバー等からの思想的影響も探究されなければならない。

第三の課題は、フランクルの「精神 (Geist)」の概念を固定したもののみみるのではなく、彼の生涯とともに変遷していった可能性をもつものとして捉えて、戦後のフランクルの思想をさらに追究していくことである。フランクルは、彼の構想した「ロゴセラピー」は大戦前にその根本的な理念や思考の筋道が既にほぼでき上がっており、強制収容所での体験は、自分の理論にそれがアウシュヴィッツのような限界状況ですら妥当するという模範的な証明に関する具体例を付け加えただけであると述べている⁷。しかし、本当に、フランクルの強制収容所体験は、彼の理論の単なる実証的な例証に過ぎなかったのか⁸。大戦前の「ロゴセラピー」の構想と大戦後の「ロゴセラピー」の理論に差異はなかったのか。殊に、フランクルがロゴセラピーの理論的構想の基軸に据えた概念「精神 (Geist)」に深化や変容はなかったのか、改めて検証される余地が残されていると考える。さらにフランクルは後年、実体ではなく「遂行の現実」の中において、志向的に機能として現象する「精神 (Geist)」の本質を、「Bei-sein (もとに - 在る)」という概念を用いて説明する⁹。「Bei-sein」の解明は、大戦前のフランクルがロゴセラピーの構想で依拠した「精神 (Geist)」の概念との関連性の中で探究されなければならない、重要な課題であると考えられる。

第四の課題は、現代の教育に、どのようにフランクルの「ロゴセラピー」の考えを生かしていくことができるのかを考察していくことである。いかなる素質を持ち、いかなる環境に置かれていようとも、前向きに生を肯定して生きていくのか否かを決定していくのは、最終的には自らの決断次第であるという、フランクルの「態度決定」に着目したロゴセラピーの基盤となる考えは、現代の教育を考えていく上で、大きな示唆を与えていると考えられる。自己の存在を、自分の内的な素質と置かれている外的な状況において、一回性と唯一無二性のものとして、かけがえのないものとして体験することができる時、世界に対して使命と責任を自覚するようになり、いかなる困難と苦悩をも乗り越えていくことのできる力を授けられるというロゴセラピーの考えは、現代の学校教育が抱えている問題を克服していくことのできる知見を包摂していると考えられる。

ロゴセラピーの基盤にある人間観と提示している治療の方向性は、教育の目的と教育内

容、教師の教育活動と教育のあり方に対して、重要な提言をしていると考えられる。人間を、「自身に特有な『意味』を実現し、独自の自己生成を成し遂げる」責任を有している「精神的な人格」として把握するフランクルの人間観は、本来の自己である「実存」に向かって精神的に働きかけることこそ、教育の本来の使命でなければならないのではないのかと問いかけている。ロゴセラピーの「教育への応用」ではなくて、ロゴセラピーの思想の理解による「教育の内在的省察」が問われている。

そこでは、自身の唯一性と一回性において、「生きる意味」を自らの責任と決断において見出していくことのできる力、すなわち視界を広げ、自らの良心に耳を傾け、「その人独自の意味」を発見することのできる力を磨くことを教育の使命と考え、教師はその理念と視座を実践活動に取り入れていくことが要請される¹⁰。ロゴセラピーの思想を現実の学校教育にどのように具体的に生かしていくのか、その術を探っていくことが、残された課題である。

終章 註

- 1 Frankl, V.E.: *The Will to Meaning*, New York 1969, p.131.
Vgl., Klingberg, H. Jr.: *When life calls out to us*, New York 2001, p.48. [ハドン・クリングバーグ・ジュニア(赤坂桃子訳)『人生があなたを待っている I』みすず書房, 2006年, 84頁。]
- 2 フランクルは、戦後、次のように述べている。「おそらく私は、ニヒリズムの些細な兆候に対してとても過敏なのであろう。だがもしそうだとすると、自分のうちに潜むニヒリズムを私自身が乗り越えなければならなかったからこそ、それほどまでに過敏になっているのだということだけは理解してほしい。自分が乗り越えなければならなかったからこそきっと、私は、どこにニヒリズムが隠れているかを嗅ぎつけることができるのだらう。」(Frankl, V.E.: *The Feeling of Meaninglessness*, Milwaukee 2010, p.234. [V.E.フランクル(広岡義之訳)『虚無感についてー心理学と哲学への挑戦ー』青土社, 2015年, 329頁。])
- 3 Frankl, V.E.: *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen*, München 1995, S.51. [V.E.フランクル(山田邦男訳)『フランクル回想録』春秋社, 1998年, 89-90頁。]
- 4 Frankl, V.E.: *Theorie und Therapie der Neurosen*, Wien 1956, S.175. [V.E.フランクル(霜山徳爾訳)『神経症II その理論と治療』みすず書房, 1961年, 107-108頁。]
- 5 Frankl, V.E.: *Der Leidende Mensch* Bern 1975, S.145. [V.E.フランクル(山田邦男監訳)『制約されざる人間』春秋社, 2000年, 224頁。]
- 6 Frankl, V.E.: *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen*, a.a.O., S75. [邦訳 130頁。]
- 7 Frankl, V.E.: *Was nicht in meinen Büchern steht, Lebenserinnerungen*, a.a.O., S77. [邦訳 131-132頁。]
Frankl, V.E.: *Theorie und Therapie der Neurosen*, a.a.O., S.170. [邦訳, 97頁。]
- 8 フランクルは、1992年に公刊された著書『*The Feeling of Meaninglessness*』のなかで、次のように述べている。「新しい心理療法とその根底にある人間の構想は、会議室のテーブルや処方箋の机の上で作り上げられたものではない。それは、防空壕や爆撃による穴の困難な修行の中で、捕虜収容所や強制収容所の中で形作られ具現化されたものである。」(Frankl, V.E.: *The Feeling of Meaninglessness*, op. cit., p.200. [邦訳, 275頁。])
- 9 Frankl, V.E.: *Der unbedingte Mensch*, Bern, Verlag Hans Huber 1975, S.83-94. [V.E.フランクル(山田邦男監訳)『制約されざる人間』春秋社, 2000年, 48-75頁。]
- 10 フランクルは、これに関して次のように述べている。「実存的真空の時代には、教育は伝統と知識の伝達に自らを限定し自己満足してはならず、むしろ、普遍的な価値の崩壊によっても影響を及ぼされないような、独自の意味を見出すことのできる人間の能力を洗練しなければならない、とわれわれは言ってきた。独自の状況に隠されている意味を見出すことのできる人間の能力は、良心である。したがって教育は、意味を見出す手段を授けていかななければならない。」(Frankl, V.E.: *The Will to Meaning*, op. cit., p.63. [V.E.フランクル(大沢博訳)『意味への意志ーロゴセラピーの基礎と応用ー』ブレーン出版, 1979年, 103頁。]) また別の箇所でも、次のように述べている。「私たちは無意味感が広がりつつある時代に生きている。このような私たちの時代においては、教育が心に留めて重要視しなければならないのは、ただ単に知識を伝えることではなくて、人間が、あらゆる個々の状況に内在している要請を聞き取るのに十分なほどに耳聴くあるよう、良心を洗練することである。」(Frankl, V.E.: *Das Leiden am sinnlosen Leben; Psychotherapie für heute*, Freiburg 1977, S.30. [V.E.フランクル(中村友太郎訳)『生きがい喪失の悩みー現代の精神療法ー』エンデルレ書店, 1982年, 36頁。])

引用参考文献一覧

ヴィクトル・E・フランクルの著作

- Frankl, Viktor E.: "Freude, schöner Götterfunken...", In: derTag, 28. Jänner, 1923.
: Geistesversportlichung, In: der Tag, 4. März, 1923.
: Zur mimischen Bejahung und Verneigung, In: Internationale Zeitschrift für Psychoanalyse, 10. 1924.
: Psychotherapie und Weltanschauung, Zur grundsätzlichen Kritik ihrer Beziehungen, In: Internationale Zeitschrift für Individualpsychologie III, 1925.
: Über die Notwendigkeit individualpsychologischer Jugendberatung, In: Gemeinschaft, Mitteilungsblatt der Sektionen des Internationalen Vereins für Individual-Psychologie, 1. 1926.
: Schafft Jugendberatungsstellen, In: Die Mutter, 2.Jg., Nr.39, 1926.
: Zur Psychologie des Intellektualismus, In: Internationale Zeitschrift für Individualpsychologie, IX-XII, 1926.
: Gründet Jugendberatungsstellen!, In: Der Abend, 31. 8. 1926.
: Zur Frage der Jugendberatung, Eine Entgegnung, In: Die Bereitschaft, 7, Nr.5, 1927.
: Gründet Jugendberatungsstellen, In: Die Praxis, Mitteilungen für die Organisationsarbeit der Sozialistischen Arbeiterjugend Deutschösterreichs, Nr.4, 1927.
: Was ist Jugendberatung?, In: Der Mensch im Alltag, 1.Jg., Nr.3, 1927.
: Jugendberatung, In: Der Mensch im Alltag, 1.Jg. Heft 5/6, 1927.
: Liebe und Verantwortlichkeit, In: Sachlichkeit 2, Nr.1, 1927.
: Jugendberatung!, In: Der Tag, 18. Februar, 1928.
: Jugendberatung, In: Die neue Generation, Publikationsorgan des Deutschen Bundes für Mutterschutz und der Internationalen Vereinigung für Mutterschutz und Sexualreform 5. 1928.
: Jugend in Not ; Die Wiener Jugendberatungsstellen, In: Arbeiter-Zeitung, 22.07. Nr.202, 1928.
: Jugendberatung, In: Die Bereitschaft 8, Nr.11/12, 1928.
: Die Wiener Jugendberatungsstellen, In: Lehrlingsschutz, Jugend- und Berufsfürsorge, 5.Jg., Nr.10, 1928.
: Jugendberatung Methoden und Ergebnisse, In: Blätter für das Wohlfahrtswesen der Stadt Wien 27.Jg., Nr.268, 1928.
: Was ist Jugendberatung? In: Frankl, V.E., Bühler, Ch., Kogerer, H., Lukacs, H. (Hrsg.), Jugendnot und Jugendberatung, Selbstverlag, Wien 1929.
: Selbstmordprophylaxe und Jugendberatung, In: Münchener Medizinische Wochenschrift, 76.Jg., Nr.40, 1929.
: Typische "Fälle" aus der Jugendberatung, In: Zeitschrift für Kinderschutz, Familien- und Berufsfürsorge, 21, Nr.11, 1929.
: Die Lebensgemeinschaft als Lebensaufgabe, In: Das kleine Blatt, 22. Dezember 1929.
: Jugendberatung, In: Enzyklopädisches Handbuch des Kinderschutzes und der Jugendfürsorge, Leipzig 1930.

- : Wirtschaftskrise und Seelenleben, Vom Standpunkt des Jugendberaters, In: Sozialärztliche Rundschau, 4, Nr.3,1933.
- : Kinder als Ausreisser, In: Arbeitersonntag, 15. 4. 1934.
- : Aus der Praxis der Jugendberatung, In: Psychotherapeutische Praxis, 7. 1935.
- : Die seelische Not der arbeitslosen Jugend, In: Blätter für Krankenpflege und Fürsorge, 3.Jg., Nr.11-12, Nov.-Dez. 1936.
- : Erotic Problems of modern Youth, In: Marriage Hygiene, III, No.3, February. 1937.
- : Zur geistigen Problematik der Psychotherapie, In: Zentralblatt für Psychotherapie und ihre Grenzgebiete, 10, 1938. [V.E.フランクフル(赤坂桃子訳)「心理療法における精神の問題について」『ロゴセラピーのエッセンス』,新教出版社,2016年。]
- : Seelenärztliche Selbstbesinnung, In: Der christliche Ständestaat, 5, 1938.
- : Philosophie und psychotherapie; Zur Grundlegung einer Existenzanalyse, In: Schweizerische Medizinische Wochenschrift, 69, 1939.
- : Ärztliche Seelsorge, Wien 1946. [V.E.フランクフル(霜山徳爾訳)『死と愛』みすず書房,1957年。]
- : Homo Patiens, Versuch einer Pathodizee, Wien 1950. [V.E.フランクフル(真行寺功訳)『苦悩の存在論』新泉社,1972年。]
- : Theorie und Therapie der Neurosen, Wien 1956. [V.E.フランクフル(霜山徳爾訳)『神経症Ⅱ その理論と治療』みすず書房,1961年。]
- : Man's Search for Meaning; an introduction to logotherapy, USA 1965.
- : The Will to Meaning, New York 1969. [V.E.フランクフル(大沢博訳)『意味への意志ーロゴセラピーの基礎と応用ー』ブレーン出版,1979年。]
- : Der Wille zum Sinn, Bern 1972. [V.E.フランクフル(山田邦男監訳)『意味への意志』春秋社,2002年。]
- : Der Leidende Mensch; Anthropologische Grundlagen der Psychotherapie, Bern 1975.
- : ...trotzdem Ja zum Leben sagen; Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager, München 1977. [V.E.フランクフル(霜山徳爾訳)『夜と霧』みすず書房,1961年。V.E.フランクフル(池田香代子訳)『新版 夜と霧』みすず書房,2002年。]
- : Das Leiden am sinnlosen Leben; Psychotherapie für heute, Freiburg 1977. [V.E.フランクフル(中村友太郎訳)『生きがい喪失の悩み』エンデルレ書店,1982年。]
- : Der Mensch vor der Frage nach dem Sinn, München 1979.
- : Eine autobiographische Skizze, In: Die Sinnfrage in der Psychotherapie, München 1981. [V.E.フランクフル(赤坂桃子訳)「自伝的素描」『精神療法における意味の問題』北大路書房,2016年。]
- : Was nicht in meinen Büchern steht; Lebenserinnerungen, München 1995. [V.E.フランクフル(山田邦男訳)『フランクフル回想録』春秋社,1998年。]
- : Logotherapie und Existenzanalyse, Weinheim und Basel 2002.
- : Frühe Schriften 1923-1942, Gabriele Vesely-Frankl (Hrsg.), Wien /München /Bern 2005.
- : The Feeling of Meaninglessness, Milwaukee 2010. [V.E.フランクフル(広岡義之訳)『虚無感についてー心理学と哲学への挑戦ー』青土社,2015年。]
- : Dem Leben Antwort geben; Autobiografie, Weinheim 2017.

V.E.フランクル:「意味喪失の時代における教育の使命(講演)」(工藤澄子訳)『国学院大学
日本文化研究所紀要』第24巻,1969年。

ヴィクトル・E・フランクルの伝記

Klingberg Jr., Haddon: When life calls out to us, New York 2001. [ハドン・クリングバーグ・ジュニア(赤坂桃子訳)『人生があなたを待っているⅠ』『人生があなたを待っているⅡ』みすず書房,2006年。]

Eleonore Frankl, Alexander Batthyany u.a.: Viktor Frankl, Wien IX, Erlebnisse und Begegnungen in der Mariannengasse 1, Innsbruck-Wien 2005.

ヴィクトル・E・フランクルに関する辞典

Wörterbuch der Logotherapie und Existenzanalyse von Viktor Emil Frankl, Wien・Köln・Weimar 2008.

ヴィクトル・E・フランクルの研究文献

Batthyány, Alexander: »Immer schon war die Person am Werk«, Viktor E. Frankls Weg zu Logotherapie und Existenzanalyse, In: Otmar Wiesmeyr, Alexander Batthyány (Hrsg.) Sinn und Person, Weinheim und Basel 2006. [A. バッチャニー「ヴィクトル・E・フランクル博士の生涯とロゴセラピーおよび実存分析の発展」V.E.フランクル(広岡義之訳)『虚無感について』青土社,2015年。]

Fetz,Reto Luzius, Graeßner,Melanie: Die wertpragmatische Methode, Frankls Therapeutische Umsetzung von Schelers ORDO AMORIS, In: Viktor Frankl und die Philosophie, Batthyány, Dominik, Zsok,Otto (Hrsg.) Wien 2005.

Gritschneider, Moritz: der Einfluss der Philosophie Max Schelers auf Logotherapie Viktor E. Frankls, In: Viktor Frankl und die Philosophie, Batthyány, Dominik, Zsok,Otto (Hrsg.) Wien 2005.

Heckmann, Worfhart: “Geistige Person” bei Viktor E. Frankl und Max Scheler, In: Viktor Frankl und die Philosophie, Batthyány, Dominik, Zsok,Otto (Hrsg.) Wien 2005.

Kreitmeir, Christoph: Sinnvolle Seelsorge, München 1995.

Längle, Alfred: Viktor Frankl, Eine Begegnung, Wien 1998.

Lukas, Elisabeth: Arzt und Philosoph, München-Wien 2005.

Lukas, Elisabeth: Der Seele Heimat ist der Sinn, München 2005.

Lukas, Elisabeth: Inspirationen für die Seele, München-Wien 2015.

Raskob, Hedwig: Die Logotherapie und Existenzanalyse Viktor Frankls, Wien 2005.

Riemeyer, Jörg: Die Logotherapie Viktor Frankls und ihre Weiterentwicklungen, Bern 2007.

Zsok, Otto: Der Arztphilosoph Viktor E. Frankl, München 2005.

雨宮徹「V.E.フランクルにおける“Bei-sein”の概念について」関西倫理学会編『倫理学研究』第32巻,2002年。

雨宮徹「フランクルにおける『自己超越』の概念について」大阪府立大学大学院人間文化学研究所・総合科学研究科編『人間文化学研究集録』第8巻,1999年。

雨宮徹「フランクルにおける『自己超越』と『自己距離化』」大阪府立大学大学院人間文化学研究所・総合科学研究科編『人間文化学研究集録』第9巻,2000年。

石橋孝明『今、生きる意味を問うー応用倫理学の諸問題ー』ナカニシヤ出版,1998年。

今井伸和「フランクルにおける『苦悩』の概念ーその人間形成論的意義と形而上学的有意性ー」三重短期大学生生活科学研究会編『紀要』第56巻,2008年。

岡本哲雄「V.E.フランクルの思想における〈意味〉と〈超意味〉ー人間生成を考える視点か

- らー」近畿大学教職教育部編『教育論叢』第9巻, 1998年。
- 岡本哲雄「フランクフル臨床哲学の現代的可能性—その歴史的意味と教育への示唆—」近畿大学教職教育部編『教育論叢』第17巻, 2005年。
- 岡本哲雄「人生（教育）から問われて生きるという実践—教育者の養成とロゴ・セラピー（2）—」『近畿大学教職教育部 教育論叢』第19巻, 2009年。
- 香川豊『『生きる意味』について—フランクフルの人間観—』『甲南女子大学研究紀要. 人間科学編』第39巻, 2003年。
- 香川豊「生きる意味—フランクフルにおける自己実現の思想—」『甲南女子大学研究紀要. 人間科学編』第40巻, 2004年。
- 川原理子『フランクフル「夜と霧」への旅』平凡社, 2012年。
- 斎藤啓一『フランクフルに学ぶ』日本教文社, 2000年。
- 桜井佳樹『『生の意味』と教育—フランクフルのロゴセラピー・実存分析を手がかりとして—』『広島大学教育学部紀要』第一部, 第35巻, 1986年。
- 佐々木勝彦「V. E. フランクフルにおける『自己超越と宗教』『わたしはどこへ行くのか—自己超越の行方—』教文館, 2013年。
- 霜山徳爾『共に生き、共に苦しむ—私の「夜と霧」—』河出書房新社, 2005年。
- 宗孝文「実存分析と教育—V. フランクフルの場合—」『京都大学教育学部紀要』第12巻, 1966年
- 真行寺功「Home Patiens—実存分析と教育—」『京都大学教育学部紀要』第5巻, 1959年。
- 菅井保「個人の尊厳と教育—フランクフルの Homo patiens における尊厳—」『東海大学課程資格教育センター論集』第5巻, 2006年。
- 菅井保「呼びかけによる教育学—研究序説—」『東海大学課程資格教育センター論集』第4巻, 2006年
- 菅井保『シェーラーからフランクフルへ』春風社, 2012年
- トウィディ, ドナルド・F. (武田健訳)『フランクフルの心理学』みくに書店, 1965年。
- 永田勝太郎「フランクフルの実存分析と今日の日本」日本精神衛生会編『心と社会』第39巻, 2008年。
- 永田勝太郎「全人的医療の核としての実存分析(ロゴセラピー)」日本心身医学会編『心身医学』第34巻, 1994年。
- 中村友太郎「フランクフルの『ロゴセラピー』における人間観」上智人間学会編『人間学紀要』第12巻, 1982年。
- 長谷川壽郎「V. E. フランクフルの思想—その人間学と教育との関連—」郡山女子大学編『紀要』第37巻, 2001年。
- 長谷川壽郎「V. E. フランクフルの思想の補遺」郡山女子大学 編『紀要』第38巻, 2002年。
- 広岡義之『フランクフル教育学への招待』風間書房, 2008年。
- 水田信「こころの病と健康—『絶望』は病か—」日本医学哲学・倫理学会編『医学哲学医学倫理』第13号, 1995年。
- 宮下 聡子「フランクフルにおける『意味』の地平」東京大学大学院人文社会系研究科倫理学研究室編『倫理学紀要』第16巻, 2008年。
- 宮地正卓『運命・自由・愛—フランクフルの「生きる意味」随想—』中央法規, 2002年。
- 諸富祥彦「生から問いかけられている者」としての人間—V. フランクフルにおけるニヒリズム克服の問題—」教育哲学会編『教育哲学研究』58巻, 1988年。
- 諸富祥彦「訳者解説」教育思想研究会編『教育と教育思想』第12集, 1992年。
- 諸富祥彦『フランクフル心理学入門—どんな時にも人生には意味がある—』コスモス・ライブラリー, 1997年。

諸富祥彦『生きる意味－ビクトール・フランク 22 の言葉－』KK ベストセラーズ, 2010 年。

諸富祥彦『ビクトール・フランクの言葉』コスモス・ライブラリー, 2012 年。

諸富祥彦『フランク－夜と霧－』NHK 出版, 2013 年。

諸富祥彦『知の教科書－フランク－』講談社, 2016 年。

宗孝文『実存分析と教育－V.フランクの場合－』京都大学教育学部紀要, 第 12 卷, 1966 年。

山田邦男「自己実現と自己超越－ V・E・フランクに即して－人間形成論試論 (二)」『大阪府立大学紀要 (人文・社会科学)』第 27 卷, 1979 年。

山田邦男「運命・自由・責任 (その一)－V.E.フランクの人間像について－」『大阪府立大学紀要 (人文・社会科学)』第 29 卷, 1981 年。

山田邦男『生きる意味への問い－V.E. フランクをめぐる－』校成出版社, 1999 年。

山田邦男編『フランクを学ぶ人のために』世界思想社, 2002 年。

山田邦男「苦悩の意味－ヴィクトール・フランクの人間観－」大谷大学真宗学会編『親鸞教学』第 86 号, 2005 年。

山田邦男『フランク人生論－苦しみの中でこそ、あなたは輝く－』PHP 研究所, 2009 年。

山田邦男『フランクとの対話』春秋社, 2013 年。

レスリー, ロバート・C. (萬代慎逸訳)『イエスとロゴセラピー－実存分析入門－』ルガール社, 1978 年。

『imago－ヴィクトール E. フランク－』(現代思想臨時増刊号), 青土社, 2013 年。

関連文献

Sauer, Hugo: Jugendberatungsstellen; Idee und Praxis 1914-1923, Leipzig 1923.

Scheler, Max: Die Stellung des Menschen im Kosmos, Darmstadt 1928. [マックス・シェーラー (亀井裕・山本達訳)『シェーラー著作集 13－宇宙における人間の地位・哲学的世界観－』白水社, 1977 年。]

阿内正弘『マックス・シェーラーの時代と思想』春秋社, 1995 年。

アラーズ, ルドルフ (西園昌久・板谷順二訳)『実存主義と精神医学』岩崎書店, 1965 年。

五十嵐康彦『愛と知の哲学－マックス・シェーラー研究論集－』花伝社, 1999 年。

生松敬三『現代思想の源流－1920 年代への照射－』河出書房新社, 1977 年。

生松敬三『20 世紀思想渉猟』岩波現代文庫, 2000 年。

江口布由子「19-20 世紀転換期のオーストリアにおける児童福祉」九州西洋史学会編『西洋史論集』第 43 号, 2005 年。

小此木啓吾・河合隼雄『フロイトとユング』講談社学術文庫, 2013 年。

シェーラー, マックス (吉沢伝三郎訳)『シェーラー著作集 1－倫理学における形式主義と実質的価値倫理学 (上)－』白水社, 1976 年。

シェーラー, マックス (吉沢伝三郎・岡田紀子訳)『シェーラー著作集 2－倫理学における形式主義と実質的価値倫理学 (中)－』白水社, 1976 年。

シェーラー, マックス (小倉志祥訳)『シェーラー著作集 3－倫理学における形式主義と実質的価値倫理学 (下)－』白水社, 1980 年。

畠中和生『マックス・シェーラーの人間学－生命と精神の二元論的人間観をめぐる－』ナカニシヤ出版, 2013 年。

ベラー, スティーヴン (桑名映子訳)『世紀末ウィーンのユダヤ人』刀水書房, 2007 年。

増谷英樹『図説・ウィーンの歴史』河出書房新社, 2016 年。

松本昭『ニヒリズムと教育』理想社, 1966 年。

リチャード, リケット (青山孝徳訳)『オーストリアの歴史』成文社, 1995 年。